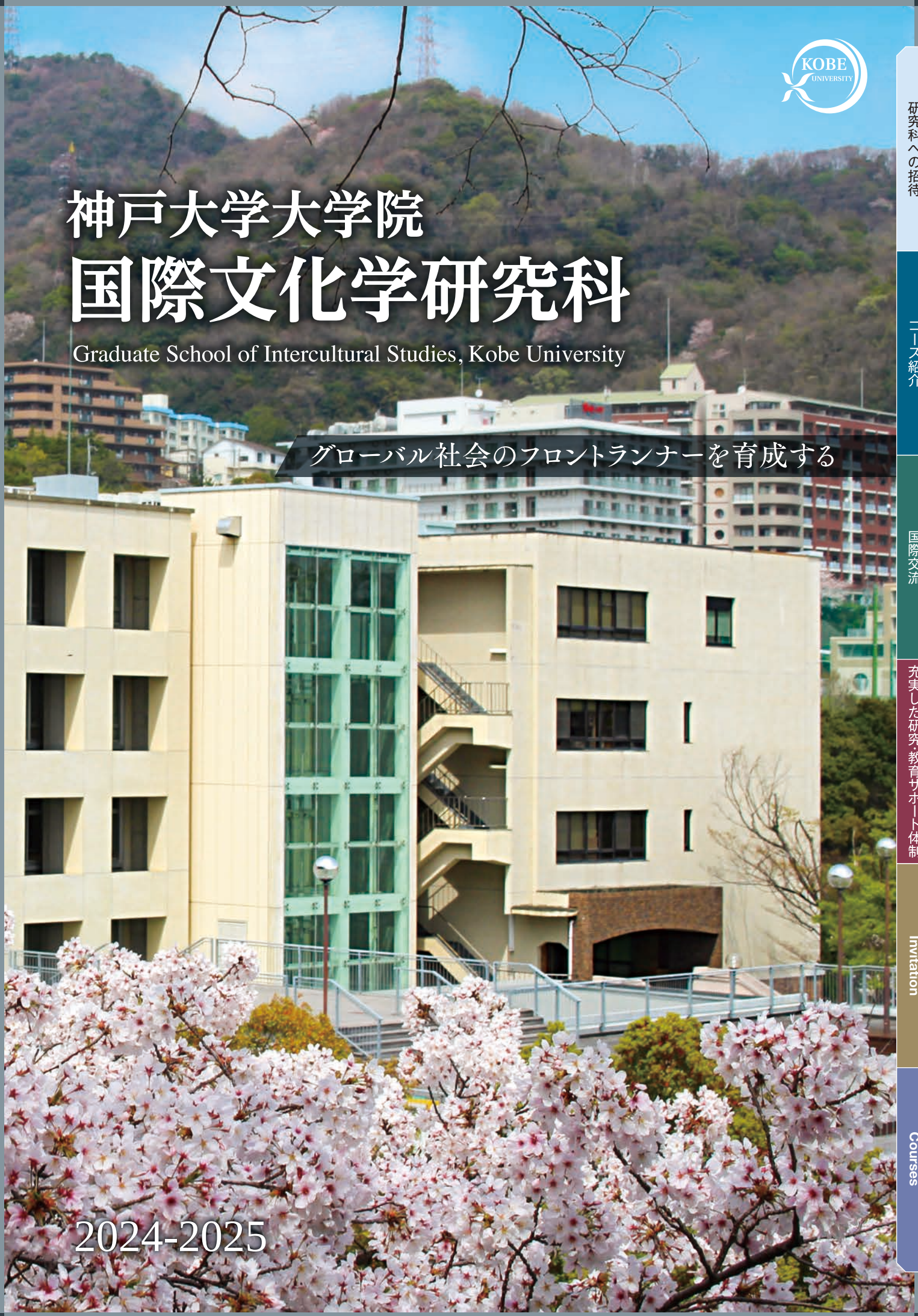


神戸大学大学院
国際文化学研究科

Graduate School of Intercultural Studies, Kobe University

グローバル社会のフロントランナーを育成する

2024-2025

「人新世」を生き抜く
――未来を切り開く「何か」とであうために

私たちを取り巻く世界はいわゆるグローバル化によってますます変わってきているといわれます（地球規模の交流の歴史は古いのですが、昨今のそれは、速度といい質量といい、桁違いです）。また、ICTs の進歩によって、コミュニケーションの形が変わってきています。ポスト COVID で、オンラインでできることの幅は確実に広がりました。近年の生成 AI の発展は、新たな他者の出現も予感させます。

バックグラウンドや価値観を異にする人々、文物が身近に交錯するようになったとき、激しい摩擦や対立が起こるのは当然です。それは単に考え方を少し変えただけではどうしようもない根深いものもあります。さらに近年では、「人新世」と呼ばれ、人間と自然環境との介入が大いに問題となってきています。私たちはこの世界をどう生きていったらいいのでしょうか。

カメルーン出身の人類学者であり哲学者、フランシス・B・ニャムンジョ（Francis B. Nyamnjoh, 1961―）は、あらゆる存在の「不完全さ」に世界の本質を見ようとします。この世界は、「不完全」な人間が、不完全なモノや超自然的な力と向き合い、不完全な世界を創造しているのだというのです。このなかには、ICTs などの人工物も含まれます。すべてはかりそめのもので、ナイジェリア出身の作家、エイモス・チュッツオラ（Amos Tutuola, 1920―1997）が描く「奇妙な生き物」が、借り物ばかりで「完璧な紳士」に化けおおせたように、表面ばかりのことなのかもしれません。『やし酒のみ』のなかでは、「奇妙な生き物」の正体は、ただの骸骨にすぎませんでした（*The Palm-Wine Drinkard,* Faber and Faber, 1952）。

異質なものとの出会いは、どんなに頑張っても理想的な調和、ハーモニーやシンフォニー、ポリフォニーなどを提供することはまれです。むしろカコフォニー（不協和音）を伴うのが普通なのです。

しかしニャムンジョさんは世界や人間に絶望はしません。人間はそこで、分断や孤立、あるいは支配の誘惑に抵抗しながら、カコフォニーを認識し、それと折衝して折り合い、最終的には利益を互いに分かち合うコンヴィヴィアリティ（conviviality, 一義的には「宴会」のこと）の実現を目指すのだ、とニャムンジョさんは説きます。

人間社会はうっかりすると、単一の価値観のもとに強者が弱者から一方的な搾取を行い、ゼロサムゲームに堕したりする危険が常に伴います。これはニャムンジョさんだけでなく様々な優れた思想家たちが異口同音に警鐘を鳴らしていることです。

ニャムンジョさんの説くところによれば、究極的には、人間として生きていくということは、貸したり借りたりの繰り返しです。人生はすべて貸し借りのめぐりあわせであるということ、永遠に返すことができない借りがあるということを認めることが大切です。人間、自然環境、資源、あるいは先祖たちなどの超自然的な力などに、返せない負債があるのだ、というのです。

私たちは現在の自分たちの存在が、あちこちから、さまざまなものをもらった結果であることを忘れがちです。私たちはある意味では常に負債を抱えているのですが、その負債の多くは、恩恵を受けた当の本人には返済できないものです。そもそもその人生の中では返済しえないものもあります。人間はすべて相互につながり、相互に支えあって依存しあっていることをも忘れがちです。互酬や贈与、分配と利他の論理が、人間性、社会性の本質の一つであり、実はもっとも根本的な生存戦略であることを忘れてしまうのです。

もとより「不完全」な私たちが生きていくには、さまざまな道具が必要です。また、目的に合致した既存の道具は、ないかもしれません。一見がらくたにみえるかもしれないそれらを組み合わせて、「ブリコラージュ」にも似た作業が必要なのです。

ブリコラージュのルールは「ありあわせ」でなんとかやりくりする、すなわち、その時、手元にある道具と材料で、ということです。道具と材料はいずれも、その時点で何をしようとしているのかとは関係なく集められた雑多なものです。何かの目的で集められたものではありません。それらは、いろいろな機会にストックが更新され、増加し、また前にものを作ったり壊したりしたときのものが集まっているのです。ひとはその操作に道具が適応するかどうかとにかくやってみるのですが、必要と思えるならいつでもためらうことなく道具を取りかえるし、あるいは、起源や形態が異質なものであってもためらうことなく複数の道具を同時に試みるのです。

私たち大学や大学院について、卒業や修了してから目に見えて役立つスキルや能力をいかに身に着けるか、という議論がなされることがあります。間違っているというのではありません。単純な目的と手段をセットで考える、テレオロジーに堕してしまうと底の浅い単純な考え方になってしまいます。

私たちは、もっと遠い未来を見据えていますし、人間はもっと複雑で多面的なものです。すぐ役に立つことは、すぐに役に立たなくなるのです。私たちは、みなさんのキャリアに直接結びつくこともちろん提供したいと思いますが、もっと切実に考えているのは、これまでは頼りにしていたものごとが役に立たなくなったときに、みなさんを支える「誰か」や「何か」との予想していなかった出会いの場をつくりだしたい、ということです。それは、人それぞれ違うかもしれません。いや違うはずです。例えば、あるひとにとってそれはフランス語の言語能力かもしれず、留学先で出会った、故郷から遠く離れた友人たちとのネットワークやコミュニケーションかもしれず、あるいはたまたま教室や図書館の片隅で出会った一片の詩であるかもしれません。

私たちが提供したいのは、むしろ、目的がはっきりした道具――スキルであるよりは、むしろ、そうしたみなさんそれぞれで異なる、みなさんの今後の未来を支える「何か」との出会いを提供する環境のほうなのです。極端に言えば「生」を劇的に変容させる何かとの「出会い」の場です。ここではブリコラージュ的な雑多なものであることが、積極的な意味を持ってきます。私たちの２専攻 15 コースは、こうした出会いを提供するにふさわしい構成になっていると思います。

幸いなことに、この研究科でひとときを過ごした数多くの研究者や実務家たちが、各方面で活躍しています。みなさんが、この研究科のなかで、みなさんそれぞれを支える「何か」、と出会うことができることを、心から祈念しています。

第８代国際文化学研究科長
梅屋　潔

研究科の理念と目標 Our mission and aims

国際文化学研究科は、異文化共存を見据えた文化研究の先端的領域を開発し、人類文化を把握するための新たなパラダイムを構築することをその理念としています。

そしてそれを実現するために、以下の５つの研究目標を設けています。

（1）文化を複合体と捉え、異文化間の関係性を視座として文化研究を行う。
（2）複合体としての文化を、衝突、融合、交渉などの異文化間の相互作用という視座から、動態的に研究する。
（3）グローバル化する現代世界の文化変容を多角的に研究する。
（4）言語や情報に関わる先端的コミュニケーション研究の開発を行なう。
（5）中心 / 周縁、文明 / 未開、先進 / 後進などの一元的で単眼的なパラダイムから、多元的で複眼的なパラダイムへのシフトを実現し、現代世界の文化動態に則した研究方法を開拓する。

アドミッション・ポリシー Admission Policy

国際文化学研究科では、深い異文化理解能力と自在なコミュニケーション能力を有し、豊かな学識と創造的な研究能力を備えた人材を育成することを目指しています。

上記の教育研究上の目標をふまえ、本研究科が求めるのは次のような学生です。

前期課程
Master's Program

・文化の多様性をふまえ，異文化間の関係性を多角的に探究することに強い意欲を持ち，それを達成する基礎的な能力を有する学生
・言語情報コミュニケーションの動態を深く理解し，現代のグローバル社会の諸課題に取り組むことに強い意欲を持ち，それを達成する基礎的な能力を有する学生
・高い専門性の上に立った学際的研究を行うことに強い意欲を持ち，それを達成する基礎的な能力を有する学生
［求める要素:知識･技能、思考力･判断力･表現力、主体性･協働性、関心・意欲］

後期課程
Doctoral Program

・文化の多様性と相互作用の動態を究明し，文化研究の先端的な領域を主体的に開拓することに強い意欲を持ち，それを達成する基礎的な能力を有する学生
・言語情報コミュニケーションの諸問題を探求し，グローバル化する現代世界を多角的に研究することに強い意欲を持ち，それを達成する基礎的な能力を有する学生
・高度な専門性の上に立った領域横断的な研究を行うことに強い意欲を持ち，それを達成する基礎的な能力を有する学生
［求める要素:知識･技能、思考力･判断力･表現力、主体性･協働性、関心・意欲］

ディプロマ・ポリシー Diploma Policy

国際文化学研究科は、深い異文化理解能力と自在なコミュニケーション能力を有し、豊かな学識と創造的な研究能力を備えた人材を育成することを目指しています。この目的を達成するため、以下に示す方針に従って当該学位を授与します。

前期課程
Master's Program

本研究科に原則２年以上在学し、履修要件として定めた所定の単位を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、修士論文又は特定の課題についての研究成果の審査及び最終試験に合格すること。全学のディプロマ・ポリシーに定める人間性・創造性・国際性・専門性の四つに加え、学生が修了までに身につけるべき能力を次のとおりとします。

・文化が多様であること、それらの文化が相互に影響しながら変容するものであることを理解し、異文化間の関係性を多角的に探究することができる能力。
・言語情報コミュニケーションの動態を深く理解し、現代のグローバル社会のさまざまな課題に取り組むことができる能力。
・高い専門性の上に立った学際的研究を行うことができる能力。

後期課程
Doctoral Program

本研究科に原則３年以上在学し、履修要件として定めた所定の単位を修得し、かつ必要な研究指導を受けた上、博士論文の審査及び最終試験に合格すること。全学のディプロマ・ポリシーに定める四つの能力に加え、学生が修了までに身につけるべき能力を次のとおりとします。

・多様かつ相互に影響しながら変容する諸文化の構造と動態を究明し、文化研究の先端的な領域を主体的に開拓することができる能力。
・言語情報コミュニケーションの諸課題を探求し、グローバル化する現代世界を多角的に研究することができる能力。
・高度な専門性の上に立った領域横断的な研究を行うことができる能力。

目　次

国際文化学研究科への招待
アドミッション・ポリシー、ディプロマ・ポリシー …… 1
研究科の構成・研究科の育成する人材 …… 2
博士前期課程・博士後期課程 …… 3

15 の多様な専門コース
日本学 …… 4-5
アジア・太平洋文化論 …… 6-7
ヨーロッパ・アメリカ文化論 …… 8-9
文化人類学 …… 10-11
越境文化論 …… 12-13
国際関係・比較政治論 …… 14-15
モダニティ論 …… 16-17
先端社会論 …… 18-19
芸術文化論 …… 20-21
言語コミュニケーション …… 22-23
感性コミュニケーション …… 24-25
情報コミュニケーション …… 26-27
外国語教育システム論 …… 28-29
外国語教育コンテンツ論 …… 30-31
先端コミュニケーション論 …… 32
日本語教師養成サブコース …… 33

国際交流
留学案内 …… 34-35
国際文化学研究推進インスティテュート …… 36-37

充実した研究・教育サポート体制
就職と進学 …… 38-39
全学の研究支援施設・学生寮・奨学金 …… 40
研究会・研究誌の紹介 …… 41
研究サポート …… 42
論文題目 …… 43
教員一覧 …… 44-45

Invitation to the Graduate School of Intercultural Studies …… 46-49

15 Specialized Courses …… 50-57

国際文化学研究科への招待

INVITATION TO THE GRADUATE SCHOOL OF INTERCULTURAL STUDIES

研究科の構成　世界とかかわり、世界で生きるための 15 の専門コース

専攻と領域

現代社会の文化のあり方を比較考察し、文化間の対立・紛争といった現代的な課題に取り組むには、個別地域の文化及び異文化間の相互関係を考察すると同時に、グローバル化する世界の文化の動向それ自体を考察する能力を培うことが不可欠です。

そのため、国際文化学研究科では、個別地域文化研究を踏まえ、異文化間の相互作用のあり方や特質を多角的に解明する「文化相関専攻」と、グローバル化による文化の現代的位相を解明する「グローバル文化専攻」の 2 専攻を置いています。

「文化相関専攻」には、各地域固有の文化特性や文化の変容を学際的に研究する「地域文化系領域」、異文化の接触・対立・交流の実態を多角的に探求する「異文化コミュニケーション系領域」を置き、(1) 個別地域文化の理解、(2) 異文化間の関係性・相互作用の理解、(3) 異文化コミュニケーション能力の育成を目指します。

「グローバル文化専攻」には、グローバル化に伴う西洋近代原理の揺らぎの中にある、現代の社会的・文化的状況をトータルに研究する「現代文化システム系領域」、言語・非言語的コミュニケーション活動と多様な情報メディアの利用に関わる諸問題を探求する「言語情報コミュニケーション系領域」、外国語教育に関する先進的研究と当該分野の卓越した実践者の養成を目標とする「外国語教育系領域」、さらに、後期課程では、国際電気通信基礎技術研究所（ATR）との連携の下に、連携講座「先端コミュニケーション論」を置いています。そして、これらの領域を通して、(1) グローバル化による文化変容の解明と新たな公共文化の構築、(2) 先端的なグローバルコミュニケーションの開発、(3) グローバル化時代の外国語教育システムの開発を目指します。

専攻	領域	コース
文化相関 個別地域文化研究を踏まえ、異文化間の相互作用のあり方や特質を多角的に解明する	**地域文化系** 各地域固有の文化特性や文化の変容を学際的に研究する	日本学
		アジア・太平洋文化論
		ヨーロッパ・アメリカ文化論
	異文化コミュニケーション系 異文化の接触・対立・交流の実態を多角的に探求する	文化人類学
		越境文化論
		国際関係・比較政治論
グローバル文化 グローバル化による文化の現代的位相を解明する	**現代文化システム系** グローバル化に伴う西洋近代原理の揺らぎの中にある、現代の社会的・文化的状況をトータルに研究する	モダニティ論
		先端社会論
		芸術文化論
	言語情報コミュニケーション系 言語・非言語的コミュニケーション活動と多様な情報メディアの利用に関わる諸問題を探求する	言語コミュニケーション
		感性コミュニケーション
		情報コミュニケーション
	外国語教育系 外国語教育に関する先進的研究と当該分野の卓越した実践者の養成を目標とする	外国語教育システム論
		外国語教育コンテンツ論
	連携講座（博士後期課程に設置）	先端コミュニケーション論

研究科の育成する人材　世界へ広がるキャリアパス

博士前期課程

文化相関専攻

—専門職として—

・国連、JICA 等国際機関の専門職
・日本文化の紹介・交流などを企画する各種団体職員・公務員
・博物館・美術館の文化プランナー
・高度な専門知識を備えた中学校・高等学校教員（英語系）
・地方自治体・企業における文化交流事業の企画立案者
・外資系・合弁企業の研修担当者
・文化活動・異文化理解を先導する地域 NPO リーダー

—実践対応力をもったビジネスプロとして—

・外資系・合弁企業社員
・商社等企業社員
・日本企業の海外進出要員

グローバル文化専攻

—専門職として—

・音楽・美術等の芸術に通じた文化政策専門職員、アートマネジャー
・ジェンダー・公共性等、変容する現代文化の諸問題に取り組むジャーナリスト、公務員
・高度な専門知識を備えた中学校・高等学校教員（英語系）
・語学教育系企業の社員・教員
・言語教育教材等の編集者
・留学生センター研究員・専門職員・アドバイザー
・日本語教員
・通訳・翻訳家
・言語系・IT 系企業研究所職員

—実践対応力をもったビジネスプロとして—

・ソフトウェア技術者
・システムエンジニア

博士後期課程

世界の「国際文化学研究」を推進する先進的研究者

—専門職として—

・国際機関 / 研究所研究員
・国公立 / 企業系研究所等研究員
・大学・短期大学・高等専門学校教員

取得できる学位

博士前期課程　修士（学術）
博士後期課程　博士（学術）

取得できる資格（博士前期課程）

中学校教諭専修免許状（英語）
高等学校教諭専修免許状（英語）

博士前期課程 ― 夢に応じた2つの「学び」の形 ―

国際社会のキーパーソンを育てる<キャリアアップ型>、時代をリードする新進研究者を育てる<研究者養成型>
― 入口から出口まで、目的に応じた多様なスタイル ―

	キャリアアップ型	研究者養成型
一般入試 **社会人特別入試** **外国籍学生特別入試**	**1.筆記試験（基礎科目）** 外国語、情報、日本語（外国籍学生特別入試のみ）から選択。ただしコースごとに選択可能な科目を定めているので、詳細は募集要項を参照のこと。 **2.筆記試験（専門科目）** **3.口述試験**	
推薦入試	提出された書類により選考し、合否を決定します。	
カリキュラム	●キャリアアップのための高度な外国語能力･情報処理能力･プレゼンテーション能力を育成する演習科目 ●一方通行でないインタラクティブな少人数制「特殊講義」を中心に履修 ●所定の単位の修得と修了研究レポートの提出で修士号が取得可能	●指導教員による充実した個人指導（チュートリアル） ●研究者としての基礎学力を培う「高度専門演習」を中心に履修 ●後期課程の「特別演習」履修も可能 ●修士論文、または複数業績を組み合わせた「修士フォリオ」の提出
進路像	修士号を取得し、専門職として国際的に活躍する	後期課程入試を経て、後期課程に進学を希望する学生に対応。研究者や高度専門家としての道を歩む

2つの教育プログラム

博士前期課程にはキャリアアップ型プログラムと研究者養成型プログラムがあり、入学後に、いずれかを選択します。

キャリアアップ型プログラム

前期課程修了後、就職を希望する学生に対応した教育プログラムです。幅広い専門的知識と実践的な応用能力の修得によって、キャリアの高度化を目指します。

特殊講義を中心とした所定単位の修得と、キャリアデザインに即した修了研究レポートの提出によって、修士号が取得できます。

研究者養成型プログラム

前期課程修了後、後期課程入試を経て、後期課程への進学を希望する学生に対応した教育プログラムです。

研究者や高度専門家の養成を目指したカリキュラムが提供されています。高度専門演習を中心とした所定単位の修得と修士論文（または修士フォリオ）の提出が修了要件になります。

その他

日本語教師養成サブコース（→ P.33）、ダブルディグリー・プログラム（→ P.35）があります。

アカデミック・スキル演習

各分野で研究を進めるうえで必要な方法論・技術などのアカデミック・スキルを効率的に修得することを学習目標とします。

- IT スキル実習
- アカデミック・コミュニケーション（英語）
- アカデミック・ライティング（英語）
- アカデミック・ライティング（日本語）
- 社会研究方法論
- フィールド調査法
- 統計・計量分析法

修士フォリオ

修士フォリオとは、修士論文に代えて提出できる、一つのテーマのもとでゆるやかに関連する複数の研究成果から構成されるものです。単一の論文という形式にとらわれず、従来は修士論文として認められなかった多様な研究成果作品・調査報告などがフォリオの一部として認められます。職業や職場との関連をふまえた実践的な研究が行いやすくなり、また複数回にわけて提出するため、計画的な執筆や調査が可能になります。

博士後期課程 ― 自立した研究者を育てる「学び」のスタイル ―

専門分野を深く究める<コースワーク型>
― 3年間で博士号を取得するための多様で柔軟なサポート ―

	コースワーク型
一般入試 **外国籍学生特別入試**	**1.口述試験** **2.提出された論文についての審査**
特別推薦入試	提出された書類により選考し、合否を決定します。
研究テーマ	コースの研究分野に即したテーマ
カリキュラム	個人研究
研究指導体制	指導教員が中心となりコース全教員がサポート
博士号取得のプロセス	＜1年次＞　コースの共同演習で構想を発表、学術論文の投稿、博士基礎論文の提出 ＜2年次＞　学術論文の投稿、学会発表、博士予備論文の提出 ＜3年次＞　毎月1回、部分草稿をコースの共同演習に提出、全教員から指導とサポートを受ける。博士論文の提出
期待される成果	個人の自由な発想と独創性を最大限に生かした学術的研究成果

文化相関・地域文化系

日本学コース

日本学コースでは、世界の多様な文化の中で日本文化を相対化しつつ、日本という地域における人間の営みを、文化の面から明らかにします。文学・芸術・宗教・思想などの文化や社会に関する古代から現代にいたるきわめて広範囲の諸問題に取り組み、共に研究し学んでいこうと考えています。

日本の文化や社会を深く理解するためには、古文書解読や資料調査を求められることも多いのですが、そのための専門的な能力を高める機会も提供しています。通俗的な日本論に惑わされることなく、高度の専門的技量と学問的能力をもって日本の文化や社会を論じられる人材を育てることを目指しています。

進路実績

（前期課程） 関西学院大学職員、船井電機、アップオン、NEXCO中日本、コウキ商事、兵庫県立高校教諭、初芝学園中学·高校教諭ほか。

（後期課程） 学芸員（芸北民俗芸能保存伝承館、高知県立歴史民俗資料館、茶道資料館、平和祈念展示資料館）、兵庫県庁職員、国立公文図書館、高校教諭（群馬県立高校、私立灘中学·高校）、神戸大学百年史資料室、桃山学院大学国際教養学部准教授、上海外国語大学日本文化経済学院准教授、関西学院大学言語教育センター朝鮮語講師、吉林大学外国語学部日本語学科講師など。

在籍学生数

（前期課程） 7名
（後期課程） 4名

論文テーマ例

（前期課程） 「職員会議の変化と1980年代」「神戸市の男女共同参画事業と少子化」「三島流兵法書にみる村上水軍の「軍楽」」「但馬城崎『温泉時縁起』の研究」「18世紀初頭の華道の思想」「『今昔物語集』の楊貴妃説話の典拠をめぐって」「対外宣伝雑誌における日本芸能のイメージ」「靖国神社問題を再考する」「'Made in Italy' in Contemporary Japan」「戦後日本の『純潔教育』」「三島由紀夫の思想」「ホラーゲームにおける恐怖表現」「熊本藩の雅楽伝承」ほか。

（後期課程） 「『日本霊異記』の冥界説話から見る冥界観の変貌」「囃子田の演技の実践に関する民俗誌的研究」「ドキュメンタリー映画における音」「米軍占領下沖縄における文化政策とラジオ」「移動する領主をめぐる説話の諸相」「近世藩儒の研究」「戦前の映像文化（幻燈・玩具映画・小型映画）の受容とその歴史的変遷」「新しい波」と1950年代のアヴァンギャルド芸術運動ほか。

所属教員の紹介

板倉　史明　教授　日本文化表象論特殊講義ほか
日本映画・映画学。映画学の方法論をベースにして、国際的かつ歴史的な視座から日本映画を研究しています。

長　志珠絵　教授　日本社会変容論特殊講義ほか
近現代日本の文化史、ジェンダー史。最近のテーマは戦争の記憶論、米軍占領下日本の文化研究。

昆野　伸幸　教授　日本言語文化論特殊講義ほか
日本思想史。1920年代から40年代にかけてのナショナリズムについて、歴史意識や宗教といった視点から研究しています。

寺内　直子　教授　日本芸能文化論特殊講義ほか
日本伝統音楽·芸能論・民族音楽学。身体を用いて表現する音や芸能などに注目し、日本列島の文化を、アジアや世界の様々な文化との関連の中で動的にとらえます。

新任教員2025年10月着任予定

所属学生からのメッセージ

田中　やよいさん

（博士後期課程３年）
大阪市立大学文学研究科前期博士課程修了
研究テーマ：1943 年鳥取地震に見る災害アーカイブの近代史

私は、災害の記録がどのようにアーカイブ（保管、利用、伝達）されていくのか、1943年鳥取地震の事例を中心に研究しています。近年、大規模な災害の発生により、過去の災害記録が見直され、学際的に扱われています。そうした過去の災害記録は、「何を記録しようとしたのか」という点に、発災当時の社会状況などが反映されます。1943年鳥取地震はアジア太平洋戦争期に発生し、東南海地震（1944年）や三河地震（1945年）とともに「戦争に隠された」と評されてきました。私は、当時の社会における総力戦体制の影響に着目して、公文書や新聞、雑誌などの分析を行っています。そのことを通じて、災害アーカイブが社会との関係でどのように形成されているのか、検討していきたいと考えています。

進学にあたっては、いくつかの懸念がありました。大学院修了から数年経ち、研究テーマも新たに着手し始めたものであること、現住地と大学が離れていること（片道4時間程度）、就業していることなどです。受験情報を集めるなかで、こうした懸念について「どのようにすれば実現可能になるか」という姿勢で対応していただいたことや、研究科案内（この冊子です）でさまざまな立場の院生が所属していることを知り、この研究科を選びました。

研究テーマについては、当初、研究計画書を作成した時点では、展望できていない部分がありました。しかし、ゼミやコース指導を受け、ほかの院生の研究報告を聞く機会を得たことで、自分の研究テーマに対して多角的な視点を持つことができたように思います。通学には少し時間がかかるのですが、ゼミの日程や時間を調整することで、参加できています。

なお、2020年度は大学に行くことができませんでしたが、同期型オンライン形式で、ゼミ、コース指導、コロキアムが実施されました。とくに、ゼミはオンライン化によって参加する機会が増え、論文指導や他の院生の報告を聞く時間があったことで、孤立感なく研究を続けられました。学修環境の変化のなかで、大学院に所属していることを改めて意識した年になりました。

松元　実環さん

（博士後期課程３年）
神戸大学国際文化学研究科博士前期課程修了
研究テーマ：戦後日本の「性」教育

わたしは、戦後日本の性教育である「純潔教育」について研究をしています。敗戦とそれに伴う占領によって様々な新しい制度が作られる中で、特に子どもや若年層の性的逸脱を問題視して開始されたのが純潔教育です。その内容は現在の性教育の基礎となりつつも、より幅広く、時には実践的な側面を持つのが特徴です。

純潔教育に関する研究は、現在の性教育への関心を発端とするものが多く、加えて女性の人権問題への関心に基づくものが多く見られます。そこで、わたしは男性を対象にすることで、純潔教育をより体系的に捉えることを目指しています。具体的には、当時の教科書や教育雑誌などを集めたり、実際に純潔教育に関わっていた方にインタビューしたりすることで、これまであまり注目されてこなかった観点から研究対象を捉え直す試みを行っています。

大学院では、さまざまな専門分野の先生方の授業を受けることができます。さらに、日本学はコース発表の機会も多く、領域を渡って多面的なアドバイスを受けられるなどの充実したサポート体制が魅力です。また、そこで学ぶ学生の研究対象もさまざまであるため、自らの視野を広げながら専門性を高めていくことができる環境で、充実した研究生活を過ごすことができています。

修了学生からのメッセージ

谷口　紗也さん

（2022 年度博士前期課程修了）
研究テーマ：「世阿弥著『風姿花伝』における美学的キーワードの考察―英訳・日本語現代語訳比較を通じて―」
現在、シオタニ株式会社勤務

室町時代に能楽を成立させた世阿弥は、彼の人生のうちで20冊あまりもの能楽論書を執筆しました。私の研究テーマは、そんな世阿弥が現代に残した能楽論書のひとつである『風姿花伝』の翻訳比較から、世阿弥の美的キーワード「位」に関する解釈を考察することです。

この課題は野上豊一郎の「能の伝統的な研究は、外国人の眼を持って見直し、外国人の頭を持って考え直すところから始めなければならない」という主張から出発しています。また、誰かの言葉を自分の言葉で捉え直し、それらを出力する「翻訳」という行為には、異言語間は勿論、同一言語内での言い換えにおいても多かれ少なかれ翻訳者自身の解釈が織り交じるという特徴があります。これらのことから、『風姿花伝』に登場する美学的キーワードが海外の能楽論研究者にどのような解釈が成されているのか、また現代語訳と英語翻訳ではどのような差異があるのか、こうした疑問点を世阿弥能楽論である『風姿花伝』の現代語訳と英語翻訳を比較するという手法で調査していくことを目指しました。

大学院でのほとんどの講義は少人数制であり、ディスカッションやプレゼンテーション中心の能動的学習が魅力の一つだと思います。専門だけでなく国籍やバックグラウンドの異なる仲間と自身の研究テーマに絡めた議論を交わすことにより、充実した学生生活を送ることができました。

福島　可奈子さん

（2019 年度博士後期課程修了）
ブリュッセル自由大学哲学・文学研究科修士課程修了
2018-2019 年度日本学術振興会特別研究員 DC2
研究テーマ：戦前日本の映像文化史（幻燈・玩具映画・小型映画）
現在、日本学術振興会特別研究員 PD、武蔵野美術大学非常勤講師

現在わたしたちが当然のごとく毎日見る「映像」は、人々がいつ発見し、文化としてどう育んできたのでしょうか。戦後にテレビなどの電子機器が流通するまで、映像とは暗闇のなかに映し出す光のイメージでした。私が専門とするのは、日本人が西洋から輸入された様々な映像機器（光学装置）と出合い、自家薬籠中の物とする明治時代から戦前までの映像文化史です。そのなかでも博士後期課程では、プロフェッショナルによる映画作品ではなく、無名のアマチュアや子供が家庭や集会などで楽しんだ映像文化を、三時代の流行―明治期の幻燈、大正･昭和初期の玩具映画、昭和初期の小型映画―から掘り下げて研究しました。それにより従来の映画史研究では見過ごされてきた、日本の映像産業文化の多様性と技術的な連続性を明らかにしました。

私の研究では膨大な史料の精査が必要であったため、ときには研究過程で五里霧中になることもありました。しかし日本学コースでは、少人数制に加えてコース発表の機会が多く、毎回様々な研究領域の教授陣から具体的なアドバイスが得られたため、狭隘化しがちな視野を正しながら研究テーマを深めていくことが可能でした。また学年ごとに段階的な論文の提出が必須であったため目標が立てやすく、博士論文完成に向けて着実に執筆することができました。また在籍中に、神戸大学の協定校であるパリ･ディドロ（第7）大学へ交換留学し、シネマテーク･フランセーズなど現地の博物館での調査や研修にも参加しました。日本とフランス、映像と他芸術との相関関係から、理論研究だけにとどまらない実践経験を積むことができたのも、国際文化学研究科･文化相関専攻･日本学コースならではの魅力だと思います。

博士号を取得した現在、私自身も学生を指導する立場です。これまでご指導下さった先生方のような的確な指導ができているのか自問自答の日々ですが、博士後期課程で学んだ理論と実践が、現在の研究生活の何より大切な基礎になっていることは間違いありません。

Q&A

文学研究科の教育・研究内容との違いは何ですか？

国際的な視野から教育・研究を行っています。また、文学研究科では扱われることの少ない学際的、横断的研究分野や研究テーマを積極的に取り上げています。

仕事を持ちながら教育課程を修了することができますか？

これまで在職中の院生に対しては、5、6時限目を開講するなどの対策を取ってきました。事前にコース教員と相談されることをお勧めします。なお、博士前期課程の学生の場合、長期履修制度を申請すれば、2年分の学費で最長4年まで修了年限を延ばせる場合があります。

文化相関・地域文化系

アジア・太平洋文化論コース

現代のアジア・太平洋地域は、経済や国際交流等の面で激しい変動を経験しながら急速に発展しています。その意味では今まさに地球上でも最もホットな地域の一つであると言えるわけですが、それらの表面的な発展の流れを追うのみではこの地域の持つ特質は理解できません。東アジアにせよ、東南アジアや太平洋地域にせよ、各地域が古くから保持してきた複雑きわまりない多彩な伝統というものがあり、その伝統がグローバル化の波をかぶりつつ変容してきた結果が、現在の姿なのです。したがって、この地域の特質を深く理解しようと思えば、社会構造、宗教、歴史、経済状況等々の諸方面から掘り下げた専門的な研究が不可欠となります。本コースでは、それらの専門的な研究視点、研究方法を多様な教授陣が様々な専門領域の授業で伝授し、指導する体制を整えています。

就職実績

（前期課程） アジア･太平洋地域関連で活動している諸企業、諸団体等への就職が予想されます。最近の修了者の就職先例:八重洲出版、トランス・コスモス（株）。

（後期課程） 日本での大学･短大･高専･各種研究所、企業などへの就職の他、留学生の場合には出身国での大学や企業における専門職への就職等も期待されます。最近の修了者の就職先例:中国・内蒙古大学専任講師。内蒙古師範大学専任講師。中国・北京外国語大学外国語学院専任講師。

在籍学生数

（前期課程） 4名

（後期課程） 0名

論文テーマ例

- バンコクの中間層をデモに駆り立てた要因の研究―PDRC及びUDDにおける末端支持者の政治意識―
- インドネシアにおける大学生の恋愛と性をめぐる葛藤
- 国際交流活動と進路選択―東南アジア青年の船を事例に―
- アイヌ文化の表象と実践―白老町における文化活動を事例として
- 初期日豪関係の展開と日本イメージに関する歴史学的研究
- 明代（14-17世紀）の雲南麗江ナシ族･木氏土司
- 清末から中華民国初期の内モンゴルにおける近代学校教育の展開と知識人の輩出―ハラチン地域と帰化城トゥメド地域の事例を中心にして―
- 清代内モンゴルにおける農地所有とその契約に関する研究―帰化城ﾄｩﾒﾄ旗を中心に―（第12回アジア太平洋研究賞受賞博士論文）

所属教員の紹介

伊藤　友美　教授　東南アジア社会文化論特殊講義ほか

フィールドワークの手法を中心に、タイを中心とした上座仏教圏の社会、宗教、女性などの分野を主として研究しています。

谷川　真一　教授　中国社会経済論特殊講義ほか

現代中国の政治と社会、国際関係などの分野を主として研究しています。

橋　誠　准教授　東アジア社会文化論特殊講義ほか

マルチ・アーカイヴァル・アプローチにより、近現代モンゴルを中心とした東アジアの政治外交、社会経済の歴史を主に研究しております。

貞好　康志　教授　東南アジア国家統合論特殊講義ほか

インドネシア現代史、華僑華人研究などの分野を主として研究しています。

深川　宏樹　准教授　オセアニア社会文化論特殊講義ほか

文化人類学、社会人類学、オセアニアの社会と文化、人間概念と社会性の研究などの分野を主として研究しています。

所属学生からのメッセージ

DOU YUNHAO さん

（博士前期課程２年）
華東師範大学歴史学部卒業
研究テーマ：「大躍進運動における大衆動員政策に関する研究」

私は、小さな頃からずっと歴史に興味を持ち、学部は歴史学部に進学しました。学部時代は、歴史学の授業を受け、毛沢東時代の中国に関心を持つようになり、それに緊密な繋がりがある大衆動員政策のやり方と効果について研究しようと、具体的な研究計画を立てる時に、本研究科の谷川先生の論文に大いに啓発され、アジア･太平洋文化論コースへの進学を決めました。

大学院の授業では、受動的に先生の話を聞くのではなく、先生や他の学生と議論し、自分の疑問を投げかけ、自分の思想を述べることが大切だと思います。授業では主に発表と議論が行われます。つまり、専門書･論文を読み、その内容を要約し、疑問点を挙げ、授業中に議論します。それを通して、批判的な思考力と問題意識を養いながら、研究論文の構造と研究のやり方も身につけます。

本コースでは、異なる研究分野の諸先生から、細かい指導を受けることができます。また、授業で先生と議論する機会も多く、社会学、人類学、歴史学、政治学など、様々な分野の考え方･研究方法に接触し、アドバイスがもらえ、多角的に問題を分析することができます。それがアジア･太平洋文化論コースの魅力だと思います。

張　徳陽さん

（博士前期課程２年）
香川大学経済学部卒業
研究テーマ：「香港人のアイデンティティ変容に対する両文三語政策が与えた影響」

私は学部時代には経済学部で学んでいましたが、2019年の香港社会運動に大きな衝撃を受けたため、自分の専攻を地域活性化論から地域社会研究に変更し、運動のメカニズムを明らかにするため、それに関連する授業を中心に受け始めました。人種、民族、移住･移動、国家、性別、言語など、個人のアイデンティティを構成する主な要素の中で、特に個人のナショナルアイデンティティと国家の言語政策との関係に関心を抱き、ポストコロニアル香港や戦後の台湾を研究対象として卒業論文の研究を始めました。その後、研究者への道を志し、当時の指導教員と相談した結果、大学院に進学することを決めました。そして、数多くの大学院の中から、地域研究がご専門である貞好康志先生のご指導を仰ぎたいと思い、神戸大学大学院を受験し、現在、貞好先生をはじめとする本研究科の先生たちのご指導の下に研究を進めています。

私の大学院での学びは、学部時代の恩師の次のような言葉で特徴づけられていると思います。「生まれ育った場所から離れたことにより、これまで『当たり前』と思ってきた多くのことが、実は『当たり前』でないことに気付かされ、地域と社会を相対化して観察する視点を獲得することができる。」自分の出身地で調査を行っても、対象が言語･文化を共有する人々であっても、必ずしもスムーズに進むわけではありません。入学する前の去年3月には、香港国際空港で簡易な事前調査を行いましたが、予想以上に困難で、無力感を感じました。本研究科に進学してから、1年目の前期にはフィールドワークに関連する授業を中心に受講し、現地での調査を行う際の注意点を多く学びました。本研究科で培った知識を活かして、調査の計画を練り、修士論文作成に向けて調査･研究を進めていく予定です。最後に、本コース受験を検討している皆さんに、本コースでの充実した研究生活の機会があることを心から祈っています。

修了学生からのメッセージ

森田　理央さん

（2022 年度博士前期課程修了）
関西学院大 国際学部卒業
研究テーマ：「北京学生運動における愛国主義」
現在、 野村證券株式会社勤務

私は「真の中国に触れたい」という思いから、大学3年生のときに日本と歴史的に関わりが深い吉林省長春にある吉林大学に半年間交換留学をしました。実際に中国で生活をしていると、中国文化のみならず、中国の人々の寛大さや力強い姿に強く心を惹かれた一方で、日中の歴史が残した深い傷跡を経験することも多々ありました。帰国後、私は「中国愛国主義」の研究を志すようになりました。そして、社会学（中国･文化大革命）がご専門である谷川先生のご指導を仰ぎたいと思い、神戸大学大学院への受験を決心しました。

私がアジア･太平洋文化論コースで学び得たことは、決して受動的に指導を受けるのではなく、自ら主体的に好奇心を追求することこそ、研究への情熱を燃やし続ける鍵になるということです。本コースの先生方は、厳しくも学生の熱意と意欲に真摯に向き合い、温かく支えて下さいます。これから本コースに入学される皆さんには、先生方とともに、自分自身の熱意をさらに高め、研究を深めていただきたいと思います。皆さんの神戸大学大学院での日々が、実りある時間となるように祈っています。

劉　燕さん

（2022 年度博士課程後期課程修了）
大阪市立大学（現大阪公立大学）博士課程前期課程修了
関西大学博士課程前期課程修了
研究テーマ：「中国亡命知識人のライフ･ヒストリーとヒストリーの交差―外と内，境界･周辺―」
現在、 神戸大学などで非常勤講師、 著述家

私は五十代で博士後期課程に入学しました。博士後期課程入学以前には、故郷の湖南省を離れてから日本やアメリカを遊学し、非常勤講師でフリーの著述家として、研究･教育･日中バイリンガルの翻訳や創作と、二足のわらじならぬ三足のわらじで、経済的に安定した基盤は確保されないものの、自由気ままに過ごしてきました。

何故、今さら博士号の取得を目指したか？　アカデミズムの学者気取りのつもりは毛頭なく、キャリア･アップに結びつくことも期待していたわけでもありませんでした。

その一因は、博士後期課程入学前、谷川教授から勧められたマックス･ウェーバーの『職業としての学問』の一文にありました。そこには、専門分野において「後々まで残る仕事を成し遂げ」るならば、「生涯に一度だけ、二度と味わうことのできない深い喜び」が得られるだろうと記されていました。この言葉が私の背中を押してくれました。

博士論文では、亡命により国家や民族という枠組みを超えることを余儀なくされた知識人が、各自のを越境させ、文化を国際化させるアクターとなっていることに着眼し、激動の歴史に翻弄されながら真理の追究のために学問や言論の自由を求めて苦闘する亡命知識人の普遍的な存在意義を導出することを目指しました。どこに行くときも文献とパソコンを入れた数キロのリュックを背負い、幾つもの資料を精読し、世界各地にしている証言者に資料の内容を確認し、授業の合間、朝から晩まで細切れの時間に博論を書きました。

本学では異なる研究領域の諸先生から学際的で柔軟なアドバイスをいただくことができました。本コースでは、教授陣からの強力なサポートを得たのみならず、院生研究室において留学生や日本人学生の「学弟」、「学妹」との楽しい雑談により、生活や研究の苦楽を分かち合うこともできました。

無論、学問、そしてそれに基づく実践は、博士論文の提出で「修了」となるものではありません。これまでの研究の検証、それを行う自分自身をも省察し、さらなる知見の創出に努めたいと考えています。人があまり通っていない茨の道を歩いて行くのは案外おもしろいかもしません。

Q&A

留学生や社会人入学の院生もいますか？

本コースでは日本人と留学生の両方がいつも多数在学しており、 年度によっては、社会人入学・長期履修生の院生もいます。

文化相関・地域文化系

ヨーロッパ・アメリカ文化論コース

ヨーロッパ・アメリカ文化論コースでは、近代以降、世界の政治・経済・文化などで中心的な役割を果たしてきたヨーロッパとアメリカの社会と文化について、多様な角度から総合的に教育・研究します。これらの地域で発展した文化は世界へと広まりましたが、現在、批判的に再検討されていることは周知の通りです。それに加えて、最近では、欧米の中にありながら近代成立の過程で周縁にあった社会と文化に関する研究も進展してきています。このコースでは、以上のような成果を踏まえて、現代の我々の生活と意識に深く根付いているように見える欧米的な思考や価値観を再検討し、その 21 世紀における意義を探っていきます。歴史・言語・宗教・思想・文学・芸術・社会制度など、幅広い分野にわたって具体的な考察を積み重ねることで、いまだ知られざるヨーロッパやアメリカの深奥に迫りたいと思います。

進路実績
（前期課程） 琉球新報、大和証券、日立製作所、三田市役所、関西電力、時事通信社、在外公館専門調査員、東洋電機製造、大成建設、ニトリ、浜松市役所、クボタ、神戸大学大学院博士後期課程進学、明星産商、他
（後期課程） 静岡大学人文学部講師、佛教大学専任講師、神戸大学非常勤講師、神戸松蔭女子学院大学非常勤講師、大和大学非常勤講師、同志社大学非常勤講師、大阪市立大学非常勤講師、神戸大学国際文化学研究推進センター協力研究員

在籍学生数
（前期課程） 6名
（後期課程） 4名

論文テーマ例
グリム兄弟『ドイツ伝説集』、ウィリアム・モリス研究、『ハリー・ポッター』とヴィクトリア文化、アメリカのイタリア移民、ブロンテの自然観、I Love Lucy における視覚的ギャグの分析、ポルトガルにおけるミランダ語の成立、戦間期アメリカにおける平和主義、孤立主義、ポピュリズム、英国庭園研究、イーヴリン・ウォーの『ブライズ、ヘッド再訪』、アメリカの移民政策と中国系移民の現状、リバタリアニズム、サモアの地域研究、阪急英国フェアの歴史研究、ジョージ・エリオット研究、他

所属教員の紹介

小澤　卓也　教授　ラテン・アメリカ文化交流論特殊講義ほか
ラテンアメリカ、とりわけ中央アメリカの近現代史が専門です。最近はグローバルな歴史的視点に立ちながら、中米社会を大きく規定している民族問題や輸出作物生産文化の研究を進めています。

西谷　拓哉　教授　アメリカ言語映像文化論特殊講義ほか
文学と映画を中心として、アメリカ合衆国の多元的な文化状況や表現の独自性などについて研究しています。専門は 19 世紀中葉のアメリカン・ルネサンス期の文学ですが、小説の映画化という観点から両者のナラティブとしての特徴を比較することにも関心を持っています。

衣笠　太朗　講師　ヨーロッパ社会文化論特殊講義ほか
専門はドイツ＝中東欧境界地域の近現代史であり、主に現在のドイツ、ポーランド、チェコの境界に位置するシレジア（シュレージエン／シロンスク／スレスコ）における分離主義運動や住民移動について研究しています。

中村　麻美　講師　イギリス社会文化論特殊講義ほか
英語圏、特に英国におけるユートピア・ディストピア文学ないしサイエンス・フィクション（SF）を専門としています。研究関心はノスタルジア、ジェンダー・セクシュアリティ、ポストヒューマン哲学です。

深町　悟　講師　越境文学論特殊講義ほか
19世紀後半から第一次大戦ごろの英国近未来戦争小説（侵攻小説と私は呼んでいます）が英国内、あるいは海外でどのような影響を与えたかを研究しています。

修了学生からのメッセージ

王　芸萱さん

（2023 年度博士前期課程修了）
瀋陽大学日本語学部卒業
研究テーマ：「メキシコの対中国貿易赤字問題の分析検討―中墨貿易のさらなる発展に向けて―」

学部時代ではラテンアメリカ文化について触れたことをきっかけに、ラテンアメリカに魅力を感じるようになりました。とりわけラテンアメリカ地域において、ブラジルに次ぐ経済大国であり、アメリカの重要なパートナーでもあるメキシコに対しては、これまでのほとんどない認識の上に、新たな認識が生まれました。また、学部３年次に交換留学を経験したおかげで、さまざまな異文化の人と知り合って、多文化共生の魅力を身をもって感じることができました。そのため学部卒業後は、専門的な知識をより深く知りたいと考えて、国際文化学研究科のヨーロッパ・アメリカ文化論コースに入学しました。

このコースには、ヨロアメの政治、経済、文化など幅広い分野の講義や演習をカバーしています。授業では学生の積極的で自由な発言に重視します。さまざまな専門性をもつ先生たちは、学生の考え方を重んじながら専門的な指導を行い、学生の研究を暖かく支えています。また、多国籍の仲間とのコミュニケーションやディスカッションの場にも恵まれていて、学術的な交流だけでなく、視野を広げることもできます。

在学中は、コースが提供してくれる優れた研究環境を深く実感し、充実や成長を味わう日々を過ごしました。

石井　昌子さん

（2023 年度博士後期課程修了）
京都大学大学院文学研究科博士後期課程指導認定退学
研究テーマ：ジョージ・エリオットのリアリズムと道徳観―シンパシーに乏しい人間の描写からの考察―
現在、同志社大学嘱託講師・京都教育大学非常勤講師

私の博論は、19 世紀イギリスの代表的リアリズム小説家ジョージ・エリオット（1819–80）のリアリズムがこれまでの解釈と異なり、初期作品から後期作品に向けて進展していること、その背後には作者自身の道徳観の成熟があることを明らかにしました。

ヨロ・アメコースに入学する前の私は、研究は始めていましたが博論の書き方が分からず、京都大学の非常勤講師として英語を教えていました。しかし非常勤講師も定年に近い頃、同じく文学を研究している友人から神戸大学大学院の国際文化学研究科では、コロキアムやコース指導があって段階を踏んで書き進めて行けるという朗報を得ました。そしてこれが私にとって文学研究者として生きていく最後のチャンスだと思いました。

忙しいヨロ・アメの先生方が、専門の違う論文に目を通してコメントを下さったことには本当に頭が下がります。コース指導は厳しいものでしたが、そのおかげで徐々に私の博論が意義のあるものへと発展してゆきました。とくに指導教員の先生には感謝しています。

博論作成に当たってもう１つ私の背中を押してくれたのは、海外のジャーナルです。私の博論の要となる議論は日本のジョージ・エリオット協会ではなかなか賛同が得られず、大いに困りました。しかしイギリスのジョージ・エリオット協会の機関誌に投稿したところ、当時の編集長で今の会長から、すぐにアクセプトのメールが届きました。「とても思慮深く面白い。ほかのメンバーも同感だろう」というコメントを得て私の博論は息を吹き返しました。

ヨロ・アメコースに集う学生の興味の対象は様々で、発表の場で彼らの多様な主張が徐々に洗練されてゆくのを見るのは面白く感動的です。博士課程前期２年もしくは後期３年の修業はきついけれど、努力すれば必ず成長が実感できます。

高原　さよ子さん

（2023 年度博士課程前期課程修了）
研究テーマ：「福祉国家とリバタリアニズム―ロスバードの視点から―」
現在、株式会社鴻池組勤務

学部時代には、リベラリズムと保守主義が政党政治に与えた影響、アメリカにおける外交政策などアメリカ政治経済を学びました。学部3年次に学習を進めていくうちにアメリカの政治文化の源流にある政治思想、その中でもリバタリアニズムについて研究したいと考えるようになりました。そして、アメリカ政治思想史や政治理論を専門的に学ぶために神戸大学国際文化学研究科のヨーロッパ・アメリカ文化論コースに進学することを決めました。

このコースでは、アメリカの文化、政治、思想など幅広い分野の講義や演習を受講することができるため、研究テーマについて多角的に考えることができるだけでなく、ラテンアメリカやヨーロッパ地域などアメリカを研究するうえで理解不可欠な地域との関係を学ぶことができました。また、少人数指導の議論形式の授業が多いことから、積極的に自身の考えを発信する力を養うこともできます。国際文化学研究科で培った積極性は、授業内の発言だけでなく、就職活動でのグループワークや面接でも活かすことができました。ヨーロッパ・アメリカ文化論コースでの学びは、今後のキャリアにおいて重要な基盤になると考えています。

西田　悠さん

（2022 年度博士課程前期課程修了）
法政大学社会学部卒業
研究テーマ：「現代キューバの人種主義からみる貧困の再生産過程 ―人種差別の社会問題化への取組みとその困難性」
現在、琉球新報社勤務

学部への入学以前に関心を抱いていたラテンアメリカの歴史・思想・現代社会の在りようについて、専門性を伴って探究したいと考え、本研究科への進学を決めました。学部では社会学的なモノの見方に魅了され、特に日本国内外で展開されるグローバル化が、多種多様な社会集団に対してどのような作用をもたらしてきているのかといった点ついて、幅広く関心を寄せていました。

本研究科では、国民国家や人種、ジェンダーなどに係る社会学的視座を基軸としつつ、歴史学・人類学・哲学あるいは社会思想といった研究領域を学際的に学びました。このような学問生活は、自らの社会的な立場性と研究対象であるキューバにおける人種―貧困問題を繰り返し往復して、オリジナルな研究を展開しようという目論みにおいて、非常に有効なものでした。

多種多様な専門的知識・技能の養成にご尽力いただいた教員方はもちろんのこと、本研究科であったからこそ巡り会えた仲間たちの存在についても、修了後の私の生き方を方向づける大きな要素となっていくと思います。

地球の反対側に位置するキューバ社会について探究しながらも、いまここで私が成すべきことは何かを考え続けたことが進路選択にも活き、最終的に本課程で経験したことの多くに意味を持たせることができました。

専門領域へのこだわりと学際的な広い関心をお持ちの方に是非お勧めしたい研究科です。

Q&A

社会人ですが、仕事をしながらの入学は可能でしょうか？

規定年限で修了を目指す場合、博士前期課程では少なくとも１年次においては週に１～２回以上の登校が必要ですが、「長期履修制度」を利用すれば最長４年まで修了年限を伸ばせますので、登校日と学期毎の履修単位をかなり少なくすることができます。また、博士後期課程の場合は、指導教員との相談により柔軟な受講が可能な場合もあります。

外国語の知識はどの程度必要ですか？

英語の文献が読める程度の知識は必要です。どこかの地域に関することを専門的に研究する場合は、当該地域の言語の知識を持っている必要があります。前期（修士）課程の「キャリアアップ型プログラム」では、それほど高度な外国語力がなくても大丈夫でしょう。

専門の先生がいない地域や領域のことを研究テーマにすることはできますか？

ある程度柔軟に対応することができます。受験を考えている場合は、いずれかの教員と連絡を取って、具体的なテーマについて相談してください。

文化相関・異文化コミュニケーション系

文化人類学コース

本コースでは、多様なテーマと地域を研究対象にする文化人類学の専門スタッフが、充実した教育研究カリキュラムを提供しています。今日の文化の諸問題は、グローバル化に伴うさまざまな文化と価値観の対立、分裂、統合と融和、生成と消滅といったダイナミズムを特徴としています。本コースでは、地に足のついた研究調査（フィールドワーク）から世界を見渡す広くしなやかな視点をもつことで、深い異文化理解をもとに多様な文化が対話可能となるような方法をともに考えていきます。文化をめぐる複雑な問題に積極的にとりくみ、国際的に活躍する専門家、研究者をめざす学生、文化人類学の高度な研究を志す留学生も歓迎します。

コースの情報は、こちらからもご覧になれます。➡
https://www.kobe-anthro.jp

就職実績

（前期課程） 南山大学（准教授）、奈良県立大学（専任講師）、京都産業大学（准教授）、多摩美術大学（助手）、北九州市立大学（特任教員）、総合地球環境学研究所（研究員）、広東貿易職業技術学校（講師）、中日新聞社、イオン、旭化成、東京三菱銀行、モバゲー、活水女子大学、韓国法務省、バンダイ、大阪府高校教員、青年海外協力隊（コスタリカ派遣）、アビームコンサルティング、東京国際貿易、三菱総研 DCS、関西福祉科学大学、神戸松蔭女子学院大学（非常勤講師）、（株）富士ソフト

（後期課程） 天理大学（専任講師）、立教大学（教授）、神戸大学（准教授、助教）、大阪観光大学（教授、専任講師）、島根大学（准教授）、武蔵大学（准教授）、法政大学（教授）、東京医科大学（准教授）、外務省（専門調査員）、立命館大学衣笠総合研究機構（専門研究員）、帝塚山大学（非常勤講師）、浙江大学（副教授）、大妻女子大学（准教授）、滋賀大学（特任准教授）、立命館大学（准教授）、国立民族学博物館（准教授）、武庫川女子大学（講師）、ケープタウン大学（客員研究員）、東京外国語大学（研究員、特任研究員）、神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート（学術研究員）、広島大学（教授）

在籍学生数

（前期課程） 14名
（後期課程） 13名

論文テーマ例

（前期課程）

カーゴカルト、観光、民俗芸能の伝承、ポストコロニアル、マルティカルチュラル・オリエンタリズム、中国の女性の地位、悪石島のボゼ、ローカル・ハワイアン、プリミティヴ・アート、在日ペルー人、映像人類学、クラ交易、バングラデシュのフェアトレード、国民文化と教育、在日コリアン、国際結婚、在日ベトナム人、奄美出身者同郷団体、文化遺産、伝統の創造、多文化共生、朝鮮族、映像、アイデンティティ・ポリティクス、ポピュラー音楽の表象、ジャマイカのペンテコステ教会、在米カリビアン、カーニバル、在米コリアン・アイデンティティ、ラスタファリ運動、ジャマイカのエチオピア正統教会、キリスト教と文化の文脈化、日系アルゼンチン人、ドミニカ共和国野球移民、スポーツ移民とトランスナショナリティ、在米華人、エスニック・コミュニティとメディア、マルティレイシャル、在日ブラジル人、移民の子弟教育、メキシコ女性と住民参加型開発、カナダ先住民、ディアスポラ・アイデンティティ、日系ハワイ人、帰米二世、ヒスパニック、カリフォルニア州バイリンガリズム、限界集落

（後期課程）

文化の真正性、ヴァヌアツ・アネイチュム、歴史人類学、難民、カレンニー、ホームステイ、在日ベトナム人、ケアと家族、朝鮮族村落変容、朝鮮族移民の女性化、華僑・華人、ベトナム観光、オーストラリア・アボリジニ、「問題飲酒」、先住民と非先住民、カリブ海地域、ジェンダー、男性性、ダンスホール文化、ダンスホール・ゴスペル、ポピュラー音楽、カリプソ、ソカ、ナショナル・アイデンティティ、人種と民族ポリティクス、混血の表象、当事者性、「オモニ」―韓国社会における「母性」とケア、マイノリティ、牧畜民ヒンバ／ヘレロの土地認識、台湾の伝統的首長「頭目」の現代的な姿

所属教員の紹介

梅屋　潔　教授　民族学特殊講義ほか
社会人類学、アフリカ民族誌、妖術・邪術研究、日本の民俗宗教、開発の人類学などの分野を主として研究しています。

岡田　浩樹　教授　民族誌論特殊講義ほか
朝鮮半島、日本を中心とした東アジア諸社会およびベトナム、植民地主義および近代化過程における家族、宗教の再編成、マイノリティと多文化主義、宇宙人類学などの分野を主として研究しています。

齋藤　剛　教授　文化人類学特殊講義ほか
社会人類学、中東民族誌学、人類学的イスラーム研究、モロッコ、グローバル化と宗教・民族などの分野を主として研究しています。

下條　尚志　准教授　現代人類学特殊講義ほか
歴史人類学、東南アジア研究、多民族・多宗教の混淆、河川・海域世界、移民、戦争・社会主義・市場経済化のなかの生き残りの術などを主として研究しています。

大石　侑香　准教授　社会人類学特殊講義ほか
生態人類学、環境人類学、人類史、生業、物質文化、先住民、シベリア民族誌、北極地域研究などの分野を主として研究しています。

所属学生からのメッセージ

眞明　夏三さん

（博士前期課程２年）
立命館大学国際関係学部卒業
研究テーマ：「ガーナの葬式」

私はガーナの葬式をテーマとして研究をしています。死という、人類に普遍的な事象ですがその在り方は実に様々です。ガーナの人々がどのような死生観に基づいて、どのような葬式をしているのか、文献調査やフィールドワーク（現地調査）をもとに研究していきたいと思っています。

私は学部時代に国際関係学を専攻し、新卒で就職、1年半働いた後に退職しました。その後、青年海外協力隊に携わる中で、自分の価値観が必ずしも現地の人々に当てはまるわけではないと感じ、自分ではない人々の視点を知りたいと考え、文化人類学を志しました。文献を読み、先生方と話す中でガーナの葬式という研究テーマにたどり着きました。

大学院、そして文化人類学コースに入るということは、自分の面白いと思うことを突き詰められる環境に身を置くことだと感じています。授業だけでなく、読書会、個別指導などを通して、文献を読み、議論を深めます。特に合同ゼミという、コースに在籍する学生と先生方の全員が出席するゼミでは、毎週数名の学生が研究報告を行い、その発表に対して出席者からコメントがもらえます。合同ゼミは以後の研究の方向性を検討できる貴重な機会であるとともに、定期的に発表順が来るので、研究の進捗の1つの目安にもなります。

また、先生方、学生ともにさまざまな専門性を持つ人が集まっていることも特徴です。在籍する学生数は多いですが、誰一人として全く同じ研究をしている人はいません。授業や合同ゼミのコメント、さらに研究室での何気ない会話など、誰と話しても自分とは異なる視点を持っており、いろいろなところに研究のヒントが転がっています。

文化人類学コースにいる人と話していると、自分たちとは異なる文化、慣習、宗教など、「違う」ことを拒否するのではなく、面白い、なんでだろう、と深掘りしていく考え方を持っている人が集まっていると感じます。また、研究では他の文化を見るだけでなく「自分たち」って何なんだろう、とも問いかけます。研究を進めていくと知らないこと、わからないことばかりで途方もない気分になることもありますが、先生方や他の学生ともに「違い」や「わからないこと」を面白いと思いながら研究を進めていくことができます。

木村　彩音さん

（博士後期課程３年）
研究テーマ：「オーストラリア先住民トレス海峡諸島民の混血と混淆性をめぐる人類学的研究」

私の先住民との出会いは、子どもの頃読んだ絵本でした。民族衣装を着て、動物や精霊と話し、自然と調和して生きる姿がとても印象的でしたが、将来自分が彼らの研究をすることになるとは思ってもみませんでした。私が研究対象としているオーストラリア先住民のトレス海峡諸島民は、風や波を読み、ジュゴンやウミガメを獲って暮らす海の民です。それだけ言うと、絵本と同じく自然と調和して生きる人びとのようですが、それは彼らの全てではありません。フィールドワークを通じて、彼らの人間臭さや近代に生きるたくましさに触れると、自分の中の先住民像が偏ったものであったことに気付かされます。このように、自分の中の思い込みや常識が相対化されることこそ、現地の人びとと深く付き合うこと、そしてそこから彼らの見ている世界を理解しようとする文化人類学の醍醐味だと思います。

文化人類学コースでは、国内外様々な場所をフィールドとする院生が集まり、人類学的思考の訓練を積んでいきます。人類学を基本的な土台としつつも、それぞれ多様な分野、現象に関心を持っていて、互いに議論を交わし新たな知見に触れるのはとても刺激的です。

また院生は、そうして得た知見やフィールドワークの成果を、学会発表や論文投稿などを通じて積極的に発信することが求められます。本コースでは、それに必要な論文執筆や発表の技術、議論の深め方などを身につけるサポート体制が整っています。週に一度開かれるコース内のゼミでは、実際の論文の草稿を検討しながら院生同士で議論を交わすほか、コースの先生方全員から指導を受けることができます。先生方には様々な分野とフィールドのエキスパートが揃っており、多様な角度から根気強くコメント、指導をしてくださいます。こうしたプロセスを経て、博士後期課程の院生は博士論文の完成に必要な技術と思考力を身につけます。

研究を続けていくことは決して容易なことではありませんが、充実した研究環境はその継続を大いに後押ししてくれるものだと思います。私自身も、本コースの恵まれた環境と周囲の人たちに支えられていることを日々実感しています。

修了学生からのメッセージ

平野　智佳子さん

（2019 年度博士後期課程修了）
研究テーマ：「ポスト植民地状況を生きるオーストラリア先住民のアボリジナル・ウェイに関する人類学的研究―中央砂漠における飲酒をめぐる諸実践に注目して」
現在、国立民族学博物館准教授

オーストラリア中央砂漠、どこまでも続く荒野に現れるアボリジニの小さなコミュニティが私の調査地です。そこでアボリジニたちと共に暮らしながら、規制下における酒の獲得、分配の方法を調査しています。

人類学的研究に不可欠ともいえるフィールドワークでは、自らの「常識」が覆される瞬間が度々訪れます。私にとってアボリジニたちとの生活は驚きと困惑の連続でした。彼らと行動をともにしていると、従来のものの見方ではどうしても説明のつかないことがあると気づかされます。そうした違和感は、時として「分かり合うのは無理なのではないか」という苛立ちや徒労感に結びつくこともありますが、簡単に手放してはいけません。なぜなら、それらが現地の人々の生きる世界を読み解くための重要な手がかりとなるからです。

大学院では、このフィールドワークでの発見を民族誌としてまとめていきます。先行研究の読解や整理、調査データの扱いや議論の展開の方法等、論文執筆の技術の習得は決して容易ではありませんが、先生方は根気強く指導してくださいますし、院生仲間との交流も心の支えになるでしょう。論文執筆に並んで、研究生活では調査資金の獲得も大きな課題となりますが、日本学術振興会の特別研究員など競争的資金に関してコース内にしっかりとしたサポート体制が築かれており、採択実績も継続して出ています。

文化人類学コースでは数年間に渡る課程を修了した後、多くの院生がアカデミズムの世界に羽ばたきます。研究者として第一線で活躍される先輩方の背中を見て私も研究職を志しました。まだまだ駆け出しですが、院の扉を叩いた日の知的好奇心は衰えることなく、益々刺激的な毎日を過ごしています。フィールドで得られた知見から私たちの生きる世界を紐解くことに関心のある方はぜひ本コースの扉を叩いてみてください。皆さんと人類学の議論を交わす日を楽しみにしています!

澤野　美智子さん

（2013 年度博士後期課程修了）
神戸大学文学部人文学科卒、韓国ソウル大学校社会科学大学院人類学科修士課程修了
博士論文題目：「〈オモニ〉を通して見る韓国の家族―乳がん患者の事例から」
現在、立命館大学総合心理学部准教授

私の研究テーマは、韓国の家族です。特に、乳がん患者さんたちが病気に対処するなかで家族とどのような相互行為を行っているのか、ということに注目して博士論文を書きました。現在はさらに、代替療法的な食餌療法、ケア、ジェンダーなどの問題へと広げて研究を進めています。

博士課程では、研究者としての心構えから論理的な文章の書き方、博士論文のアドバイスにとどまらず、将来就職したとき学生を教えるためのスキルに至るまで、長期的な展望を見据えたご指導をいただきました。指導教員以外の先生方に教えを請いに行くことも積極的に奨励される雰囲気ですので、ひとつの問題に対して様々な角度からご意見をいただくことができ、考えを深めることができました。

また、院生たちで行う研究会や読書会も、研究情報を交換したり学問的知見を深めたりするにとどまらず、研究上の悩みを共有したり互いにアドバイスをしあったりするうえでも非常に有意義でした。志願者の皆さんも、このような恵まれた環境を活かし、充実した大学院生活を送ってください。

Q&A

学部では文化人類学を専攻していませんが、大丈夫でしょうか。

必ずしも学部で文化人類学の専門コースにいる必要はありません。ただし、文化人類学についての基本的知識を身につけておくとよいでしょう。最近は手頃な入門書、概説書がふえていますので、まずはそれらを参考にし、所属する大学の文化人類学関係の講義・演習を受講することをお勧めします。大切なことは、明確なテーマをもち、これを文化人類学の視点から考える姿勢です。

指導教員以外に研究上あるいは論文の指導を受けたり、論文テーマが変わって指導教員の変更をすることはできますか？

教員全員の共同指導体制をとっており、指導教員以外からも指導を受けることができます。また、研究テーマを変更する必要が生じた場合には、所定の手続きを経て指導教員をコース内で変更することも可能です。

文化相関・異文化コミュニケーション系

越境文化論コース

グローバリゼーションの進展のなかで、人やモノは国境をはじめとするさまざまな境界を越えて移動するようになっています。越境文化論コースでは、そのような境界を越える移動がもたらす問題について、移住移民、観光（ツーリズム）、科学技術（テクノサイエンス）の3つの観点からアプローチします。グローバリゼーションが不可避的にもたらしている文明・文化の非対称的な接触を通じて生じる衝突や摩擦、混交や変容についての理解を深めます。

進路実績　長崎市職員（学芸員）、三菱東京UFJ銀行、パナソニック電工、ニシキ商会、ニトリ、GMOクラウド、兵庫県立大学客員教授他。

在籍学生数　（前期課程）　＊令和７年度４月開設の新コースのため令和６年度３月末までは在籍学生なし
（後期課程）

論文テーマ例　科学技術の発展と安全･安心社会の相関、生野銀山お雇い外国人ジャン･フランソワ･コワニェと日仏交流、西川如見の文献に見る宇宙観･自然観、そのほか、新コース開設にあたり、環境問題、科学史、科学社会論、移住移民、開発援助、観光研究、観光地域の国際認証、アメリカ研究に関するものなど。

所属教員の紹介

井上　弘貴　教授　越境文化形成論特殊講義ほか
政治理論、公共政策論、アメリカ政治思想史を専門としています。アメリカ研究の観点から移民問題などをめぐってアメリカで起きている「文化戦争」を、あるいは実務的な見地から日本における観光地域づくりを主として研究しています。

辛島　理人　准教授　越境社会文化論特殊講義ほか
アジア太平洋地域における知識社会史や文化経済史を専門としています。開発援助・経済成長や持続可能な観光についての知識や規範が、国境を越えてどのように流通し制度化するのかを研究しています。

塚原　東吾　教授　科学技術社会論特殊講義ほか
科学史および科学技術社会論を研究しています。最近では地球環境問題、気候変動とアンソロポセン、それにバイオ資本主義の問題を検討してます。

新任教員（2025年4月着任予定）越境文化交流論特殊講義担当
新任教員（2025年10月着任予定）越境社会共生論特殊講義担当

修了学生からのメッセージ

島　早里奈さん

（2020 年度博士前期課程修了）
神戸女学院大学文学部卒業。研究テーマは「江戸時代の文献からみる魚食の分析～『江戸流行料理通』・『誹風柳多留』より」。現在、社会保険診療報酬支払基金職員。

大学在学中に様々な文献を通して、和食文化に興味を持ち始めていた私は、卒業後も研究を深めたいと思い、神戸大学国際文化学研究科のオープンキャンパスに参加しました。そこで「塚原研究室（通称：つかけん）」に所属する方々、先生の研究姿勢に魅了されました。実体験や調査の大切さを痛感し、辻ウェルネスクッキングでは日本料理を、京都・萬亀楼では庖丁式を経験し、江戸時代から続く鎌倉の料理茶屋「八百善」では、江戸料理の体験と八代目店主へのヒアリングを実施しました。

比較文明・比較文化論コースに入学後は、グローバル的な視野から食文化についての理解を深める機会を頂戴しました。岐阜県での科学史学会では、朴葉味噌など地域の料理を、写真に掲載している、ビビンバ発祥の地、全州（韓国）で開催されたICHSEAでは、韓国料理を体験することができました。大学院の大納会では、国際色豊かなゼミ生達と体験した韓国をはじめ諸外国の食文化について情報交換しました。

また、自身の分野はもちろん他分野、他専攻の授業も受講できる恵まれた環境を活かすことによって知識の幅が広がり、さらに、語学教育にも関心があった私は、日本語教師養成コースも受講しました。

国際色豊かな研究室では、母国をはじめとする各々の国の代表的な料理を一緒に食すことを通じて、諸外国の実情や文化に触れることができ、充実した学生生活を送ることができました。分からないことがあったらお互いに助け合い、時には切磋琢磨しあえる仲間ができた研究室は、私にとって憩いの場であり、鍛錬の場でもありました。諸事情で帰国してしまった留学生とも連絡を取り合っており、コロナ禍で実現できなかった各国の留学生との旅行をいつかは実現させたいと思います。修了後も食文化の研究を継続したいと考えていますので、諸外国にも目を向け、研究室の仲間たちとも繋がり続けたいと思います。是非、皆さんにもこの研究科で、多面的な視野を広げ、多国籍な仲間たちとともに研究を深めて欲しいと考えています。

田井中　雅人さん

（2021 年度博士後期課程修了）
早稲田大学政治経済学部卒業
研究テーマ：「放射線被曝防護の国際的基準策定プロセスの科学史的研究」

新聞記者として原爆や原発といった核問題を取材してきた私は、故・中川保雄・神戸大教授（1943-91）の著書『放射線被曝の歴史』に大いに触発されました。縁あって、中川教授の系譜を継ぐ国際文化学研究科（比較文明・比較文化論コース）の塚原東吾教授の指導を受けながら、博士論文の執筆をしました。

研究では、中川教授の遺族から神戸大学に寄託された段ボール 15 箱分の資料を読み込みながら、放射線被曝防護の国際的基準がどのように策定され、2011 年の福島第一原発事故後にもそれが適用されているのかを検証しました。

2020 年 12 月に神戸大学主催で開催された科学技術社会論（STS）学会の「中川保雄記念シンポジウム」で報告させていただきました。専門分野を深掘りすることで、アカデミズムとジャーナリズムの双方に貢献できればと考えています。

勉強熱心な塚原研究室の学生さんたちとの交流は刺激的です。あいにくのコロナ禍でフィールドワークや対面の機会はめっきり減りましたが、SNS などでマスコミ志望の学生さんたちの就職相談や作文指導を行い、研究室から新聞社内定者が 2 人出たのもうれしいことです。

北村　沙緒里さん

（2012 年度博士前期課程修了）
広島市立大学国際学部卒業、神戸大学国際文化学研究科博士前期課程修了。研究テーマは「小泉八雲を中心とした明治期の来日外国人の比較文学研究」。現在、長崎市職員（学芸員）。

私が大学院への進学を志望したきっかけは、学部時代の研究テーマをもっとしっかりと勉強したいという単純な理由からでした。私は本コースで、明治期の来日外国人の著作に見られる「日本」像についての比較研究がテーマでした。修了研究レポートでは、小泉八雲の文学作品を扱い、テクストと挿絵の表象について論じました。私の場合、入試当初の研究計画の内容は博士前期課程の二年間で大きく変わりました。しかし、それも限られた研究期間の中で、恵まれた指導体制と充実した資料環境（図書館など）によって得られた結果だと思います。本コースの特徴は、大きく科学技術文明と言語文化の二つの研究分野に分かれます。異なる分野の境界を越えて、学生生活の中で仲間と研究について語り合えるのは自身の研究への刺激になります。また、コースにとらわれない横断可能な履修システムによって、芸術、思想、文学など、あらゆる視点から自身の研究を深めていくことが可能です。入学時の研究計画を進めていくことも本分ですが、授業を通して得られる研究の新たな視点、見直し、深化は、自分次第でいくらでも研究に反映できると思います。充実した研究生活を支える環境が整っています。

白井　智子さん

（2014 年度博士後期課程修了）
クレルモン＝フェラン第2大学人文社会学研究科修士課程修了。研究テーマは「生野銀山お雇い外国人ジャン・フランソワ・コワニェと日仏交流」。現在、姫路日仏協会会長。

私は、本大学院入学以前、フランス語教育と日本語教育に携わる傍ら、兵庫とフランスとの交流史を色々な時代・人物に焦点を当てて調査・研究をしていました。しかし、これらの研究は題材が多様で一貫性を欠いていていたため、ご専門の先生方からご指導いただきながら、これまでの調査結果を練り直し、さらに研究を深めて博士論文として一つに纏め上げたいと考え、大学院入学を決めました。

本コースを選んだ理由は、私が探し求めていた文化交流や比較文化、科学技術史が専門の先生がいらっしゃったことに加え、様々な国や時代における文明や文化、歴史に精通された先生方が結集して、多方面から研究指導に当たっておられたからでした。また、国際文化学研究科は、所属コースに関係なく、他コースの授業も履修可能なため、より一層学際的研究ができ、その上、本大学は複数のフランスの大学と協定を結んでおり、院生でも留学できる機会を得られることも私にとって大きな魅力でした。

在籍中、指導教授を始め、日仏両国で諸先生方からきめ細かなご指導を頂戴し、様々な観点から多角的に研究を進め、大きな成果を挙げることができました。恵まれた環境の中で充実した研究生活を送ることができ、私にとって掛替えのない素晴らしい 3 年間でした。

Q&A

理系じゃなくても大丈夫？
複雑多様な社会を理解する上で、科学的な物事の見方を身につけることはとても有意義だと思うのですが、大学時代は文系でした。本コースで科学史や科学技術社会論の研究をする際に理系の学問的基礎が必要なのでしょうか？

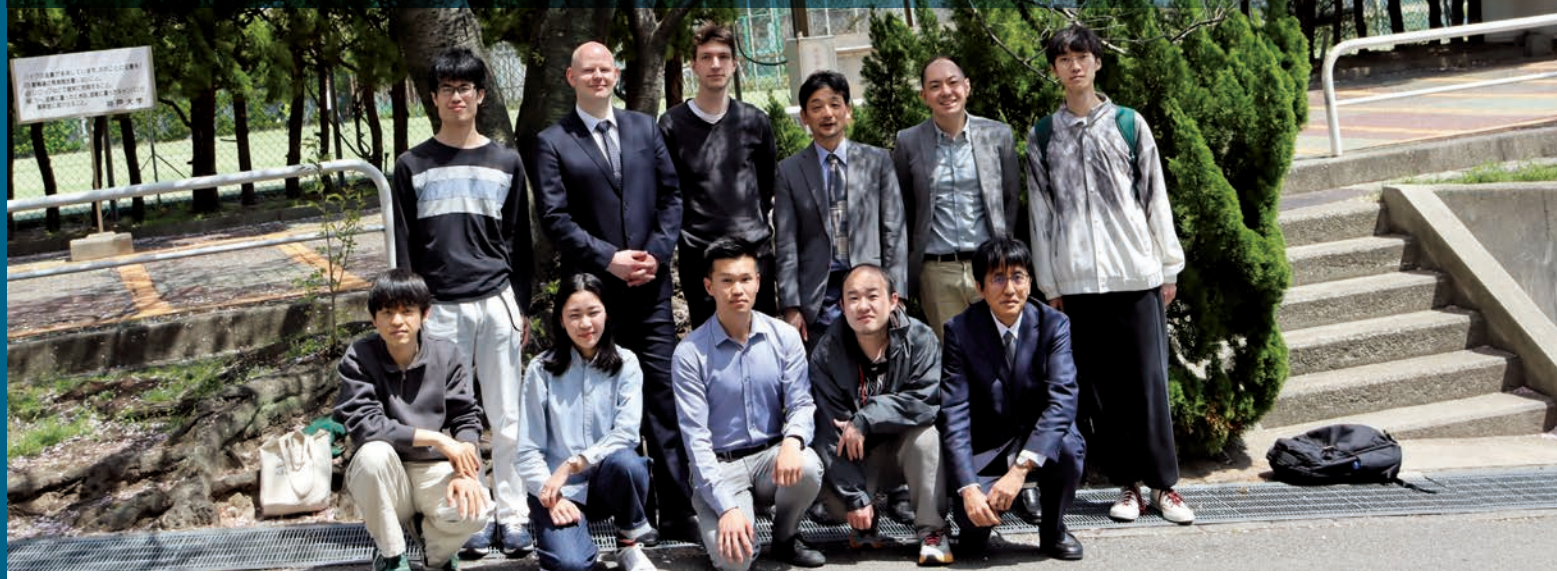
文系の方でも大丈夫です。そもそも、文系とか理系とか言っている場合じゃありません。たとえば先端テクノロジーやネット社会、テクノ・ディプロマシーとかGAFA、バイオ技術・生殖テクノロジーと世界の貧困、気候変動とクライメート・ジャスティス、無人の軍事ドローンやロボット兵士の問題、それらは誰もが関与することになる、というか、すでにかなりの影響を受けている問題ですし、われわれのサバイバルがかかっているのですから。

移住移民、観光、科学技術の3つの観点からアプローチするコースとのことですが、わたしはとくに観光に関心があります。すべての観点に関心がないとこのコースには合わないのでしょうか？

コース合同での演習では、それぞれの専門を基盤にして、複合的な観点から議論をしたり、問題意識を深めたりする機会がありますが、本コースに所属している教員は特定のアプローチに精通しており、まずは移住移民や観光、テクノグローバリゼーションの問題のどれかに関連のあるテーマを掘り下げることで問題ありません。その基盤を作ってから、どのように応用が可能かを考えますので、それぞれの分野の問題を、他の分野の人たちとも議論できることが重要です。

文化相関・異文化コミュニケーション系

国際関係・比較政治論コース



本コースでは、高い専門性をベースに世界各地域の政治現象を捉えることを目指しています。そのために、国際関係や国内政治過程に関する質的調査、理論の適用、統計的手法を用いた高度な研究が、院生によって進められています。従来の政治学や国際関係論では十分に明かにされてこなかった課題に注目して解き明かしたい意欲的な皆さんを歓迎いたします。5名の教員は、政治学の主要なアプローチを全てカバーするバランス良い構成となっており、院生による新しい研究意欲や向上心に対応していく体制となっています。

特筆したい点として、論文作成の基本に関して新年度毎にオリエンテーションを行っています。また論文作成指導では、前期課程と後期課程の院生が全員、出席するグループ研究発表会を実施しています。この場の知的迫力は、ぜひ体験して頂きたいものです。教員と院生の全員が協力して徹底した検討を加え、オープンな場で鍛え合っています。この過程で、参加者には、向上心、自発性や集団での作法が身に付きます。また政治学の基礎から応用までを修得し、キャリア形成を目指す院生が社会に出ても通用する思考力や討論力を体得していきます。

本コースでは、院生がどんな研究テーマを選択しても、新しい多文化共生のあり方を大切にする視線に身に付けて頂きたいと思っています。教育政策、移民問題、民主化、ナショナリズムの動態、安全保障問題、福祉制度などについて、基本と応用を大切にしながら研究が積み上げられてきたのも本コースの特徴です。また前期課程では政治学以外を修めた方が後期課程で政治学を身に付けたい、といった学際的な院生の志向に対応してきました。キャリアアップ志向の方にも、研究者志望の方にも、きっと自分を向上させるきっかけを見つけてもらえるはずと信じています。

わたしたちと共に、新しい国際社会のあり方を見出そうではありませんか！

就職実績

（前期課程） 日本放送協会（NHK）、関西経済連合会、大阪市、神戸大学職員、日本新薬、テス・エンジニアリング、独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構、国際交流基金、㈱日本オラクル

（後期課程） アジア経済研究所、Promis 学術研究員、日本経済研究所、安全保障貿易情報センター、関西学院大学国際学部専任講師、大阪大学人間科学研究科助教

在籍学生数

（前期課程） 10名

（後期課程） 5名

論文テーマ例

中国の一帯一路と日本政府と経団連の対応、21世紀の日米同盟の制度化における相互不安、アメリカにおける外国人非熟練労働者受け入れ政策、The role of education in France and Japan's cultural diplomacy、西ヨーロッパにおける政党システムの動態パターンの比較研究、イスラエルの核兵器をめぐる不透明政策と全方位均衡、米国連邦議会下院議員の投票行動の分析、セルビアのヨーロッパ化ーメディア表現の自由とコソヴォとの関係正常化に注目して、イラン核問題における討議の論理

所属教員の紹介

中村　覚　教授　比較地域社会論特殊講義ほか

国際政治学の諸理論を見直し、新興・発展途上国地域における紛争予防、多文化主義、テロ対策等に適するアプローチやモデルを探求しています。中東・ムスリム地域の安全保障、日本と中東の関係を含む国際関係、国家形成を研究しています。

安岡　正晴　教授　比較地域政治論特殊講義ほか

現代アメリカ政治（特に移民・人種問題、連邦制、日米中関係など）を研究しています。

新川　匠郎　講師　比較政治社会論特殊講義ほか

議会と政府の関係、ドイツ・ヨーロッパの政治、質的比較の手法を主に研究しています。

David Adebahr　講師　国際政治社会論特殊講義ほか

国際関係論に基づいて近代アジア太平洋の国際関係を研究しております。特に日本の外交政策などをテーマにしています。

院生からのメッセージ

勝裕　遼さん

（博士前期課程２年）
神戸大学国際人間科学部グローバル文化学科卒業
研究テーマ：「ルワンダ・ブルンジにおける民族紛争終結後の政治体制の変遷」

もともとアフリカ地域に関心を持っていたため、学部生のときから比較政治学を専攻し、アフリカ地域における権威主義体制の存続要因について研究を行っていました。自身の関心に基づき、途上国開発の分野でキャリアを歩んでいくことを考えていましたが、そのために必要な専門知識や論理的思考力、必要な情報を収集･整理･解釈する力などが不足していることを痛感し、それらを身につけるために大学院進学を決めました。特に政治学の分野は、複雑性が高いぶん自分にない価値観に深く触れる機会も多く、より多様な視点から物事を捉えることに繋がります。その多様な視点は、日本とは全く異なる価値観のもとで生きている途上国の人々と協働体制を構築していく際にも、自分を大きく助けてくれるものであると考えています。現在はルワンダとブルンジの政治体制に関する研究を行っていますが、現地の政治指導者たちについてより多角的に考えることで、キャリアを通じて大切な視点を身につけられていると感じています。今後も勉強を続けながら、様々な価値観の人々と協働することができる人材に成長していきたいと思っています。

宮本　聖斗さん

（博士後期課程３年）
2020 年度神戸大学大学院国際文化学研究科博士前期課程修了
研究テーマ：「セルビアの欧州化と権威主義化」

私は学部の卒業間際に旧ユーゴの政治に興味を持ち始めました。大学院進学後は、旧ユーゴの中でもセルビアに焦点を当てて研究を進め、現在はセルビアにおける欧州化と権威主義化の実態およびメカニズムに大きな関心を持っています。

国際関係･比較政治論コースでは、政治学と国際関係論を主な学問的支柱に置きつつ、各院生の多様な研究課題と研究手法を受け入れる体制が整備されています。本コースの講義とゼミでは、質的研究と量的研究のノウハウ、担当教員が専門とする学問領域と地域の実状を幅広く習得することができます。さらに、他コースが開講する講義やゼミの履修も可能で、実際に私も修士時代に他コースの授業からも多くの学びを得ました。

本コースで実際に研究を進める際には、一ヶ月に数回の頻度で開催される、コース全体の院生と教員による研究発表会が非常に有益です。この研究発表会は、本コースの大きな特徴と言え、そこでの発表と質疑応答を通じ、自身の研究の質と質疑応答の技術を高めることができます。さらに、この研究発表会は、院生だけでなくコース所属の教員による研究発表の場でもあり、院生と教員全員が各々の研究を共有し、研鑽を重ねる取り組みでもあります。

修士でキャリアアップを目指す方にも、修士と博士を通して研究職を目指す方にも、非常に刺激的で有意義な環境が整っていると思います。

修了学生からのメッセージ

丸岡　樹奈さん

（2022 年度博士前期課程修了）
金沢大学人間社会学域国際学類卒業
研究テーマ：「文化多様性条約にみるユネスコの規範形成能力」
現在、日本放送協会（NHK）勤務

学部の卒業論文で、ユネスコ世界遺産の「政治化」問題を扱ったことから、文化を扱う国際機関であるユネスコと、その政治性について、さらに広い視点から研究に取り組みたいと感じ、本研究科へ進学しました。修士レポートでは、ユネスコの「文化多様性条約」に着目し、当条約の規範が加盟国をはじめ様々なアクターの影響のもとで形成される過程に関して研究を進めました。

本コースでは、定期的な指導演習の時間が設けられており、指導教員の先生のみならず、コースの先生方や院生の方々から多角的な意見をいただき、修士レポートの方向性を見出すことができました。また、修士課程の2年間で、研究と直結する授業以外にも、他コース･他研究科の授業も履修しました。ジェンダーと移民に関する問題や、ソフトを用いた政治現象の分析手法についても学び、幅広い興味や多様な視点を養えたと感じています。また、海外研修プログラムのチューターとしてパリのユネスコ本部に訪問し、学部生のサポートや、ユネスコ職員の方とお話させていただく大変貴重な機会もいただきました。

現在はテレビ局でディレクターとして働いており、国際ニュースを扱う部署に所属しています。「論文」と「テレビ」ーー。媒体こそ異なれど、“一つの物事をどう見つめどう伝えるか”という点で、大学院での学びが業務にも活かされていると感じます。限りある大学院生活、大変なこともあるかとは思いますが、この研究科での経験や学びが皆さんにとっても実り多きものであることを祈っています。

Couet Pauline（クエ・ポリーヌ）さん

（2023 年度博士前期課程修了）
フランス国立東洋言語文化学院日本学部卒業
研究テーマ：日本と NATO と欧州連合 (EU) との安全保障協力（Japan's Security Cooperation with NATO and the European Union (EU) ）
現在、パリ政治学院国際安全保障研究科博士後期課程在籍・フランス陸軍戦略大学（Ecole de Guerre）でインターン

I did my undergraduate at the French Institute for Eastern Languages (Inalco), where I double majored in Japanese Studies and International Relations. I then did a double master' s degree with Inalco and Kobe University. During my master' s degree, I specialized on the development of security and defense cooperation between Japan and Europe. My master' s report discussed the geopolitical factors that led to closer cooperation between Europe and Japan, as well as the development of a sense of community through shared values and strategic understanding.

A unique feature of the International Relations and Comparative Politics course is that it allowed me to actively discuss my research with teachers and student alike, which gave me the opportunity to gain the advice and opinion from many people, Japanese, European or other.

The rich debates and research presentations to which I assisted, as well as my classmates and teachers' input on my research throughout the year also helped me to articulate the structure of my report, and correct many of the shortcomings in the successive versions. Moreover, my academic course in Kobe University broadened my horizon on a range of topics relating to international relations. Even though it is not necessarily directly reflected in my report, the different courses I took helped develop my general understanding of the world.

As I wish to work for the French diplomacy in nurturing and developing relations between France and Japan, my studies in the graduate school of Intercultural Studies were very useful and gave me research knowledge, and enriching perspectives from Japan and around the world.

Q&A

学部では政治学や国際関係論を専攻していたわけではないのですが、大丈夫でしょうか。

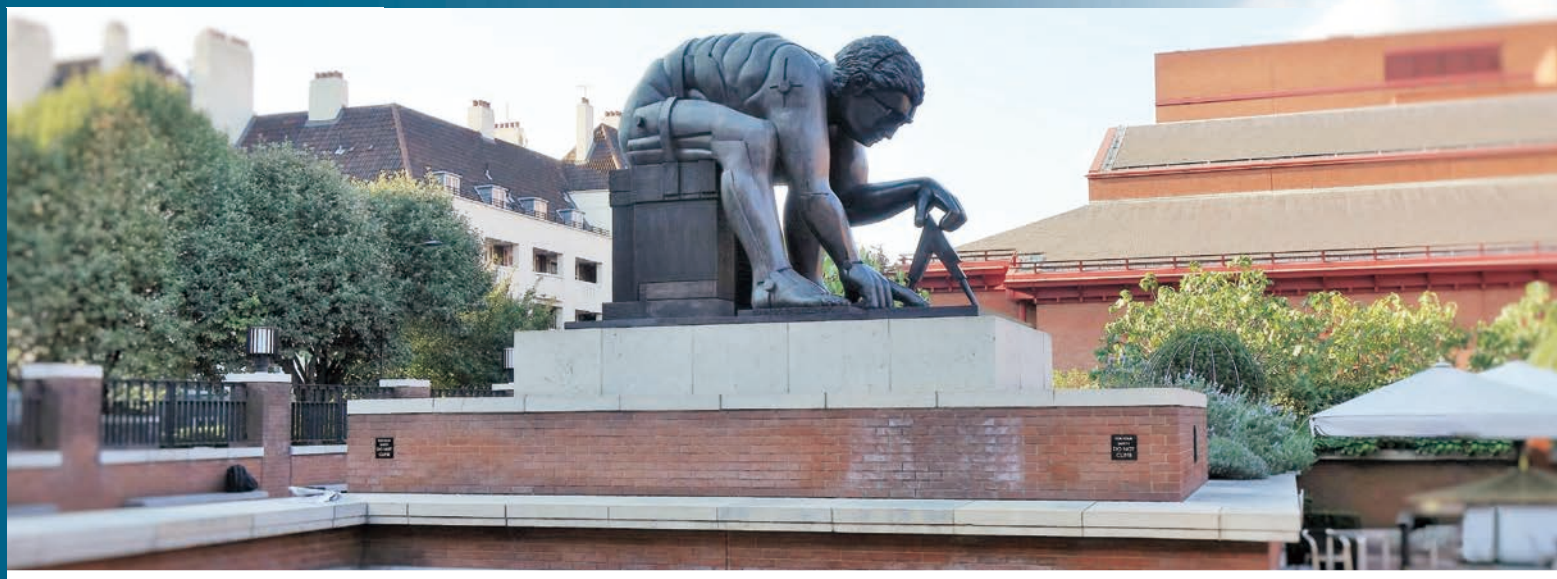
必ずしも学部で専攻している必要はありませんが、研究をより実りあるものとするために、入学までに予め基本的知識を身につけておくと良いでしょう。

現代政治の複雑な諸問題を理解するためには、これまでの学問領域を横断したり乗り越えたりしながら、新しい知見を目指す営みは意義高い挑戦であると考えられます。

オープンキャンパスで政治学の勉強の仕方に関して説明しますので、ぜひお越しください。

グローバル文化専攻・現代文化システム系

モダニティ論コース



国民国家という政治原理であれ市場という経済原理であれ、あるいは小説という文学形式であれ遠近法という絵画技法であれ、西欧近代に由来するこれらの社会的・文化的な装置は、現代世界の基本的な枠組みをかたちづくってきました。ところが現在、この西欧近代の原理（モダニティ）は、グローバル化の進展とともに根底から揺らいでいます。こうしたなかで求められているのは、あらためて「モダニティ」の意味を問いなおし、激動する世界のゆくえを的確に読み解くことだといえるでしょう。本コースでは、近現代の社会思想・経済思想・政治思想・科学思想・倫理思想など多岐にわたる言説群を丁寧に分析することをつうじて、アクチュアルな課題に応えうる足腰の強い思考力を養成することをめざしています。

就職実績

（前期課程） 外務省（専門職）、西宮市役所、神戸大学（職員）、日本山村硝子、高知新聞社（記者）、共同通信社（記者）、イオン、がんこフードサービス、オーケー株式会社、金蘭中学校・高等学校（教員）、JNC、兵庫県高校教員（英語）、宝塚市役所 他

（後期課程） 神戸大学大学院国際文化学研究科助教、中国河南省新郷学院専任講師、トルコ・チャナッカレオンセキズマルト大学日本語教育学科専任講師、三重大学人文学部専任講師、松山大学経済学部特任講師

在籍学生数

（前期課程） 6名

（後期課程） 0名

論文テーマ例

（前期課程） ミシェル・フーコーとエルキュリーヌ・バルバン、ピーター・バーガーの「日常」概念と宗教、批判理論における<女性的なもの/母性的なもの>をめぐって、E・フロムとフランクフルト学派—批判理論における精神分析学の受容をめぐって、H・アーレントにおける赦しの概念について、H・アーレントの現象学的決断主義—複数性概念の再考、自由とその制度化—H・アーレントの行為論、W・ベンヤミンにおける神話理論—永遠回帰とアレゴリーとの関係について、W・ベンヤミンの初期言語哲学再考—翻訳と批評を中心にして、ドゥルーズにおける革命の諸問題、戦時中上海映画におけるジェンダー表象、ヴァナキュラー・モダニズムとしての映画—ミリアム・ハンセンの映画理論について　他

（後期課程） エルンスト・ユンガー、技術と近代、ニクラス・ルーマン、社会システム論、ハーバート・スペンサー、映画と公共圏、D.H. ロレンス、エコクリティシズム、ピーター・バーガー　他

所属教員の紹介

上野　成利　教授　近代政治思想系譜論特殊講義ほか

政治思想・社会思想史。ホルクハイマー、アドルノらフランクフルト学派にかんする思想史研究を基軸にしながら、「暴力」「自由」「公共性」等の鍵概念の社会哲学的な分析に取り組んでいます。
著書：『思考のフロンティア 暴力』（岩波書店）など。

田中　祐理子　教授　近代科学思想系譜論特殊講義ほか

科学哲学・科学史。近現代の医学を中心とした科学の歴史と、同時代の哲学を研究しています。科学と人間性の関係を、生命科学や原子物理学の歴史を通じて考察しています。
著書：『病む、生きる、身体の歴史』（青土社）など。

鹿野　祐嗣　助教　近代社会思想系譜論特殊講義ほか

現代フランス哲学・哲学史・精神分析理論。当時の社会的・政治的状況を考慮しながら、ドゥルーズの哲学を中心に哲学史や精神分析理論を研究しています。
著書：『ドゥルーズ『意味の論理学』の注釈と研究——出来事、運命愛、そして永久革命』（岩波書店）など。

箱田 徹　准教授　近代思想文化系譜論特殊講義ほか

社会思想史、社会理論。批判的な社会理論や社会哲学の展開と気候やロジスティクスといった今日的課題の動向とを見据えた上で、二〇世紀後半の社会思想の新たな読み方を探究しています。
著書：『ミシェル・フーコー』（講談社現代新書）など。

所属学生からのメッセージ

三好　帆南さん
（博士前期課程２年）
広島市立大学芸術学部卒業
研究テーマ：「芸術と社会の関係、身体イメージ」

私は身体をキーワードに芸術と社会の関係について研究しています。学部で写真メディアを使った制作活動を行っていたときに、写真イメージをよみとく言説や、写真技術と身体の関わりに関心を持つようになりました。また交換留学先のドイツで、ミュージアムの公共空間としての可能性を感じ、卒業後は美術館での教育普及活動に携わりました。現在は、文化施設に勤めながら社会人学生として研究を進めています。社会人として働くうちに、芸術と社会の関係性を考える上で、芸術分野のみならず、領域を横断した視点を持つ必要性を感じるようになりました。そこで芸術理論と同時にそれと深く関わる思想的背景を学びたく、モダニティ論コースに進学しました。

本コースは、美学、社会思想史、政治思想史、哲学、文学など多岐にわたる講座が開設されており、自身の研究分野を多角的に検討できる環境です。また、本コースの特色であるテキストを丁寧に読むことを通して、物事を批判的に考察する視座を育むことができると感じています。

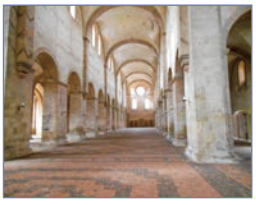
李　珂さん
（博士後期課程３年）
神戸大学大学院国際文化学研究科博士前期課程修了
研究テーマ：「映画と公共圏」

私は、中国の初期映画史について研究をしています。とくに清末民初の上海映画におけるヴァナキュラー・モダニティと公共圏に関する研究をテーマとしています。映画学は、美学、哲学、心理学、社会学、歴史学、経済学、政治学など既存の学問の枠組みを超え、社会のさまざまな側面を総合的にとらえることができる学問だと言えるでしょう。近代社会のあらゆる動向と密接な関係を持っている映画を研究するためには、既存の学問領域にとらわれない学際的な視点が重要です。

本コースでは文化言説論、表象文化論、政治思想史、社会思想史等のゼミが設けられ、便利な研究環境も備えられています。多くの授業は少人数で行われ、さまざまなテクストを丁寧に読解し、その内容について発表を行い、先生や学生と議論する形です。そこで複数の分野の先生の意見を聞き、領域を横断して多面的なアドバイスや啓発を受けることができます。また、院生研究室での、他コースの学生との知的交流も刺激的です。さらに、モダニティ論コースだけではなく、他コースの授業をとることも可能なため、より一層学際的研究ができます。専門的な知識を身につけながら思考力を磨くことができる環境で、充実した研究生活を過ごすことができています。

修了学生からのメッセージ

畠中　茉莉子さん
（2020 年度博士後期課程修了）
研究テーマ：「ニクラス・ルーマンの宗教社会学」
現在、三重大学人文学部文化学科専任講師



私はニクラス・ルーマンという現代ドイツの社会学者が、社会の近代化とその中における宗教の変容をどのように捉えようとしてきたのかを研究してきました。モダニティ論には社会思想史、政治思想史、経済思想史、美学・表象文化論、英文学と非常に多岐に渡る分野をご専門にされる先生方がいらっしゃるので、普段の指導教員の先生とのやり取りのほか、年に数回開かれるコース発表会では「どんな質問が来るのだろう」と、いつもひやひやしていたことを思い出します。私の研究するルーマンは社会システム理論を得意とする論者なので、私は手をかえ品をかえ「宗教というシステムが近代社会において担っている機能とは〇〇です」という社会学的な説明を繰り返すことになるのですが、そのたび、当然のように先生方からは「その論拠は何か」「貴方のいう機能とは何か」「それは〇〇の議論とどう違うのか」「人びとの複雑な信仰をそんなに簡単に説明してしまっていいのか」という、極めて鋭い質問が飛んできます。それには毎度、頭を悩ませたものでした。しかし今にして思えば、それは各々の分野の専門家から、確かな知見に基づく「問い」を投げかけてもらえる極めて貴重な機会だったと、大学の教員になった今、実感しています。モダニティ論に来られる方にはその「厳しさ」と、そしてそこに込められた意味をゆっくりと受け取りながら、ただそれには決して飲み込まれないように、長い目で見て自分自身のための学びを進めていってくれることを、少しだけ先にその場を経験した者として、望んでいます。

野上　俊彦さん
（2019 年度博士課程後期課程修了）
研究テーマ：「エルンスト・ユンガーとドイツの国民的アイデンティティ」
現在、松山大学経済学部特任講師

私の研究対象は、エルンスト・ユンガーという20世紀ドイツの思想家です。この人は作家（言語芸術家）ですが、その著作の内容は政治、哲学、歴史、宗教、科学、技術、芸術など多岐にわたるので、はじめのうちは彼の言葉に圧倒されるばかりでした。

そのような私にとって、モダニティ論コースの環境はとてもありがたいものでした。本コースには、社会思想・政治思想や美学・芸術学など、複数の分野の専門家による学際的な指導体制が整っており、数多くの貴重な助言を得ることができました。また学内外の研究者を集めて実施される研究会や、院生同士の自主的な読書会などから、思いがけない学びや気づきが得られるということも少なくありませんでした。そして本コースでは、普段の授業・演習でも論文指導でも、テクストを徹底的に精読することが重視されます。地道でたいへんな作業ですが、そこから得られる知的刺激はテクスト読解の醍醐味であり、なによりこれが、思想家の難解なテクストにアプローチするための最適の方法でもあります。

私が大学院修了後もなんとか自力で研究を進められているのは、本コースでさまざまな知的刺激を受けながら基本的な研究姿勢（絶えず視野を広げるよう努めつつ、事柄を丁寧に観察し、かつ概括的に把握すること）を学べたからだと思います。この経験は、研究にかぎらず、広く課題一般に取り組む際にも活きてくるものです。大学に職を得て学生教育にも注力するようになった現在、このことを強く感じています。

Q&A

研究テーマを絞り込むのではなく、広く「モダニティ」全般について学ぶことは可能でしょうか？

可能です。むしろ近現代の思想的諸問題について広く学べることが、モダニティ論コースの強みともいえます。とりわけ前期課程のキャリアアップ型プログラム履修生の場合には、モダニティ論コースで開講される思想関連の科目群を中心に履修しながら、幅広い分野について知見を深めることが望ましいでしょう。研究者養成型プログラム履修生の場合には、もちろん適切にテーマを絞り込まなければ修士論文を執筆することは不可能ですが、従来型の大学院では扱いにくい学際的な主題を正面から取り上げることができる点が本コースの最大の特長といえます。

フランス思想やドイツ思想を研究したいのですが、仏語や独語の知識はどれくらい必要でしょうか？

前期課程「研究者養成型」プログラム志望者でフランス思想やドイツ思想を研究対象とする人の場合には、仏語や独語の読解力をある程度そなえていることが望ましいといえます。とはいえ（外国籍学生特別入試ではない）一般入試の場合には英語で受験することになりますから、受験に臨んでまずは英語の読解力に磨きをかけ、前期課程のあいだに仏語や独語の読解力を鍛えてゆけばよいでしょう。むろん英米思想の研究志望者の場合には、独仏語の代わりに英語のテクスト読解にいっそう注力してください（なおキャリアアップ型プログラム履修生の場合には独仏語をかならずしも必要としないと考えてもらって差し支えありません）。

グローバル文化専攻・現代文化システム系

先端社会論コース

現代社会では、人間・自然・社会の相互関係が大きく揺らぎ、ますます複雑化してきています。「先端社会論」コースは、この現代社会の先端的な問題群を、人文・社会科学を交差する学際的アプローチによって、領域横断的に検討することを課題としています。例えば、男女の性差を社会的に構成されたものととらえるジェンダー論の視点から、家族や個人や国家をめぐる考え方の変化を分析すること。貧困、移住、人権侵害、体制転換などのグローバルな課題の公正な解決法を構想すること。メディア・テクノロジーの革新が促進する消費社会の情報化と多文化社会が要請する新たな社会観や人間観を模索すること。「先端社会論」コースは、こうした錯綜する諸問題を理論的に解きほぐし、それらに現実的に対処していくためのトレーニングの場です。

進路実績
（前期課程）兵庫県庁、富士通BSC、（株）三菱倉庫、（株）コベルコシステムなど
（後期課程）花園大学文学部創造表現学科准教授、京大グローバルCOE研究員など

在籍学生数
（前期課程）10名
（後期課程）4名

論文テーマ例

（前期課程）
- Representation of Romanies in Tony Gatlif's Films
- <私>のこの眼差しは、誰のものか―パク・チャヌク『お嬢さん』における「男性の視線」の流用をめぐるオートエスノグラフィー
- 「脆弱な女性たち」が問い直すネパールにおける女性運動―バディ女性の運動から
- 日本型雇用システムにおける差別と抵抗―トランスジェンダーの新卒就職活動に注目して
- 在日中国籍技能実習生の階層帰属意識
- 「二人っ子政策」における女性の「産む・産まない」自己決定の葛藤―潮州女性の人生の歩みを通して
- 近親者へのカミングアウトの有無がセックスワーカーの生活に与える影響
- Intersectionality and Employment: Discrimination Against Muslim Women in the Process of Job-Seeking in Japan

（後期課程）
- 日中における『シャーロックホームズ』の受容
- Diffusion of Hip Hop: A Critical Reappraisal of 'Call and Response' in the East Asian Street Dance Culture
- Rethinking Queer Migrant Experience through the Lens of Drag Performance
- 宝塚歌劇における「女同士の絆」

所属教員の紹介

青山　薫　教授　ジェンダー社会文化論特殊講義ほか
専門は社会学、ジェンダーとセクシュアリティ。グローバル化、多文化主義、社会的排除と包摂、親密権、表象の問題などに関心を持ち、移住、ケア/性労働、同性婚、性同一性「障害」など、公私にわたる変化を引き起こす事象について、理論・方法論・実証研究を結びつけて追求しています。

小笠原　博毅　教授　メディア社会文化論特殊講義ほか
専門は社会学、カルチュラル・スタディーズ、現代イギリス研究。とくにメディアとスポーツをフィールドとして多文化資本主義と人種差別の文化との関係を、実証的、理論的、かつ思想史的に検証し考察しています。

工藤　晴子　准教授　文化規範形成論特殊講義ほか
専門は国際社会学、難民・強制移動、クィア移住。人の国際移動とジェンダーやセクシュアリティの関わりについて特に難民・強制移住におけるセクシュアリティの規範という視点から研究しています。また難民支援の実務経験から、支援の暴力性や支援者/被支援者の権力関係という問題にも取り組んでいます。

桜井　徹　教授　現代法規範論特殊講義ほか
専門は法哲学。「グローバル・ジャスティス」、つまり、移民・難民問題、経済格差、テロ、人権侵害といったグローバルな課題を前に、国境という境界線がいかなる意味をもつのかというテーマを研究しています。最近は特に、国際移住が増加する中で、普遍的な人権の保護とナショナリズムとの間の衝突をいかに調整するかという問題に取り組んでいます。

西澤　晃彦　教授　現代社会理論特殊講義ほか
専門は社会学、都市社会学、社会問題論。社会的排除と貧困を主たるテーマとして、自己アイデンティティの構築・社会的世界の形成・都市空間の構成と社会的排除の関連について研究を行なってきました。

所属学生からのメッセージ

白井　望人さん

（博士前期課程２年）
神戸大学国際人間科学部卒業
研究テーマ：「ゲイ・バイセクシュアル男性のライフコースとそれに関する考え方についての研究」

先端社会論コースは、現代社会の様々な問題について、様々なアプローチで研究をしている先生方や学生がたくさんいます。こう書くと、「何をすればいいのかわからない！関心がバラバラで効率的に学べないのではないか？」と思う人もいるかもしれません。しかし、このコースで色々なことを学び、先生方や学生と議論していくなかで、バラバラだと思っていた様々な問題が、意外なところで結びついているんだと発見するときが必ず来ます。

私は、ゲイやバイセクシュアル等の「男性に惹かれる男性」が、女性と結婚するのか、男性と連れ添っていくのか、そして男性たち自身が様々な生き方の選択肢をどのように捉えているのかに興味があり、研究しています。このテーマにぴったり合う研究をしている先生や学生は周りにいないのですが、むしろそのことが自分ひとりでは考え付かなかった視点を提供してくれたり、考えもしなかった現象と自分の関心が結びついていることの発見につながりました。

そして、そのような議論が活発にできる雰囲気が先端社会論コースにはあります。先生方は気軽に議論をしてくれるので、お忙しい中でもしょっちゅう時間を作っていただき、たくさんアドバイスをもらえます。おかげさまで、修士課程のうちに雑誌に論文をひとつ掲載することができました。また、学生同士も仲良く、学部時代よりも友達が出来ましたし、色んな議論が出来て「学生」をしているな！と強く感じます。自分の研究に限らず、決して他人事ではない様々な現代社会の課題について、色々な視点で考えることができる能力を養える点で、とてもおすすめのコースです。

神谷　穂香さん

（博士後期課程２年）
学習院大学人文科学研究科修了
研究テーマ：「現代日本のセックスワーカーによる発信について」

私は現代日本のセックスワーカーによる発信、具体的にはエッセイ、SNS での投稿、YouTube 動画などを対象に勉強しています。博士前期課程までは他大学に在籍していましたが、当時の指導教員の退任を機に、このテーマにおいて代表的な研究者でいらっしゃる青山薫先生のもとへ進学することを決めました。

先端社会論コースでは、自分の専門性を磨きつつ同時に分野を越えた勉強をすることが可能です。これは、本コースの先生方の専門がさまざまであること、他のコースと合同で利用する院生研究室において多様な関心を持つ学生と交流できることなどから感じます。また、研究科の特徴として留学生が多いため、日常的に英語を使い、異なるルーツを持つ者同士で刺激を受け合っています。

授業以外では、国際文化学研究推進インスティテュートの主催で定期的にセミナーが行われるため、他大学の先生や学生とも交流の機会を持つことができます。さらに本学は、博士後期課程の学生へのキャリアアップ支援が手厚く、就職支援のイベント、大学教員準備講座、大学教員インターンシップなどに参加することができます。

以上のように本学や本研究科、あるいは本コースには、研究者として、そして１人の人間として成長できる環境があると感じています。

修了学生からのメッセージ

ラズグイ・ヨーズリさん

（2022 年度博士後期課程修了）
イタリア Ca' Foscari University of Venice, Department of Humanities 卒業
研究テーマ：Football fandom

私が本研究科に進学することになったきっかけは、５年前の今の指導教員との出会いでした。当時はイタリアで博士前期課程を取ろうと考えていて、日本におけるサッカーサポーターについての研究を行っていました。前期課程の２年目で神戸大学に留学し、サッカーファンダムの研究に造詣が深い小笠原先生に出会い、それが今の研究を始めたきっかけとなりました。幅広い知識をお持ちの先生方はもちろん、興味深い研究をされている研究者が数多く在籍する環境に恵まれ、アイディアやインスピレーションがいっぱい生まれる研究室に所属していることが貴重な経験の源になっていると感じています。

私自身の研究テーマとしては、ヴィッセル神戸のサポーター文化について調査しています。スタジアムでの観戦やサポーターの活動などを人類学研究でよく用いられる参与観察というメソドロジーを使いながら、現代社会におけるサッカーの現代儀礼の分析を国際化との関連性から考察しています。博士後期課程では、必要な単位は少ないものの、ゼミへの参加や先端社会論コースの授業を自由に受けることができ、現代の問題について議論したり、アイディアを交換することで、ダイナミックな形で自分の研究に役立つインプットがたくさんいただけることも、とてもありがたいと思っています。

HUGHES Phillip さん

（博士後期課程修了）
研究テーマ：Queer migration and drag performance in Japan: Rethinking identification, participation and belonging
現在、兵庫県立大学国際交流機構（客員教員）

神戸大学国際文化学研究科に入学したきっかけは、現代における社会問題とその背景にある事情を学ぶだけではなく、現在の日本と私の出身地であるイギリスやその他の国との関係を歴史的に遡りながら、広い学際的視野で研究ができると考えたからです。

本研究科では、当事者研究を理論的にも方法論的にも肯定しつつ、日本における外国人研究者である自身をパラダイムとして、マジョリティ／マイノリティ、加害者／被害者、差別者／被差別者という位置づけを実証的に研究しました。そのような理論的視点から、LGBTQ 移住者の規範意識、セクシュアリティやジェンダーへの期待は、移住を通じてどのように再形成されるのかを論じ、移住は日本の LGBTQ コミュニティ、文化、政治を変容させたことが明らかになりました。このような先進的課題を研究する私には、本研究科の先端社会論コースはぴったり合いました。

指導教員の青山教授のおかげで、教育現場でも、多様な価値観と広い視野を持ちながら、理論と実践の両輪を回しながら前に進めています。本コースで学んだ私が教員として教鞭を執り、今日の学生に伝えたいことは、「今日的課題の発見に努めると同時に、それらをアカデミックな研究の場に反映させる視野の広さと柔軟性を持ち合わせながら、学際的かつ多角的に研究することを通して、諸問題を共有することの重要性」であり、その重要性を教え伝えていくことを自身の使命とし、さまざまな能力を磨くようにこころがけています。

Q&A

コース名の「先端社会論」っていう言葉はあまり聞いたことがなく、なじみがないのですが？

そうですね。「先端社会」ってどんな社会なの？と思われちゃうかもしれませんね。でも、「先端社会論」コースは、「先端社会を論じる」コースではなく、「先端的な社会問題を論じる」コース、っていう意味なんです。もう少し詳しくいうと、「現代社会の先端的な問題群に学際的に取りくむ」コースです。

ああ。そうだったんですか。だけど、「先端的な問題群」って、たとえばどんな問題ですか？

科学技術の進歩とか情報化、それにグローバル化とか、現代社会に特有な性格によって引き起こされている新しい問題群、っていったらいいかしらね。たとえば格差と貧困、レイシズム、国際移住の増加に伴う多文化化とか。身近なところでは、男女の性差の意味あいがゆれ動いていることとか。

そういう問題だったら、ずっと気になっていたことにカブってくるかなあ。でも、さきほど「学際的に取りくむ」っていうお話でしたけれど、専門分野としてはどうなるんでしょうか？

専門分野っていう言い方をすると、今現在のコーススタッフは、社会学、カルチュラル・スタディーズ、ジェンダー論、法学、哲学っていうことになるかしら。けれども、「学際的に取りくむ」っていうことは、そうした従来の分野が単独では扱いきれない問題に取りくむ、っていうことですから、あまり専門分野は気にしなくてもいいんじゃないかしらね。

それにしても、学部時代の専門とはだいぶんズレているんですが、だいじょうぶでしょうか？

この研究科には、そういう人のためにキャリアアップ型プログラムがありますし、入試問題に合格点が取れるだけの基礎学力があれば、あとは入学後の熱意と努力だと思いますよ。

すみません。私も質問していいですか。私はドクターまで進学したいという希望を持っているのですが、先端社会論コースの研究者養成型プログラムの入試はかなり難関なのでしょうか？

ドクター進学を考えているのなら、前期課程の入試よりもむしろ後期課程の入試に注意してください。募集人数を見てもわかりますように、前期課程に入学しても後期課程に進学できるとは限りませんから。研究者養成型プログラムを選択するのでしたら、前期課程・後期課程の５年間で博士論文を完成させるつもりで、そのために必要な基礎学力をしっかり身につけておいてくださいね。

グローバル文化専攻・現代文化システム系

芸術文化論コース

芸術文化論コースは、芸術文化コンテンツ系と芸術文化環境系から構成され、造形美術（絵画）、文学、舞台芸術（音楽、オペラ、演劇）、ファッションなどの芸術（アート）作品と社会との関わりについて研究しています。

コンテンツ系では作品内容の分析を通してそこに反映される社会意識や世界観を考えます。環境系では、創作の自由やアートへ容易にアクセスできる権利の保障、文化施設運営の実際などについて、国際比較を踏まえて考察し、文化政策のグランドデザインや、その具体的実践としての芸術と社会をつなぐアートマネジメントに取り組んでいます。

本コースでは、学部時代の専門に関わらず、芸術とそれを支える環境に関心を持ち、専門的に学ぼうとする意欲にあふれた学生の受験を歓迎します。

進路実績

（前期課程） 国際交流基金、神戸大学創造連携本部助教、びわ湖芸術文化財団、兵庫県立芸術文化センター、神戸市民文化振興財団、関西フィルハーモニー管弦楽団、広島市現代美術館、同志社大学職員、大阪大学職員、安芸市役所、豊岡市役所、京都市役所、NHK、カフェ・カンパニー株式会社、株式会社ナレッジラボ、岡谷鋼機株式会社、株式会社 SIG、他

（後期課程） 同志社大学教授、福井大学准教授、京都橘大学准教授、東北工業大学准教授、大阪府商工労働部主任研究員、サントリーホールディングス、神戸大学非常勤講師、大阪市立大学非常勤講師、関西学院大学非常勤講師、大手前大学非常勤講師、流通科学大学非常勤講師、龍谷大学准教授。

在籍学生数

（前期課程） 7名
（後期課程） 2名

論文テーマ例

（前期課程） 地域コミュニティ、パブリックシアターの組織運営、民間非営利組織間のネットワーク形成、持続可能なコミュニティアート、崇仁地区のアートプロジェクト、ベルリンの「社会文化センター」、スウェーデンの文化政策と市民活動、文化遺産の保護と活用：フランスと中国の旧市街地、パリ市の都市空間整備、ベルギーにおけるコンゴ系ディアスポラ、日韓インディーズバンド、ロシア帝政期の教会建築、ジャポニスム、林忠正、印象派画家カイユボット、フランスの女性作家、前衛書と抽象表現主義絵画、コルセットの表象、日本のストリートファッション、他

（後期課程） 文化政策と社会的包摂、日本の近代広告、ドーミエと近代都市パリ、戦前の日本における近代フランス音楽の受容、ジャポニスム期の日本陶磁器コレクションと日仏の交易、宮沢賢治と光学、シンガポールの文化政策、他

所属教員の紹介

石田　圭子　准教授　近現代芸術理論特殊講義ほか

美学・芸術論が専門です。政治と芸術の関係について、理論的・歴史的な観点から研究を進めています。また、社会や政治の問題にコミットメントしようとする近年のアートの動向にも関心があります。授業では理論と具体的作品の両側面からアートとは何かを考えたいと思います。

礒谷　有亮　講師　現代芸術社会論特殊講義ほか

専門は近代美術史と写真史。特に両世界大戦間期のフランスの事例を中心に、写真と同時代の美術、グラフィックデザイン、印刷出版業の変化と発展との関わりを研究しています。また写真の歴史が編まれるにあたり、美術史、美術館や図書館の果たした役割にも関心があります。

岡本　佳子　講師　芸術文化表現論特殊講義ほか

研究分野は舞台芸術学、西洋音楽史です。特に20世紀転換期の中・東欧の舞台芸術作品（オペラや演劇等）を対象として、音楽や文学、パフォーマンスの側面から成立過程の解明と作品分析を行うとともに、作品が古典化されていく歴史的変遷について研究しています。

髙田　映介　講師　文化環境形成論特殊講義ほか

19世紀ロシアの作家･劇作家チェーホフを専門に、人間が抱える諸問題と文学と科学の関係について研究しています。また、現代ロシア文学にも関心があります。授業では文学や芸術の豊かさに触れながら、異文化を知り広い視野で物事を捉える場を皆さんと作っていきたいと考えています。

新任教員着任予定　現代芸術動態論特殊講義担当

所属学生からのメッセージ

王　嘉儀さん

（博士前期課程２年）
厦門大学外国語学部卒業
研究テーマ：「日本における海外ミュージカル」

幼い頃から舞台芸術に強い関心を寄せ、役者としても観客としても、様々な経験を積んでまいりました。学部時代には、特にミュージカルに興味を持ち、日本での海外ミュージカルの上演に関する考察を深め、それが私の研究テーマとなりました。より深く、包括的な研究を行うために、本研究科の芸術文化論コースに進学しました。

本コースの魅力は、現代アート、写真、オペラ、各国の文学など、多岐にわたる芸術分野の授業に触れることができる点にあります。様々な芸術形式の個性や発展の歴史を理解し、文化や社会との関連性を深めることができます。授業は通常、少人数で行われ、議論や発表が活発な雰囲気です。学期中には、美術館や写真展を訪れることもあり、宝塚歌劇や歌舞伎、文楽などの舞台芸術を鑑賞する貴重な機会も得られます。これらの見学を通じて、芸術に対する感性を磨くことができます。先生方は親切で優しく、研究に対する丁寧なサポートを提供しています。また、研究室では、日本、中国、イタリア、フィリピン、インドネシアなど、異なる国籍や文化背景を持つ学生との交流が盛んで、友好的な雰囲気の中で学び合える環境です。

船戸　杏珠さん

（博士前期課程２年）
京都産業大学国際関係学部国際関係学科卒業
研究テーマ：「コード化する身体とファッション」

私は、媒体となる身体とファッションの関係性について研究しています。

修士1年では「インターネットにおけるジェンダーとファッションの変容」というテーマで口頭発表を行いました。現在は1960年代以降のファッションデザインを中心に研究しています。この時代はオートクチュールの誕生によってファッションは作品化され、芸術家としてのデザイナーが形成され、ファッションを芸術作品として捉えようとする考え方が普及しました。綿密な作品分析を中心に、身体を価値観やアイデンテンティティの媒体と捉え、身につけること一身体を行き来しながら研究を進めています。

芸術文化論コースでは、アートをはじめとしてオペラや演劇、文学などあらゆる芸術学群での授業が展開されており、国籍を超えた学生同士とのディスカッションを通して文化的な視座を深めることができます。私自身他分野からの進学ということもあり授業について行くのに日々苦労していますが、真摯に向き合ってくださるコースの先生方含め、熱意のある生徒に囲まれて刺激の多い毎日を送っています。芸術に対する複合的な視野を養いながら自身の研究をブラッシュアップできるのが本コースの特色だと思います。

修了学生からのメッセージ

久保　優梨子さん

（博士前期課程修了）
研究テーマ：地方芸術祭は必要か 地方都市・神戸での試み「アート・プロジェクト KOBE 2019:TRANS- 」を例に
現在、NPO 法人 BEPPU PROJECT 正職員。

在学中は、多様な現代アートのなかでも、とりわけ嗅覚を刺激する作品に興味を持っていました。いっぽう課外では、ギャラリーでのインターンや芸術祭のスタッフといった形で、実務経験を積むことに専心しました。

現在は、大分県別府市でアート振興やまちづくりに取り組むNPO 法人 BEPPU PROJECT に在籍しています。狭く深くアートを極めるというより、色々な人が色々な関わり方をできるアートや文化のあり方を模索している組織です。よって業務内容は、アーティストとやりとりをして良い作品を生み出すことにとどまらず、広報、事務、協賛活動などと多岐に渡ります。加えて、必ずしもアートに詳しくない地域住民や行政職員と前向きな関係を築くことも、地域（とくに地方都市）でアートを実践・継続するには非常に重要です。彼らと協働しながら、いかにアートと地域の双方にとって良い活動ができるか、常に考えて仕事をしています。

そんな実際の現場では、アートへの愛情や知識だけではどうにもならず、打ちのめされそうになることもあります。しかしそんな場面でこそ、在学中に得た学びが現在の自分の基礎体力、あるいは指針になっていると感じることが多く、本研究科の素晴らしさをしみじみと思い出します。本研究科の多様な学術分野に触れられる環境に身を置いたことは、結果的に、決して単体の事物としては存在せず、現代社会のあらゆる事象や様相を反映する存在としての現代アートに対する理解を深め、それを社会に広げたいという目標を抱くことにつながりました。

これから入学するみなさんには、おそらくいま想像が及ぶ以上に、学生という立場は特権的でチャンスに溢れているということを伝えたいです。この恵まれた環境を最大限活用し、興味のあることや試してみたいことにおそれず取り組んでください。積極的かつ真摯に行動すれば、コースの先生方は言わずもがな、学外にも応えてくれる大人がきっとたくさん現れると思います。

小林　瑠音さん

（博士後期課程修了）
ウォーリック大学大学院芸術学科修士課程修了
研究テーマ：1970 年代英国のコミュニティ・アート運動、英国アーツカウンシル史
現在、芸術文化観光専門職大学講師

国際文化学研究科在学時は、1970 年代に興隆した英国のコミュニティ・アート運動と英国アーツカウンシルの関係性に焦点を当て、文化政策の観点から博士論文にまとめました。修了後も国際文化学研究推進センター（Promis）学術研究員として充実した研究環境に身を置くことができ、領域横断的な研究ネットワークの構築手法を学ぶことができました。現在は、パフォーミング・アーツと観光を架橋する教育機関にて、教員として研鑽を積んでいます。

私は、学部、修士、博士でそれぞれ専門分野の転向を重ねてきたうえに、一旦アカデミアを離れて芸術祭や小劇場の現場で働くなど、回り道をしてきたのですが、本研究科での勉学を通して、理論と実践双方の視点から事象を捉え、それぞれの言語を操るバランス能力と洞察力を養うことができました。在学時の人脈は、現在の職場でも大いに役立っています。

また、美術史、美学、文化研究、社会学、政治学など各領域で第一線を担われている先生方のゼミや研究会で、最先端の研究動向や専門知に触れることができ、それらの経験は、今後の調査・研究に向けて、巨視的なアプローチを探るうえで重要な土壌となっています。

Q&A

学部時代の専門は芸術がテーマではないのですが？

芸術文化の研究もまた歴史や現代社会のさまざまな事象につながるものですから、学部時代の勉強を生かしてテーマ設定をすることは可能です。また博士前期課程では、自分の関心あるテーマだけではなく、いろいろな作品にできるだけ幅広く触れてほしいと考えています。

語学力は必要でしょうか。

研究する際に必要になる考え方の多くが欧米の研究を基礎としていることもあり、英語を知っていることは研究の大きな助けになります。また、芸術文化は言語と密接な関係にありますので、すくなくとも入学後には研究対象と関係する語学を学習してほしいと思います。

グローバル文化専攻・言語情報コミュニケーション系

言語コミュニケーションコース

「ことば」は概念やメッセージを相手に伝える単なるコミュニケーションの手段であるだけではなく、人間の認知・思考・習慣とも密接に関わる文化そのものともいえます。本コースでは言語構造や言語慣用に関する比較・対照分析を基に、外国人に対する有効な日本語教授法の探求、第二言語習得における言語的・文化的分析と方法論の開発、多種多様なレトリックの比較分析などを進め、グローバリゼーションの進展の中で今や不可欠になりつつある異文化間コミュニケーション上の諸問題の解決に積極的に取り組んでいます。基礎から応用に至る、言語コミュニケーションに関わる様々な講義・演習を通して、実践的応用能力あるいは教育・研究能力を持つ人材の養成を目指しています。

進路実績
（前期課程） 日本経済大学講師、北洋大学国際文化学部講師、大阪府立高等学校（英語教員）、国際交流基金ニューデリー日本文化センター、（株）資生堂、（株）シャープ、アップ教育企画、日本放送協会、JR西日本関連会社、特許事務所、他
（後期課程） 天津外国語大学教授、中国電子科技大学准教授、関西学院大学准教授、上海大学准教授、東京大学特任講師、東海東京証券、他

在籍学生数
（前期課程） 18名
（後期課程） 7名

論文テーマ例
（前期課程） バイリンガリズム、日･仏語のフィラー、カタカナ表記語と社会言語学、説得とレトリック、マンガのオノマトペ翻訳、日本語教育の社会的側面、日本語の接続詞、他
（後期課程） 第二言語の形態統語の習得、複合動詞、日中同形漢語、フィクションのレトリック、物語論、自由間接話法と文体論、日本語教育の歴史、日本語のモダリティ表現、格助詞「に」「で」「を」の習得における定例フィードバックの効果、他

所属教員の紹介

石田　雄樹　講師　言語慣用類型論特殊講義ほか
フランス文学を中心に、言語学や物語論の理論に基づいた、文学作品の語りの特徴や構造の分析を主に行っています。また、自己同一性、幸福、翻訳、異文化理解といった思想・文化的問題を「語り」という側面から研究しています。私は「私」をどのように語るのか、自己語りの幸福とは何かといった問題に特に関心があります。

川上　尚恵　講師　日本語教育応用論特殊講義ほか
中国や日本国内を対象とした日本語教育史研究を主に行っています。学習／教育に関わる人々の実践や日本語教育の枠組みを史的な観点から分析することで、日本語教育の社会的意義や役割、あり方を問いたいと思っています。日本語教育の実践分野に関する研究も視野に入れており、特にノンネイティブの日本語教師養成について関心があります。

小松原　哲太　講師　レトリカル・コミュニケーション論特殊講義ほか
言葉の意味を効果的に表現するレトリックを、意味論、文法論、語用論を中心とした言語学の立場から研究しています。意味を理解し、ときに誤解する、私たち言語使用者の柔軟な解釈を重視する、認知言語学の理論を背景として、具体的な用例の収集、記述、分析にもとづく、言語のコミュニケーション機能の探求を行っています。

齊藤　美穂　准教授　日本語教育方法論特殊講義ほか
私の研究の主な関心領域は、方言を含む現代日本語文法の分析と、外国にルーツを持つ子どもたちへの第二言語としての日本語教育です。近年は特に、子どもたちのアカデミックな言語習得を支援することに関心を持っています。

田中　順子　教授　第二言語習得論特殊講義ほか
第二言語習得（SLA）プロセスにおけるアウトプットとフィードバックの役割や、個人差（言語学習適性など）が SLA に及ぼす影響について研究をしています。また、第一言語（L1）には存在しない第二言語（L2）概念が、どのような過程で正しく（あるいは誤って）区分されて L2 形態にマッピングされるのかに関心があります。SLAのみならず，教室内での外国語学習やマルチリンガル環境下での言語習得とその問題点も扱っています。

南　佑亮　准教授　比較・対照言語論特殊講義ほか
言語記号は人間の認知能力とコミュニケーション上の目的によって動機づけられていると考える認知・機能言語学の立場から、英語と日本語の様々な文法構文について研究しています。特に、あまり注目されてこなかった現象に光を当て、その分析を通して話者の言語知識のあり方を少しずつ解明していくことに力を入れています。

所属学生からのメッセージ

上田　明歩さん

（博士前期課程２年）
神戸大学国際人間科学部卒業
研究テーマ：中国語を母語とする日本語学習者がカタカナ表記の外来語習得を困難とする要因の検討

私は学部生の４年間を神戸大学で過ごしました。中国人民大学への１年間の交換留学に参加するなど、学部生時代は中国語学習に特に力を入れて取り組んでおり、その中で「学部で身につけた中国語を使って学問に取り組んでみたい」という思いが芽生えたため大学院進学を決めました。また、学部生の頃から国際文化学研究科の先輩方と関わる機会が多かったのですが、いつも優しく真面目な先輩方が輝いて見え、憧れの先輩方のようになりたいと感じたことも、大学院に進学したいと思った理由の１つです。

学部の卒業論文では日本語を母語とする中国語学習者における動機づけの変化要因を扱いました。大学院では中国語を母語とする日本語学習者におけるカタカナ表記の外来語習得について研究しています。卒業論文の執筆の際に見えた反省点や改善点が山のようにあるので、修士課程ではより良い修了研究レポートを執筆することを最終的な目標として、努力を重ねていきたいと思っています。

さて、私は学部の頃から同じキャンパスに通っているのですが、実際に大学院に入学してから肌で感じたこととして、大学院ではどの先生方、先輩方、同級生たちとも密なコミュニケーションをとれることが挙げられます。講義もゼミも少人数で行われることがほとんどなので、より近い距離で先生に指導を仰いだり、友達と相談、協力しあったりすることができます。また、多様なバックグラウンドをもつ学生がいることも本コースの特徴で、これが言語コミュニケーションの研究をする上で大きな刺激となっています。これから先、皆さんとも一緒に研究できる日が来ることを心待ちにしています。

佐川　寛知さん

（博士後期課程３年）
熊本県立大学文学部卒業
研究テーマ：E. サイデンステッカーの翻訳論―自由間接話法に着目して―

「いや、アンタ、なんでその人の目線でしゃべってんのよ（笑）」
「それ、一体だれ目線だよ（笑）」

――とツッコミたくなる瞬間が、ときにコミュニケーションの中で起こったりしませんか？　このような瞬間は日常的なコミュニケーションの場だけではなく、小説の「語り」の中でも現れることがあります。「誰目線でこれは語られているの？登場人物？　それとも語り手？」という瞬間がまさにそうです。これは自由間接話法という小説における表現技法の一つです。私は、学部時代に好きな翻訳家であるサイデンステッカーの翻訳でこの技法を見かけました。しかし日本語原文を読んでも「自由間接話法らしさ」を感じることができませんでした。これが私の研究の出発地点です。日本文学の翻訳家サイデンステッカーの文体を通して、日本語のどんな要素が、何が自由間接話法になるのか、どうして自由間接話法として翻訳されたのか。これらを追求することが私の研究です。

言語コミュニケーションコースでは、このような研究を支えるための見識を広げられます。言葉による表現技法を別の“目線”で見れば、レトリック（修辞技法）とも言えます。さらに別の“目線”で見れば、私の研究は、ある翻訳家の翻訳手法についての分析とも言えます。また、他の“目線”では、物語における視点についての研究、物語論からの分析とも言えます。どれも日本の大学院ではあまり扱われていない分野です。しかし、このコースは、レトリック、翻訳研究、物語論の全てを扱っている数少ない大学院です。私の研究のような、言語コミュニケーションにまつわる学際的な研究ができるのは、ここだけでしょう。言葉の巧みな使い方とはいかなるものか、翻訳とは何か、物語の構造はどうなっているのか。このコースでは「言語コミュニケーションとは何か」が追求できる環境が用意されています。このコースで是非一緒に研究テーマを追求しましょう。

修了学生からのメッセージ

韋　恩琦さん

（2023 年度博士後期課程修了）
研究テーマ：JSL 学習者による場所を表す格助詞「に」、「で」、「を」の学習における訂正フィードバックの効果に関する研究
現在、追手門学院大学共通教育機構専任講師

私は中国の大学で日本語を専門として２年間勉強をしました。その後、大学三年生の時に日本の大学に留学したことをきっかけに来日しました。日本に来てからは、教科書で習った日本語と日本語母語話者が実際に使用している日本語との差に気づき、博士前期課程では三者会話場面における中国人日本語学習者と日本語母語話者の会話の仕組みについて研究しました。しかしその後、日本に長年滞在している人や、日本語能力試験 N1 級に合格した上級レベルの学習者でも、日本語の格助詞などの習得困難項目を母語話者と同様には使いこなせないという問題を新たに認識しました。そこで、博士後期課程ではどのようなフィードバックを学習者に与えれば、より効果的に第二言語を習得できるのかについて研究しました。

言語コミュニケーションコースでは、第二言語習得（SLA）、翻訳理論、対照言語学、認知言語学など多種多様な言語学に関する専門知識を、一流の先生方の下で学べる環境が整っています。また、学術的な知識だけでなく、自立的な思考力、さらに社会人としての心構えと「人間力」についても学習できます。言語学を探究したい人にとって、最高の場所であると私は思います。

私は在学中、専門分野の学習だけでなく、在日外国人児童への支援活動及び、トロント大学と神戸大学が企画した英語プログラムへの参加、さらには指導教員からもティーチングアシスタント（TA）やリサーチアシスタント（RA）といった貴重な機会をいただきました。これらのお仕事に従事することを通じて、自身の弱みや不足点を少しずつ改善しつつ、人間の基礎力、批判的な思考力と総合的な学習力も身につけられたように思います。

最後に、改めて研究科の先生方には感謝の気持ちを表したいと思います。国際文化学研究科はまるで自分のもう一つの「Family」のような存在です。皆さんもぜひ私たちの「Family」の一員になってください!

朱　藹琳さん

（2020 年度博士後期課程修了）
広東工業大学日本語学科卒業、神戸大学大学院国際文化学研究科博士前期課程・博士後期課程修了
研究テーマ：コミュニケーション摩擦場面から見た通訳者の倫理―中国の日系企業における社内通訳者を中心に―
現在、愛知大学現代中国学部嘱託助教

私は大学卒業後、中国の日系企業に翻訳・通訳者として入社し仕事をしてきました。そこで翻訳・通訳の現場における異文化間コミュニケーションの問題に直面し、その解決策を探る中でトランスレーション・スタディーズに出会いました。翻訳研究という学問は幅広くて包容力があり、言語学や異文化間コミュニケーション論は勿論、社会学や文化人類学など様々な分野の理論も取り入れ、様々な切り口から実際の翻訳・通訳行為を解明しようとしています。このような学問をさらに追究したいと思い、在学中、私は言語コミュニケーションコースをはじめ、他コースの授業を履修して分野をわたって知識を学び、博士論文では通訳者の倫理に重点を置いて研究しました。授業で先生方の話を聴きながら他の院生たちと議論を交わし、多様な視点を得ながら学ぶことができました。

また、博士論文に対しても指導演習や報告などを通して、指導教員をはじめ、コース内・研究科内の先生方からきめ細かなご指導をいただきました。留学生活や進路などプライベートの悩みに関する相談も親切に乗っていただき、大変お世話になりました。博士前期課程において日本語教師養成サブコースを履修したことで、教育学、第二言語習得論などの内容や、他コースの方々と意見をシェアしたり、模擬授業をしたりする経験は、現在の仕事にも大いに役立ちます。さらに、授業のみならず、院生研究室でも交流の機会がたくさんあり、各自の言語や文化などについて話し、「カルチャーショック」を受けることも大きな楽しみです。

このように、国際文化学研究科・言語コミュニケーションコースで過ごした楽しくて充実な５年間は私にとって大切な思い出です。皆さんもぜひここで、多様な文化や多様な観点とぶつかりながら、好きなことを研究して頑張ってください。

Q&A

言語コミュニケーションコースの授業の特徴としてどのようなことが挙げられますか？

本コースの教員は、留学生に対する日本語教育や日本人に対する外国語教育について豊富な経験をもっています。したがって、教育経験に基づく疑問点・問題点が絶えず授業の中心にあり、問題解決を念頭においた授業を行なっています。

本コースではどのようにして修士論文や博士論文のテーマが決められているのでしょうか？

本コースでは、入学してきた学生の問題意識や関心・興味を第一に考えています。したがって院生は、指導教員と相談しながら自らテーマを決めることになります。

指導教員にしか論文指導をしてもらえないのでしょうか？

例えば前期課程では１年次後期から２年次後期にかけて、計３回程度コースの教員・院生の前で修士論文・修了研究レポートの中間発表をする機会を設けています。つまり、修士論文・修了研究レポートの作成をコース全体でサポートする体制をとっています。

グローバル文化専攻・言語情報コミュニケーション系

感性コミュニケーションコース

人とひとの間のコミュニケーションにおいて要求されることの一つは、気持ちが通じあうことでしょう。しかし実際のコミュニケーション場面においては、たとえば「言葉は通じているのに気持ちが通じていない」と思える場合があります。この場合、「気持ちは通じていないか」「言葉（音声）は本当に通じているか」といったベーシックな問題について検討する必要があります。感性コミュニケーションコースは、コミュニケーションの過程を音声生成など身体的なプロセス、心理学・脳科学など認知的なプロセスの水準から探求します。またネイティブの発音に近い発音を可能にする方策、対人関係を改善する技法といったプラクティカルな問題についても学生の皆さんと一緒に研究を行っています。

進路実績

（前期課程） ユニクロ、アステラス製薬、イーオン、ATR Learning Technology、ANA（全日空）、（中国の国立）中国銀行、神戸市（上級行政職）、航空大学校、島津製作所（上海）

（後期課程） 理化学研究所、神戸大学国際文化学研究科、韓山師範学院、神奈川県科学捜査研究所、国立障害者リハビリテーションセンター研究所、日本学術振興会特別研究員（PD）、武漢大学、パナソニック、京都精華大学、情報通信研究機構（NICT）、東北大学、大阪大学

在籍学生数

（前期課程） 6名

（後期課程） 2名

論文テーマ例

（前期課程） 注意、ワーキングメモリ、情動、視覚認知、表情、音声コミュニケーション、外国語発音における母語干渉、Eラーニング、社会性、マルチモーダル分析

（後期課程） 数表象、プライミング、視覚的注意、外国語音声習得のメカニズム、音声の産出と知覚、ボライトネス

所属教員の紹介

林　良子　教授　言語行動科学論特殊講義ほか

音声科学・心理言語学。日本語や諸外国語における音声の特徴や、外国語を学ぶときの発音の困難点などについて実験的手法を用いて研究しています。言語障害や言語発達、各国における音声コミュニケーションの教育方法の比較についても興味があります。

松本　絵理子　教授　コミュニケーション認知論特殊講義ほか

認知心理学、認知神経科学。人間の知覚、行動、記憶、注意といった認知活動について、心理実験や脳活動計測などの手法を用いて研究しています。特に、注意について、不安やストレスなどの個人特性が及ぼす影響や、どうして表情や恐怖の対象には注意が素早く向けられるのか、等について関心があります。コミュニケーションの背景にある人間の行動や認識の傾向を認知心理学的というのぞき窓を通じて探ってみませんか。

北田　亮　教授　非言語コミュニケーション論特殊講義ほか

心理物理学・生理学など複数の方法を活用して、知覚から社会認知に至るまで様々な認知神経科学的な研究を行っています。特に複数の感覚機能に着目して、どのように先天的な要因と後天的な要因が絡み合うことで私たちの知覚や認知能力が形成されるのかに興味があります。これらの研究を通じて未来の研究の土台となる枠組みを提案することを目指し、様々な分野の研究者との連携により成果の社会実装への道を探ります。

巽　智子　准教授

第一言語習得、心理言語学。私たちはどのように言語を習得するのか、を中心のテーマとして研究をしています。また、言語変化、発達語用論、コミュニケーションと言語の関係など色々なテーマに関心があります。実験やコーパスデータの分析を通じて言語を探る、活発な研究の場を創りたいと考えています。

牧田　快　講師　コミュニケーション文法論特殊講義ほか

認知心理学、神経科学、発達・発達障害、言語学。主に脳構造・脳機能画像法を用いて、発達の違いによる脳構造の変容の度合いや、単語学習のような特定の課題遂行中の脳活動の測定などを通して、ヒトの発達、知覚、学習といった認知機能・行動について研究しています。なお研究では、いわゆる文系、理系という垣根を越えて、分野横断・融合的な観点から深化したいと考えています。

所属学生からのメッセージ

福川　さくらさん

（博士前期課程２年）
神戸大学国際人間科学部卒業
研究テーマ：「注意による選択への影響・不安特性による注意への影響」

私が大学院への進学を決めたきっかけは、学部時代にニューヨークへの交換留学が決定していたものの、コロナの影響で中止になってしまい、休学をするか悩んでいたところ、先生に大学院進学という選択肢を教えていただいたことがきっかけでした。国際文化学研究科は、博士前期課程の学生でも交換留学をすることができる協定校が多く、先生たちも留学を応援してくださっていて、他の大学にはない魅力であると思います。きっかけは、交換留学への再挑戦でしたが、学部時代から、私たちはものを見るとき、ものを選ぶとき、何か行動をするとき、何かを考えているとき、それらを意識的に行なっているのか、あるいは、無意識的に行なっているのか、どんなものに影響されているのかなどについて興味があり、卒業研究では、外因的な注意が顔を見たときの魅力度と信頼性を増加させるかについて心理学実験を用いた研究を行いました。国際文化学研究科に入学後は、特殊講義やゼミ、演習などを通して、新たな知識を学びながら、現在は、個人個人が持つ不安の度合いが、私たちがタスクを行うときにどのように影響するかについて、実験を用いながら明らかにしようと、関連する文献を読みながら研究計画を組み立てています。

本コースには、心理学だけではなく言語学を専門とされる先生も所属されているので、自分の研究に対して、心理学とは異なる視点からアドバイスをいただけることから、自分では気付くことができない改善点を見つけられ、自分の研究をより深めることができると思います。今後は、本学だけでなく留学先でも専門的な知識を学びながら、社会に貢献できる研究を進めていきたいと考えています。

王　可心さん

（博士前期課程３年）
中国人民大学外国語学部卒業
研究テーマ：「丁寧な発話様式と発話意図に関する音声的特徴」

私の出身大学と神戸大学とは協定校であり、毎年４名ほどの学生が交換留学制度を利用して神戸大学に留学しています。交換留学を経験した学生たちの話を聞いて、中国にいた頃から神戸大学の魅力を感じていました。大学三年生の時、日本語音声学に興味を持ち始め、留学することを決めました。当時大変お世話になっていた神戸大学で修士課程を修了した日本人の先生に推薦していただき、無事に神戸大学大学院国際文化学研究科に入学することができました。

私たち外国人が日本語を勉強する動機はさまざまですが、一般的にはアナウンサーのようにきれいな日本語を話すより、自然な会話をして気持ちを通わせてみたいという方が多いでしょう。その際に、失礼な話し方をして品のない人だと思われたくないですね。この社会的文脈に応じた「丁寧さ」に関しては、文法の問題だけではなく、音声にも大きく関わるものです。同じ言葉なのに違う音声で話すと全く違うように聞こえます。しかし、学習者にとって発話場面や対話者に応じた言葉を適切な音声で話すことは容易なことではありません。例えば、「ボールペン貸してください」というたった一言の依頼表現でも、それを丁寧に話すか、恐縮して話すか、または強い語気で話すかによって、対話者が受ける印象は大きく変わるでしょう。このような話し方や伝え方による意味の微妙な違いは、音声コミュニケーションの醍醐味だと思っています。

感性コミュニケーションコースには、言語学だけではなく心理学の先生もいらっしゃいますので、異なる視点から指導を受けられるのが１つの大きなポイントだと思います。私も実際に心理学の授業をとり、感情や表情などについて勉強しました。この領域について視野が広がる一方、自分の研究にも活かせる学びをすることができたと思います。今後は、さらに専門的な知識を学び、さまざまな学会や研究会に参加し、音声学研究の最前線において、どのような研究がなされているのかをもっと知り、吸収したいと考えています。

修了学生からのメッセージ

宿利　由希子さん

（2018 年度博士後期課程修了）
群馬大学社会情報学部卒業、東北大学文学研究科博士前期課程修了、神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程修了。研究テーマは「行為者のキャラに着目したポライトネス研究」。現在、東北大学准教授。

韓国、香港、ロシアなどで日本語教育に携わってきました。非母語話者である日本語学習者が、教室で学んだ日本語を完璧に話しても、日本語母語話者が「何その言い方!」「失礼な!」と不機嫌になる場面に何度も遭遇し、なんとかしなければと神戸大学国際文化学研究科受験を決意しました。博士論文では、発信者がどのような「キャラ（人物像）」かによって、受信者の評価が異なることを示すことができ、これまでの画一的な日本語教育の限界を指摘できたと思います。

博士課程は、非常勤で日本語を教えながらという二足の草鞋の３年間でした。心配はありましたが、先生方のご指導や（年下の）先輩方のご助言のおかげで、博士論文を書き上げることができました。感性コースでは、さまざまなご専門の先生方から多角的なご指摘をいただき、大変鍛えられました。

大学、特に博士課程は自分で学ぶところだと私は思っています。どんどん学会で発表し、ばんばん論文を投稿して、研究を進めていってください。

川島　朋也さん

（2018 年度博士後期課程修了）
神戸大学国際文化学部卒業、神戸大学大学院国際文化学研究科博士前期課程修了、神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程修了。研究テーマは「注意制御機構の認知神経科学的研究」。現在、金沢工業大学講師。

ヒトがどのようにものを見たり記憶したりしているのかに興味があり，この感性コースに進学しました。ヒトの注意や記憶などは目に見えないものですが，心理実験や脳機能計測によってそのこころの活動に迫ることができます。本コースにはそのための行動実験室や脳波計測室などの充実した設備があります。また，ヒトを対象とした研究では，専門的な知識だけでなく，その周辺領域を含めた幅広い知識が必要です。その中で本コースは，さまざまな領域の先生から指導を受ける環境にあり，一つの学問領域に閉じこもることなく広く諸領域から自身の研究を見直すことができます。

本コースにはさまざまな国や地域からの学生が集まります。多文化なバックグラウンドをもつ学生同士の交流は，自身の視野をいっそう広げてくれます。感性コースにご関心のある方は，研究室の訪問だけでなく，ぜひ院生室にもお越しください。

Q&A

感性コミュニケーションに入るには、心理学や脳科学と、言語学、コミュニケーション論などを全部勉強していないと、ダメなのでしょうか。

そんなことはありません。とりあえず、どれか、で結構です。

言語について研究したいと思っているのですが、このコースと言語コミュニケーションコースはどう違うのですか？

感性コミュニケーションでの言語研究は、自然に発話されたデータや、様々な機器を使って実験的に計測を行ったデータを主に扱います。またパラ言語と言われるいわゆる伝統的な言語学ではあまり扱われてこなかった分野（例えばため息、沈黙、声の音色など）や視覚情報（目線、表情、口の形、ジェスチャーなど）も含めて研究したいという方、実験して色々測ってみようという方には当コースをお勧めします。

脳の研究をやりたいのですが、どんなことが可能ですか？

感性コースでは、脳波計、光トポグラフィーを使って脳機能計測実験を行うことができます。もちろん、精密に計画して組んだ心理学実験によって、認知情報処理が脳内でどのように行われているかを検討することも可能です。チャレンジをお待ちしています！

グローバル文化専攻・言語情報コミュニケーション系

情報コミュニケーションコース

情報コミュニケーションコースは、コンピュータやインターネットに代表される、情報通信技術を用いたコミュニケーションについての教育・研究を行うコースです。当コースでは、インターネットにおける最新の情報発信技術、コンピュータを用いたコミュニケーション情報の収集・分析・整理方法といった、すぐに活用できる高度な情報処理技能の習得や、将来におけるより効果的なコミュニケーションの実現を目的とした情報通信技術の研究・開発を行なっています。

就職実績

（前期課程） 株式会社DeNA、日本IBM、チームラボ株式会社、日本電気株式会社、西日本電信電話株式会社、滋賀県立成人病センター職員、コベルコシステム株式会社、スミセイ情報システム株式会社、富士通FIP、東京農工大学職員、神戸情報大学院大学准教授、富士通ビー･エス･シー、神戸情報大学院大学職員、グッドスカイ(株)、中国電信北京支社、中国広発銀行、野村総研、アクセンチュア、ヤマハ発動機株式会社、セゾン情報システムズ

（後期課程） 大阪大学大学院基礎工学研究科特任助教、立命館大学情報理工学部講師、神戸情報大学院大学助手、神戸女子大学助教、大阪産業大学講師、北九州市立大学准教授、大妻女子大学短期大学部准教授、中国国家核電エンジニア、台湾実践大学講師、厦門理工学院講師、関西学院大学理工学部研究員、鹿児島純心女子大学人間教育学部准教授、株式会社NTTデータ技術開発本部研究開発職、大手前大学現代社会学部講師

在籍学生数

（前期課程） 7名
（後期課程） 6名

論文テーマ例

情報科目学習形態分析、文書の自動分類、XML検索法、IT技術者向け学習システム、外国語学習システムにおける誤りレベル判定機能、記憶の仕組みを活用した学習システム、質問支援システム、コミュニケーション指向の都市評価、逆引オノマトペ辞典、ユーザインタフェース、コミュニケーション支援、ニューラルネットワークによるコンピュータ「錯視体験」

所属教員の紹介

康　敏　教授　コンピューター・シミュレーション論特殊講義ほか

情報通信技術の情報教育及び外国語教育への応用に関してコミュニケーションの視点から研究・開発を行っています。特に統計的アプローチを用いてユーザのニーズにあった情報を提供することとユーザの特徴を抽出することに焦点を当てています。

清光　英成　教授　情報ベース論特殊講義ほか

データベースシステムや Web 情報システムを用いてデータを高次利用することを目的としています。アクセス履歴などの利用者プロファイルや場所・時間などの状況を参考に「いつもの」という入力に利用者個別の答えを出力することをテーマにしています。

西田　健志　准教授　計算科学応用論特殊講義ほか

情報システムの操作性を向上するユーザインタフェースの研究、人どうしのやり取りを円滑にするコミュニケーションシステムの研究をしています。特に、意見がまとまらない、批判的な意見が言い出せない、外国語が流暢でないなど、コミュニケーションがうまくいかない状況を情報と心理の両面から見つめ直すこと、開発したシステムを実際に運用して知見を得ることを重視しています。

村尾　元　教授　認知情報システム論特殊講義ほか

生物に倣った「柔らかい情報処理」の技術を用いて、人間をはじめとする生物の集団に現れる知的な振る舞いの分析と応用について研究をしています。対象となるのは、人間などの個体が構成する小さな集団から、社会、経済、インターネットまで様々です。
キーワード：社会システム科学、機械学習、データサイエンス

大山　牧子　准教授　教育システム情報論特殊講義ほか

教育工学の枠組みで、大学の授業を効果的で効率的にするための手法やシステムを開発する研究を行っています。中でも学びを深める思考形態であるリフレクションに関心を持っており、リフレクションが学習効果にもたらす影響の分析やリフレクションを促すツールの開発に取り組んでいます。

所属学生からのメッセージ

蘇　杭さん

（博士前期課程２年）
神戸大学国際人間科学部卒業
研究テーマ　The more you finish, the more you see: motivating yourself by placing to-do blind panels on your favorite internet contents while working with others

学部時代にプログラミングや情報リテラシーの授業を受け、自分でプログラムを一から作り、最終的に動くものになるのを体験して、プログラミングに興味を持つようになりました。

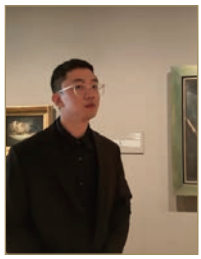
学部の卒業研究では、部分的な成果に部分的な報酬を与えるタスク管理手法を提案し、それに基づいてタスク管理システムを開発しました。大学四年生の時に、研究をさらに深めたいと考え、情報コミュニケーションコースへの入学を希望しました。

本コースでは、様々な分野に触れることができ、複眼的なアプローチで学際的な研究を行うことが可能になります。私は現在、複数のユーザが同時にタスク管理ツールを使用し、共同の目標を目指しながら作業し進捗を共有することで、タスクの達成度の向上とコミュニケーション促進効果について研究をしております。情報コミュニケーションコースで、プログラミングとコミュニケーションに関する授業を受け、コミュニケーションをより円滑に進めるシステムの開発について学習をしております。

情報コミュニケーションコースでは、多様なバックグラウンドを持つ学生たちとの交流ができ、研究で何かに困っている時は先生や先輩から熱心なサポートを受けることができます。情報分野に興味がある方、このような充実した環境で一緒に研究することを期待しています。

王　笑難さん

（博士後期課程２年）
厦門理工学院デザインアート学部卒業
神戸情報大学院大学情報技術研究科修士課程修了
研究テーマ：「能動的学習データを用いた学習過程の把握と活用」



情報コミュニケーションコースに入学した当初、新型コロナウイルス感染症は大学の教育に大きな影響を与え、多くの教育機関で遠隔･オンライン教育が実施されました。同時に、インターネット上の閲覧や解答等の活動履歴に加え、講義中の映像や発話情報などの多様な教育･学習データも蓄積されるようになりました。その時、私は教育技術に強い関心があり、これらの多様な教育･学習データを、学習者のために活用しようとする機運が高まっていると考え、情報コミュニケーションコースに入学を希望しました。

現在の研究は、遠隔教育で教員と学生とのコミュニケーション問題に焦点を当り、学習者の能動的学習情報に基づき、学習過程の把握と学習者特性の分析を研究しています。研究に関して、先生たちは学生の考えを尊重し、いろいろな挑戦を許容し、熱心な指導をいただけます。また、先生と学生の距離が近く、いつも気軽にコミュニケーションできます。研究室では、多様な背景を持つ学生が互いにコミュニケーションする機会を提供し、自由で気楽な研究環境があります。

情報コミュニケーションコースでの学びは、単にIT技術ことではなく、情報技術を用いて社会的、教育的な課題を解決する力と、自分の考えの整理、証拠に基づいた議論の展開、複雑な情報を聴衆に効果的に伝える研究スキルも学んでいます。日々研究室の仲間や教授との意見交換は、私の研究をより深く、より広い視野で進める助けとなっています。

修了学生からのメッセージ

藤田　直樹さん

（2023 年度博士前期課程修了）
神戸大学工学部卒業
研究テーマ：「生体情報の類似性強調による一体感創出手法」
現在、明治安田生命保険相互会社勤務

私は学部時代は工学部に所属し、情報技術を用いたコミュニケーション支援をテーマにした卒業研究に取り組みました。大学院でも同じテーマに取り組み、研究をより深めたいという考えから、本研究科の情報コミュニケーションコースに進学しました。

本コースでは、もともと興味があるテーマに取り組むことも、新たなアイデアを考えて研究を進めることもできます。どちらの場合でも先生は相談に乗ってくださり、情報や知識、必要な物品を提供して研究をサポートしてくれます。すでにやりたいことが明確な学生はもちろん、まだ興味の方向性がぼんやりしているような学生も、本コースであれば不安なく研究を行うことができると思います。定期的な進捗の確認に加えて、学会などの中間的な目標も設定することができるので、研究のモチベーションも維持できるでしょう。自分で管理するとついだれてしまうという学生も、しっかり研究に取り組める環境です。

また、情報通信と言えばプログラミングが付き物と考えて、プログラミング経験が少ないことに不安を感じる人もいると思います。私もプログラミングで何度も詰まることがありましたが、その度に先生に相談することでスムーズに解決できました。今までの経験に関係なく、情報や通信を活用する研究をしたいという人は、思い切って挑戦してください。

前川　絵吏さん

（2023 年度博士後期課程修了）
研究テーマ：「テキスト平易化のためのコーパス自動生成と評価に関する研究」
現在、大手前大学現代社会学部講師

私は社会人のときに大学院への進学を希望し、前期課程では仕事との両立を図りながら研究を進めていました。前期課程では一定の単位を取得するために授業を履修しなければなりませんでした。そのため、午前中は別の学校で教員として授業を行い、午後は大学院で学生として授業を受けるというような忙しい日々を送っていました。後期課程に進学すると、JSTのSPRINGプロジェクト生[*1]として支援を受けながら研究に専念することができました。自然言語処理に興味を持って研究をスタートしましたが、この分野の研究は技術の進歩が目覚ましく、新しい論文を読むだけでも大変です。同じゼミに所属する学生と勉強会を開催したり研究について相談したりすることで、研究への意欲が高まりました。

本コースの特徴は文系の研究科でありながら、プログラミングやデータサイエンスに関わる研究に挑戦できることです。私の場合はプログラミングの経験はありましたが、機械学習やAIのプログラムを作ったのは大学院に入学してからです。先生方の専門は多岐に渡っており、異なる専門分野からの視点やアプローチを学びながらアドバイスを受けることで研究をより充実させることができました。コースの先生はよく院生研究室に立ち寄ってくださり、世間話をしたり、研究に関するアドバイスしてくださったりします。またここでは学生同士の知識や情報を共有する場となっています。情報コースにご興味をお持ちの方には、先生方の研究室だけでなく院生研究室にも足を運んでいただくことをお勧めします。

(*1) 国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）次世代研究者挑戦的研究プログラム神戸大学「異分野共創による次世代卓越博士人材育成プロジェクト」

Q&A

大学では情報や通信の専門的な勉強はしてきていないのですが、大丈夫でしょうか？

当コースを選ぶにあたっては、必ずしも、理工系の情報通信を専門とする必要はありません。高度な情報通信技術を学び、それらを自分の専門分野に生かそうという意欲をもった院生を歓迎します。

数学が苦手なのですが、ついていけるでしょうか？

当コースでは、最先端技術をより高めていくような技術革新といった研究ではなく、既存の技術がどのように使われるのか、また、より良い使い方はないのかといった応用面での研究を行なっています。仕組みを理解しその仕組みを工夫する事でどのような新しい活用ができるかを模索するには、より広い意味での理解力は求められますが、高度な数学を駆使することはほとんどありません。

グローバル文化専攻・外国語教育系

外国語教育システム論コース

外国語教育システム論では、英語を中心とする外国語教育の基礎を担う言語学、心理学、言語表象作品分析など様々な領域の学際的知見を援用して研究を行い、それらを有機的・総合的に連関させることで、外国語教育のシステムの研究・実践にあたることができる人材の養成を行う。

本教育研究分野では、特に、

1. 言語学、心理学など関連諸分野の知見に基づく学際的な言語教育研究
2. 幅広い言語文化・表象作品の言語教授法への応用と方法論研究
3. IT 教育など言語教育環境整備に関わる実践的研究
4. 言語習得、言語使用を取り巻く社会的・文化的要因に関わる研究
5. 心理言語学的研究により得られた知見の教育現場への応用
6. 教育現場における指導実習等の活動支援

を重視して研究指導を行っている。

進路実績	（前期課程）	香川県立高等学校、千葉県私立高等学校、大阪府立高等学校、神奈川県立高等学校、兵庫県立高等学校、他
	（後期課程）	兵庫教育大学、神戸学院大学、近畿大学、自然科学研究機構、神戸市工業高等専門学校、立命館大学、桃山学院大学、びわこ成蹊スポーツ大学、他
在籍学生数	（前期課程）	5名
	（後期課程）	6名

論文テーマ例

（前期課程）
- Argumentative essays written by high school students: The relationship between holistic scores, linguistic complexity, and meaning complexity
- How reading aloud and shadowing affect the acquisition of L2 grammar knowledge by Japanese EFL learners
- The effects of story retelling on vocabulary acquisition by Japanese EFL learners
- 外国語としての英語教育環境における多読授業デザインに関するシステマティックレビュー
- 韓国語を母語とする日本語学習の韻律的特徴とその習得 ―釜山方言話者の日本語学習者を中心に―
- 国際交流プログラムにおける日本人高校生の発話の変容に関する研究

（後期課程）
- Coaching discourse and linguistic resources for player-centered training: A case study of three professional football coaches
- L1 and L2 lexical network of Chinese EFL learners: Focusing on the effects of semantic category relationship and L2 vocabulary knowledge
- Processing mechanisms in the comprehension of ambiguous sentences by Japanese learners of English: Does implicit learning occur through repeated exposure?

所属教員の紹介

島津　厚久　教授　言語文化表象論特殊講義ほか
アメリカ現代文学。中でもユダヤ系アメリカ文学で、特に小説家バーナード・マラマッドの長・短編小説を「表現」の観点から読み解こうと試みています。

高橋　康徳　准教授　言語対照基礎論特殊講義ほか
中国語学、音声学、音韻論。中国語諸方言の声調に関する現象を音声学・音韻論の観点から研究しています。

濱田　真由　助教　言語教育環境論特殊講義ほか
心理言語学、外国語教育。第二言語・外国語での言語処理時のプロセスについて検証し、得られた知見を外国語教育にどのように応用することができるのかについて検討しています。

廣田　大地　准教授　言語文化環境論特殊講義Ⅰほか
フランス文学。ボードレールを中心とした近代フランス詩を研究対象とし、その詩学を言語学的観点から記述することを目標としています。他にも WEB やコンピュータを用いた文学研究・語学教育に関心があります。

保田　幸子　教授　言語科学論特殊講義ほか
第二言語習得論、第二言語ライティング、ジャンル分析、カリキュラム開発。「第二言語で書く」という行為をめぐり、書き手の方略やジャンル意識、言語的・文体的特徴に焦点を当てた研究を行っています。これらが長期的にどのように変化するか、なぜ変化するかという発達プロセスを明らかにすることが研究テーマです。

安田　麗　講師　言語文化環境論特殊講義Ⅱほか
音声学、ドイツ語教育。外国語の音声習得、発音指導に関して、音声学的観点よりドイツ語、日本語を含む様々な言語を対照しながら研究しています。

横川　博一　教授　言語教育科学論特殊講義ほか
英語教育学・心理言語学。第一言語および第二言語のリーディング、リスニング、ライティング、スピーキングおよび語彙の認知処理メカニズムとその授業実践への応用可能性を探ることが主な研究テーマです。

所属学生からのメッセージ

高砂　千聡さん

（博士前期課程２年）
大阪女子大学（現大阪公立大学）学芸学部卒業
研究テーマ：「CLIL 授業の TASK における内容と言語の統合に関する考察」

大学卒業後は、英語教員として大阪の公立高校や私立中高等学校に勤めておりました。そして教育現場で様々な英語指導法を経験する中で、CLIL（Content and Language Integrated Learning）という教授法に出会い、大変興味をもちました。それ以来、研究会等で勉強しながら勤務校でもCLILの実践を重ねておりましたが、やりがいを感じる一方で実践を通して見えてくる課題があり、面白いと思うことを追求したいとの思いから、大学院で学ぶことにしました。本コースの授業では、外国語教育についてあらためて、様々な理論に基づいて考えることができ、また得られた知見を現場でどう応用するかを考える実践的な学びができます。そして定期的に行われる集団指導では、自身の研究の進捗を発表し、指導教諭の先生をはじめコースの先生方から助言をいただくことができますし、常に相談に乗っていただける環境があり、とても有難く、忙しくも充実した学びの日々を過ごしています。

また、私は日本語のサブコースも履修していますが、コースを超えた科目の授業は視野を広げ新たな視点を与えてくれますし、研究科全体が留学生や様々なバックグラウンドを持つ院生と共に学べる場になっていることもよい刺激になっています。このような環境に身を置き研究に取り組めることをとてもうれしく思っています

清水　保宏さん

（博士後期課程２年）
神戸大学国際文化学研究科博士前期課程修了
研究テーマ：How reading aloud and shadowing affect Japanese EFL learners' grammatical knowledge and processing

私は高校の英語教員をしており、特に英語の文法習得に関心を持っています。文法はコミュニケーションの土台にあるべきものと考えていますが、従来から教えられている明示的な文法知識というより、それをダイナミックに活かし、自在に文法を操る統語処理の習得が重要だと考えています。そのような習得のために音読・シャドーイングが有効であるという自身の体験や信念に基づき、それを科学的に実証したいと考え、3年前に外国語教育システム論コースの扉を叩きました。入学以来、実験に実験を重ね、研究活動に邁進しています。

システム論コースでは、他のコースもそうかもしれませんが、前期課程においても後期課程においても指導教員の先生による丁寧で熱心な指導を継続的に受けつつ、自分が研究したいと志したテーマについて研究することができます。年3回の集団指導の折には、コース内の他の先生方からも多様な観点でのアドバイスをいただき、自分の研究をよりよい方向へ修正していきます。開講される講義や演習を通じても、先生方からインスピレーションを得たりや温かい激励を受けたりし、また、授業内外における院生同士のディスカッションにより互いに学び合ったり切磋琢磨したりすることが日常のこととなっています。

カリキュラムにおいて最重要なのは研究であり論文作成であるため、在籍中の学生はみんな全力で研究活動に取り組んでいます。そして、1人1人が質の高い研究を行っていると感じます。そういった雰囲気と環境がまた、日々研究を進めていく上での原動力の1つになります。システム論コースは、言語教育に関わる研究をするには非常に恵まれた環境だと思います。

修了学生からのメッセージ

山田　美咲さん

（2013 年度博士課程前期課程修了）
研究テーマ：「日本語会話における中国人学習者のスピーチスタイルに関する一考察」
現在、 神戸野田高等学校国語科教諭

大学学部時代に中国へ1年間留学し、日本語を勉強する多くの中国人学生と出会いました。お互いに母語を教えあう中で、日本語を上手く伝えることのできないもどかしさを感じ、大学院進学を決意しました。神戸大学国際文化学研究科では、言語学や教育学に関する基礎的な知識を学ぶことができるとともに、教育現場に直結する実践的な内容に取り組む授業も受講できることが魅力的です。私は、各国から神戸を訪れた留学生とグループで調べ学習をしたり、留学生の日本語の授業に入ってサポーターをしたりしました。その結果、基礎から実践まで幅広い内容を身につけることができました。

自身の研究では、誤用が多く、習得が困難とされている敬語に着目し、進めていきました。状況や相手によって使い分けが必要なスピーチスタイルを、中国人母語話者は実際にどのように用いているのか、調査をしていきました。参考となる論文を踏まえ、調査計画を立て、実行に移していく中で、指導教員の先生をはじめ、コース、および研究科の先生から多くのアドバイスをいただきました。その都度、改善していきながら研究に専念することができたのは、熱心な先生のサポートのお陰です。この二年間で、一つのことに深く向き合い、新しい視点で物事を考えることができるようになりました。この成果は私にとって大きな自信となり、今の生活にも繋がっています。この素晴らしい環境で、ぜひ、皆さんにも充実した学生生活を送ってほしいと思います。

九鬼　雅史さん

（2023 年度博士前期課程修了）
研究テーマ：「高校生英語学習者によるアーギュメンタティブエッセイ―全体的評価と言語的・意味的複雑性の関係―」
現在、 香川県立高等学校英語科教諭

私は大学4年次の教育実習の経験から外国語教育システム論コースでの研究に興味を持つようになりました。授業を通して理想と現実のギャップに直面することが何度かあり、中でもライティング指導について悩む時間が多くありました。実習を終えても「これからのライティング指導はどうあるべきなのか」という問いが心に残り続けました。そこで自分なりにライティング教育や英語でのライティング活動について調べてみると、第二言語ライティングという研究分野があることを知りました。大学院ではこの分野をご専門とされる先生の下で専門知識を深めたいと考え、本コースへの進学を決意しました。

本コースでは心理言語学や第二言語習得理論など、外国語教育に関する学問分野を幅広く学ぶことが可能です。例え学部時代に学んでいない研究分野であっても、先生方に手厚くサポートしていただける環境が整っています。また、本コースには集団指導という研究の進捗を発表する機会が定期的に設けられており、自分の研究の課題や今後の構想について深く考えることができます。先生方だけでなく、同じコースの院生からも貴重なアドバイスをいただき、研究に関する新たな発見や様々な示唆を得ることができます。

私自身、他大学からの進学で最初は不安を感じていましたが、指導教員の先生を始め、外国語教育領域に所属されている先生方からのきめ細やかな指導を受け、充実した院生生活を送ることができました。他大学から本コースへの進学に不安を感じている方もいらっしゃるかもしれませんが、安心して進学されることをお勧めします。

Q&A

外国語教育システム論コースとは、どのようなことを研究するコースでしょうか？

外国語教育システム論とは、外国語教育の基盤となる基礎研究の知見について理解を深め、学際的な立場から新しい時代の外国語教育のあり方を探求しようとするコースです。

外国語教育システム論コースでは、どのようなことが学べるのでしょうか？

このコースでは、外国語教育のシステムを支える、言語学・心理言語学、外国文学、文化学について広く学びながら、外国語教育の研究を行ったり、実践力を身につけることができます。また、英語のみならず、ドイツ語、フランス語、中国語、日本語などの言語を専攻する院生にも対応しています。

中学校・高等学校の英語教員志望ではないのですが、このコースには不向きでしょうか？

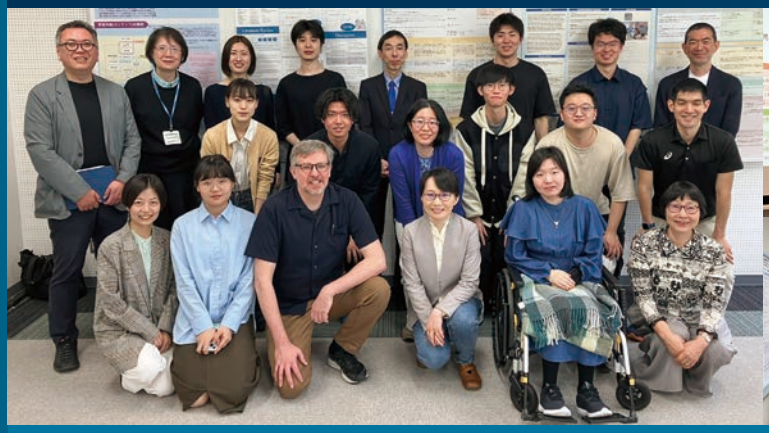
このコースは、英語の教員養成のみを目的としたものではありません。たとえば、外国語教育への応用を考えながら、心理言語学や音声学の研究を行ったり、外国語習得を意識しながら、アメリカ文学、フランス文学を専門とするなど、幅広くかつ深く学ぶことができます。

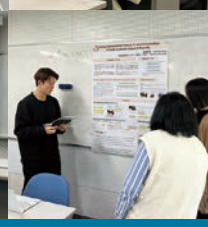
入学後は、コースが開講する授業しか履修できないのでしょうか？

外国語教育システム論コースに所属していても、他コースの授業を履修することが可能です。外国語教育システム論コースに開設されている授業科目を中心に、たとえば、外国語教育コンテンツ論コースが開講する授業科目を履修することができます。

グローバル文化専攻・外国語教育系

外国語教育コンテンツ論コース





外国語教育コンテンツ論コースでは、新時代の外国語教育の創造に主体的に参画できる人材育成を目指し、外国語教育の内容・方法・展開に関わる研究を総合的に行っています。本コースでは、言語学（コーパス言語学・認知言語学・語用論・史的言語学）と教育学（授業論・指導法・教育工学）の学問的基盤をふまえつつ、特に、教育現場での実践的展開を見据えた研究に精力的に取り組んでいます。本コースにおいて、外国語教育を取り巻く諸問題に多面的にアプローチする能力を付けた修了生は、国内外の教育機関等で活躍しています。本コースでは、学部時代の専門にかかわらず、外国語教育を通して社会のグローバル化に貢献しようとする意気込みにあふれた学生の受験を歓迎します。

当コースでは、日々の研究指導の様子や、所属する院生・教員の活動状況をコースブログで発信しています。ぜひ一度、ご覧ください。

進路実績

（前期課程） 小学校教諭、中学校教諭（尼崎市・神戸市）、高校教諭（兵庫県・滋賀県・岡山県・鳥取県・沖縄県）、東京大学附属中等教育学校教諭、神戸大学附属中等教育学校教諭（2）、神戸女学院中高等部教諭、西大和学園中高講師、金沢大学非常勤講師、Sony Global Manufacturing Operations、（株）矢崎産業、（株）SONY Computer Entertainment, Taiwan、三菱電機、（株）白鳩（インターネット通販）、（株）日立ソリューション、富士通、他。

（後期課程） 外国人特別研究員（神戸大学）、近畿大学准教授、環太平洋大学教授、大阪大学准教授、広島国際大学専任講師、福井大学助教、筑波大学助教、神戸大学特任助教、大阪工業大学特任講師、関西外国語大学（非）、関西大学（非）、流通科学大学（非）、中南財経政法大学講師、山東科技大学講師、西安理工大学講師、中国東北大学講師、四川外国語大学講師、華南農業大学講師、他

在籍学生数

（前期課程） 6名
（後期課程） 7名

研究科の中でも学生数の多いコースの1つです。助け合い、競い合って学べる環境が用意されています。

論文テーマ例

（前期課程） 「小学生のための基本名詞コロケーションリスト」「日本語書き言葉における「形容詞＋条件節」の使用」「日本人英語学習者のライティングにおける英語習熟度とパラグラフライティングに対する知識・理解及びアウトラインの関連性について」「英語確信度副詞のコーパス研究」「日本語発話におけるオノマトペ調査」

（後期課程） “Some Interactional Practices Teachers Use to Pursue a Response from Students in EFL Classrooms”「作文に見る学習者のヘッジ使用」「学習段階の変化が日本語学習者の外来語使用に及ぼす影響：『日本語学習者書き言葉コーパス』を用いた縦断調査」

石川　慎一郎　教授　外国語教育内容論特殊講義 II ほか

応用言語学の観点から、コーパス（大規模テキストデータベース）を使った英語・日本語の言語分析・教材分析・教材開発・語彙習得などを主として研究しています。あわせて、語彙処理の心理的機制や、小中高大での言語教育のカリキュラム設計、教授法・インストラクショナルデザインにも関心を持っています。科学的な視点から言語や教育の問題を考えてみたい学生を歓迎します。

柏木　治美　教授　外国語教育工学論特殊講義ほか

情報通信技術の学習環境への応用に関する研究を行っています。最近は、音声認識や生成AIを取り入れ、外国語や日本語で緊張せずに自身の意見や考えを話せるようになることを支援するためのコミュニケーション活動環境について検討しています。新しい技術を取り入れた学習環境の開発研究に興味を持つ学生を歓迎します。

木原　恵美子　准教授　外国語教授学習論特殊講義ほか

英語話者は構文をどのように選択しているのか、その背後にはどのような仕組みがあるのかを研究しています。英語母語話者だけではなく、英語学習者の話し言葉や書き言葉も分析しながら、英語の文法学習や教授法の研究を行っています。英文法の分析や記述に興味がある学生を歓迎します。

Tim Greer　教授　第二言語運用論特殊講義ほか

言語表現とそれを用いる人との関係に関心を持っています。会話分析を始めとし、質的調査方法を使用し、第二言語語用論（L2 Pragmatics）を専門にしています。二ヶ国語で行う会話、オーラル英語能力試験での会話、日常会話など様々な場面で「言葉を使った社会的行為」を研究しています。また、言語教育、アイデンティティ構成、バイリンガリズム、などの研究も行っています。

佐藤　健　教授　外国語教育内容論特殊講義 I ほか

外国語習得における認知的プロセスについて研究しています。特に、多義的語彙・表現の理解と学習に焦点を当て、教材や教授法（特にICT学習環境）への応用を目指しています。研究アプローチは、認知言語学の枠組みを基本に据えつつ、近年では社会文化的な視点を取り入れた研究も展開しています。

芹澤　円　助教　言語対象応用論特殊講義 I ほか

歴史語用論の観点から、近世ドイツの印刷メディアにおける口語性・文語性、構文や語彙の分析をしています。また最近では、テクストと図像の関係性（ビジュアル・リテラシー）の分野にも関心を持っています。

陳　暁　講師　言語対照応用論特殊講義 II ほか

中国の近世、特に清代中後期（18世紀）から民国（20世紀中葉）までの北京語について、様々な言語資料を用いて北京語の特徴に関する研究を行っています。例えば満漢合璧文献、諸外国の中国語教科書（明治時代の中国語教科書および西洋人が編んだ中国語教科書など）等における北京語の語彙、文法、音声及び歴史的変化についての研究を行っています。

所属学生からのメッセージ

尾﨑　祐真さん

（博士過程後期課程２年）
神戸大学国際人間科学部卒業
研究テーマ：「3DCGと音声認識を用いた外国語学習環境の構築」

私は大学4年間、神戸大学に通いながら、塾講師として集団指導のアルバイトをしてきました。集団指導の現場では、一人の教師が複数の生徒を相手にするため、スピーキングの指導が特に難しい課題となっています。そこで、コンピューターを活用した語学学習支援に興味を持ちました。コンピューターを用いたスピーキング指導にはどのようなシステムが最適かを検討し、先行研究を参考にしながら、自身でプログラムを試作して実行し、その結果を検証しています。

本コースでは、定期的に集団指導が行われます。その際には、ポスター発表や口頭発表を通じて自身の進捗状況を報告し、所属する教員や他の学生からフィードバックを受け取ることができます。コースにはコーパス言語学、教育工学、会話分析、認知言語学、歴史語用論など、多岐にわたる専門分野の教員が在籍しており、頂いたアドバイスは新たな視点を得るのに役立てることができます。

私は学部時代にプログラミングの経験がありませんでしたが、独学で学びながら、授業やゼミで分からないことがあれば積極的に質問し、成長してきました。文系出身者や理系出身者に関わらず、このコースに所属してから学ぶことができます。また、研究で何か困っている場合でも、教員や先輩から適切なサポートを受けることができ、また同期の仲間たちと協力できる良い環境が整っています。外国語教育に関心を持つ皆さんと共に研究ができることを楽しみにしています。

陳　迪さん

（博士後期課程３年）
中国上海外国語大学国際文化交流研究科修士課程修了
研究テーマ：「日本語コーパスを用いた漢語動名詞の用法解明と日本語教育への応用」

私は学部時代から中国語学と国語教育について学び、修士課程に進学し、日本語を母語とする中国語学習者向けの中国語教育を研究･実践する中で、言語データを集めた「コーパス」というものを知りました。コーパスを用いて人間の言語運用の実態を調査し、計量的手法を踏まえて考察することで、言語の特性や学習者の言語習得の特徴をより客観的に明らかにすることができます。私は現在、コーパス言語学の手法に基づき、日本語母語話者や学習者における漢語動名詞の頻度や用法を調査し、日本語教育への応用を目指しています。

博士後期課程に進学する前に、自分が日本語を専攻していないことに不安を感じていましたが、毎週のゼミで、指導教員の先生からの丁寧なフィードバックを頂けるだけでなく、優れた研究者になるためのスキルをトレーニングすることができます。さらに、本コースの一つの特徴である集団指導があり、コーパス言語学･教育工学･音声学･会話分析･歴史語用論など、様々な専門分野のコースの先生方や、他の学生たちの前で、研究の進捗状況を定期的に発表します。これにより、指導教員以外の先生方からも自身の研究に関する様々なコメントやアドバイスを頂けるので、新たな方向性を発見することができます。このような良い環境で、大変充実した研究生活を送っています。

修了学生からのメッセージ

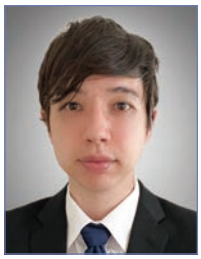
齋藤　景子さん

（2021 年度博士前期課程修了）
研究テーマ：「日本人英語学習者の論証文における熟達要因に関する質的調査」
現在、東京大学教育学部附属中等教育学校英語科教諭

私は中高一貫校で英語の教員をしています。授業中、複数の生徒が同じ箇所で同じようなエラーを起こしていたり、習熟度によってつまずきに傾向の違いがあると感じたりします。また、授業がうまく生徒の英語習得につながったと思うときもあれば、失敗したと思うこともあります。

そのようなときに必ず思い出すのが、大学院での学びです。本コースでは、外国語教育分野を満遍なく学ぶことができます。研究に対して具体的なイメージを持っていなかった私も、講義や演習を通じてこの分野の地図を思い浮かべられるようになりました。また、年5回の集団指導によってコースの先生方から頻繁にご助言をいただき、自身の研究テーマである日本人英語学習者の論証文における熟達要因について、多くの先生方に支えていただきながら論文を完成させ、教員としての学術的なアイデンティティを確立することができました。

2年間の学びにより、生徒の困難感の解消や授業改善を試みる際に、外国語教育分野の地図を頭のなかで開き、どこに根を張っているのかを考えることができています。また、自身の専門分野となった作文をはじめ、根拠のある自信に基づいて指導することができています。これは生徒との信頼関係にも影響していると感じます。大学院に行かなくても教員になることはできますが、教員としての生き方をさらに充実させたい方には本コースをお勧めしたいです。



Zachary Nanbu さん

（2022 年度博士後期課程修了）
神戸大学国際文化学研究科博士課程前期課程修了
研究テーマ：Second Language Pedagogy and Use in an English Village: Interactional Practices and Sequential Structure
現在、同志社大学特任助教

During my time as an undergraduate at the University of Hawaii at Hilo, I began working as an ESL tutor and discovered that I enjoyed teaching and learning about language. After graduating with a bachelor's degree in linguistics, I moved to Japan to further my education and learn more about second language pedagogy. Following a series of serendipitous events, I found myself in Kobe University's master's program under the guidance of Tim Greer where I began using Conversation Analysis (CA) to examine the interactional practices of language learners.

After completing the master's program, I opted to continue furthering my research by entering Kobe University's Ph.D. course where I used CA to examine naturally occurring interaction among language learners and teachers at an English village.

Kobe University's master's and Ph.D. courses provided me with an excellent environment for developing as a language scholar. The Shudan Shidou (group guidance) process was invaluable to my research, providing exposure to concepts and ideas from a wide variety of theoretical perspectives. Regularly presenting my own work helped me to hone my presentation skills, and the expert feedback I received from the professors and my peers was immensely useful for refining my study. Although completing a dissertation may seem daunting, the clear structure and milestones that this course provides made it easy to stay on track.

Q&A

英語以外の外国語教育を学ぶことはできますか？

本コースでは、英語・日本語・中国語・ドイツ語の研究指導も行っており、所属学生もこれらの言語を専攻し、分析しています。多言語の視点から外国語教育を考えられるのも本コースの特徴の１つです。

英語教員免許を取得できますか？

学部時代に一種免許状を取得している場合は、博士前期課程で指定された科目の単位を取得することによって専修免許状を取得することができます。また、一種免許状を取得していない場合は、大学院に在籍しながら学部科目を並行履修して、教員免許（一種免許状）取得に必要な不足単位を補うことが可能です。

学部時代の専門が語学や教育学ではないのですが、本コースで研究していけるでしょうか？

これまでに在籍していた院生の学部時代の専門は、言語学･言語教育学のみならず、文学･法学･経済学･理工学などさまざまです。語学力と語学教育への熱意があれば、大学院において新たに外国語教育の研究を始めることも十分に可能です。本コースでは、導入的な講義を体系的に開講しているので、２年間で修士レベルの知識や分析スキルを身につけ、さらに、博士課程で研究を深めることができます。

留学経験者は多いのでしょうか？

在籍中に、米国、ドイツ、豪州などで留学を経験した学生も多くいます。また、韓国で実地調査を行った学生もいました。院生が留学しても、指導教員はメールなどで頻繁に連絡をとり、きめ細やかな指導とサポートを提供しています。過去の在籍者には留学生も多く（中国、米国、モーリタニア等）、国際色豊かなコースです。

修了後の進路状況はどうですか？

教育職への就職が非常に多くなっています。前期課程修了者は、全国の公私立の高校・中学校の英語教諭として活躍しており、後期課程修了者は国公私立大学や海外の大学の教員に就職しています。この他にも、民間企業の海外部門で活躍する修了生もいます。また、小中高や大学で教員として勤務しながら本コースで研究活動に取り組んでいる学生もいます。

連携講座（博士後期課程に設置）

先端コミュニケーション論コース

ますます増大する文化摩擦問題や、近い将来われわれが直面することになるであろうロボットとの共存問題は、コミュニケーションの問題に他なりません。人間のコミュニケーションとはどういうもので、そこにどういう文化差があるのか。言語・パラ言語・非言語行動そして身体は、コミュニケーションの中でそれぞれどのような役割をはたすのか。それはわれわれの外国語学習にどのように活かせるか。先端コミュニケーション論コースは、最新の技術や機器などを駆使してこのような問題を解明し、新しいコミュニケーションの可能性を切り開こうとするコースです。

連携先：株式会社国際電気通信基礎技術研究所（ATR）

ATR Advanced Telecommunications Research Institute International

進路実績	甲南大学教授、産業技術総合研究所、富山県立大学准教授、国立情報学研究所准教授、国際電気通信基礎技術研究所、PD研究員他
在籍学生数	（後期課程） 1名（2023年度）
論文テーマ例	●外国語学習における知覚訓練と語彙訓練の順序効果 ●英語音声の韻律知覚に及ぼす諸要因の研究 ●外国語音声学習における音響的・意味的文脈効果の研究

所属教員の紹介

内海　章　客員教授　先端コミュニケーション論特別演習
画像認識・視線検出・マンマシンインタフェースなどの分野を主として研究しています。

石井 カルロス寿憲　客員教授　先端コミュニケーション論特別演習
マルチモーダル音声コミュニケーション、パラ言語、人ロボット対話インタラクション等などの分野を主として研究しています。

住岡　英信　客員准教授　先端コミュニケーション論特別演習
人とロボットのコミュニケーションの分野を主として研究しています。

日本語教師養成サブコース

JAPANESE LANGUAGE TEACHER TRAINING PROGRAM

本研究科では、博士前期課程の学生を対象に「日本語教師養成サブコース」を設置しています。これは、「外国語としての日本語教育」の基礎知識を体系的に学ぶための副専攻課程相当のコースです。追加の履修条件を満たせば、博士後期課程の学生も履修可能です。

所属コースにかかわらず、すべての本研究科学生がサブコースを履修できます。所定の科目群の中から必要な単位を修得して申請を行うと、修了時に研究科から公式の「修了認定書」が発行されます。

本研究科で学ぶ学生の中には、研究科で身につけた専門分野の知見や国際的な視野を活かし、海外で働くことを希望する人、そして実際に海外で働く人が多くいます。その際、現地では、日本語・日本文化の紹介や指導を求められる場面も少なくありません。この意味で、自身の専門分野に加え、日本語教育の知見を持っておくことは、海外でのキャリア形成にも有益です。また、近年日本国内では外国人居住者が増加・多様化しています。本研究科の研究領域には、彼らの直面する問題やそれをふまえた日本社会の課題の研究も含まれます。このような研究を行おうとする人たちにとっても、日本語教育について学ぶことは、視野を広げ、研究への示唆を得る機会になるかもしれません。

将来、日本語教師としての就職を目指す方はもちろん、自身の国際的なキャリアや研究の可能性を広げたいという方にも、ぜひ本コースの履修を検討してもらいたいと思います。

なお、本研究科は「登録日本語教員養成機関」「登録実践研修機関」として文部科学省に申請中です。ただし、文部科学省における審査の結果、予定した研修・養成課程が開設できない可能性があります。また、履修の検討の参考になる修了生のインタビュー動画や、本コース履修生限定の講義動画アーカイブも用意しています。

名　　前　中村 堯さん
所属コース　2023年度感性コミュニケーションコース博士前期課程修了
研究テーマ　関西弁との接触による言語変化
現在、神戸大学（非常勤職員）、コミュニカ学院（日本語非常勤講師）に勤務

学部生のころに英語の教員免許を取得した私は、もともとことばを教えることに興味を持っていました。大学院に進学するまでは、日本語教師養成サブコースの存在すら知らず、進学後になんとなく履修し始めました。実際にサブコースに関する授業を受けてみると、日本語教育のおもしろさにどんどん惹かれてしまい、いつかは日本語を教えてみたいと思うようになりました。在学中にはドイツのハンブルク大学日本学科に３ヶ月間派遣してもらい、インターンシップ生としてハンブルク大学で日本語教育に従事する機会がありました。インターンシップでは、主に授業見学や指導補助を行いましたが、実際に90分間の授業を１人ですることもでき、ドイツの学生とも充実した交流をすることができました。

サブコースを履修したことで、日本語を教えるという新たなスキルが得られ、自らのキャリアの幅が広がったと思います。修士課程修了後には大学職員として大学に貢献しようと思っていましたが、ドイツでのインターンシップを経て考えが変わり、今後も大学院で研究と日本語教育の勉強を続けていくつもりです。今は日本語教育に興味がない方でも、サブコースを履修してみると私のように人生が変わるかもしれません。サブコースに登録して日本語教育を学ぶことで、きっとみなさんの視野がさらに広がると思いますので、ぜひ一度サブコースの履修を検討してみてください。

名　　前　南波 真知さん
所属コース　2023年度言語コミュニケーションコース博士前期課程修了
研究テーマ　在米国際結婚家庭における継承日本語教育に関する事例研究―補習授業校と家庭での日本語支援の役割―
現在、神戸大学国際文化学研究科博士後期課程1年、日本語学校にて日本語非常勤講師

日本語教師養成サブコースの講座を受講したことで、日本語教育に携わるために必要となる知識と実践への心構えを多角的な視点から深く学ぶことができました。

私は、新型コロナウイルス禍の影響で留学生の入国制限措置がとられた年に日本語教師の資格を得ました。しかし日本語教師としての実践を積む前に、日本語教育分野の知識について、さらに深く学びたいという気持ちから日本語教師養成サブコースがある国際文化学研究科に入学しました。

本サブコースでは、日本語教育文法や日本語教育方法論、教科書研究、第二言語習得論などの多岐にわたる科目を受講することができます。そして、本コースを一緒に受講した留学生たちや現役日本語講師を始めとする教育関連の経験者たちとのディスカッションや、ピアラーニングの実践を通じて、外国語習得としての日本語に対する多様な立場からの視点に触れるという貴重な経験を得ることができました。

私自身は在学中に日本語学校で非常勤日本語講師を始めましたが、授業の実践では毎回内容についての反省点が尽きません。課題の解決は一朝一夕にできるものではありませんが、本コースの受講を通して得た知見を活かして、少しでも日本語学習者の役に立つような授業設計と実践を目指して奮闘中です。

留学案内
STUDY-ABROAD INFORMATION

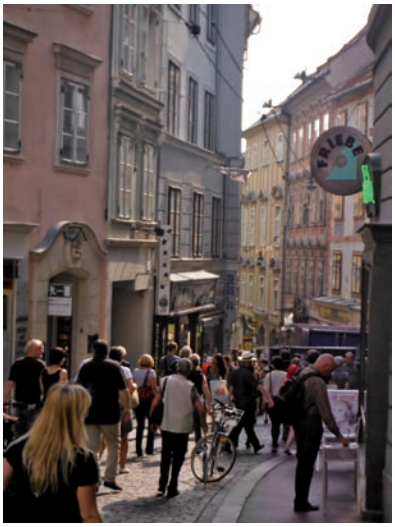
海外の大学と交換留学協定を結んでいます。

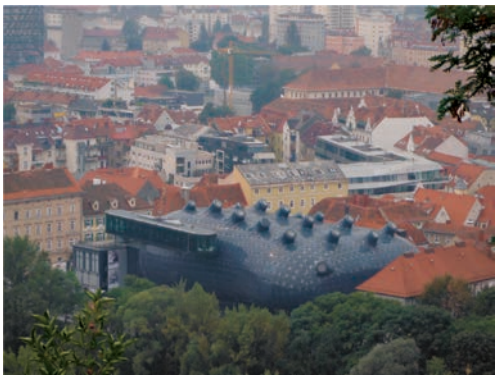
国際文化学研究科は海外の大学と協定を結び、学生の交換を行っています。協定による留学は、私費留学とは異なり、以下のようなメリットがあります。

（1）授業料：留学先大学の授業料が免除されます（ただし、神戸大学に規定の授業料を支払わなければなりません）。
（2）単位互換：留学先で取得した授業の単位について、審査を経て、本研究科の単位として認定されうる制度があります。
（3）修業年限：留学中も神戸大学に在籍中と見なされるので、前期課程の場合は１年間（または半年）の留学期間を含めて最短２年で、後期課程の場合は最短３年で修了することができます。

（1）の留学先の授業料免除は、当該国の大学制度や物価によりさまざまで、大きなメリットになる場合とならない場合がありますが、一般に欧米の大学は留学生から高額の授業料を徴収しており、授業料が免除されることは大きなメリットといえます。（2）及び（3）は協定による留学ならではの利点です。奨学金は日本学生支援機構、神戸大学独自の渡航費と滞在費の一部を補助する奨学金があります。

派遣学生の選考は、次の４点を基準に国際交流委員会が筆記試験及び面接で行っています。（1）研究目的・計画（2）言語能力（3）適性（4）文化交流。なお、英語圏に留学する場合は要求されている TOEFL 又は IELTS のスコアをクリアしなければなりません。





西原　三貴さん
（博士前期課程感性コミュニケーションコース２年）
神戸大学国際人間科学部卒業
研究テーマ：言語習得

「ナポリを見てから死ね」―この言葉につられ、イタリア語もままならない中、ナポリ東洋大学への1年の交換留学に応募しました。ナポリの良い点は、半ば勢いだけで訪れたこんな私をも包み込む懐の広さがあるところです。カオスと形容され、ともすれば敬遠されがちなナポリ。道端にトイレの便座が落ちているなど、確かにカオスなことも起きますが、それは同時に、街全体やそこに住む人々の柔軟性と寛容さを象徴しています。これは、実際にこの土地で生活したからこそ感じられたことです。加えて、学問的な面でも刺激ある日々を送っています。ナポリ東洋大学はその名の通り、東洋について学ぶ大学で、殊日本に関して素晴らしい教育環境が整っています。そのため、南イタリアを中心に、様々な土地から日本に興味のある優秀な学生達が集っています。意欲ある親切なイタリアの学生らと毎日話す中で、ありがたいことに私のイタリア語も上達しました。また、他の国から来た留学生と話す機会も多く、英語に関しても以前よりスムーズに使用できるようになりました。そして、年齢も生まれも異なるフレンドリーな人達と切磋琢磨する中で、語学面だけでなく、一般的な教養や専門分野に関する知見も広がりました。実際にこの土地で生活し、ナポリ東洋大学に留学したからこそ得られる貴重な経験をいただいています。

ダブルディグリー・プログラム
DOUBLE DEGREE PROGRAM

本研究科には、ダブルディグリー・プログラムがあります。これは本研究科に在学中の大学院生が留学先研究科に最低1年間留学し、所定の単位を修得して修士論文を提出することによって、最短2年間で修士の学位を本研究科及び留学先研究科において取得できるプログラムです。

それぞれの研究科で取得した単位の一部は互換され、カリキュラムも連携しています。授業料等については、本研究科の学生は神戸大学に支払うだけで、留学先研究科では免除されます。

■派遣大学
ナポリ東洋大学（イタリア）、パリ大学（旧:パリ･ディドロ大学）、ルーヴェン大学（ベルギー）、ハンブルク大学（ドイツ）、フランス国立東洋言語文化学院（INALCO）

■派遣人数
各大学1～2名

■出願資格
（1）国際文化学研究科博士課程前期課程に所属していること
（2）派遣大学の語学要件等を満たしていること
（3）指導教員より推薦を受けられる者

■派遣学生の選考は、次の3点を基準に書類および面接で行います。
（1）研究計画、（2）語学力、（3）適性

■受入学生の研究テーマ:「現代の日本における《メイド･イン･イタリア》」、「Japan's cultural diplomacy in France」など。

■派遣学生の研究テーマ：「EU の社会的通商政策の形成過程」、「ヨーロッパの高等教育改革と各国のマイノリティへの対応」など。

松本　龍之介さん
（2023 年度博士前期課程修了）
研究テーマ：「EU 域内自由移動の階層性に基づく安全保障化―フランスにおける中東欧諸国からの人の移動の過程追跡―」

フランス東洋言語文化学院（INALCO）は、非常に多様な言語を学ぶことができる国際性豊かな大学です。また、国際関係学部があり、多様な地域の国際関係を政治学、社会学の視点から考えることを特徴としています。私がこの大学を選択した理由は主に二つあります。まず、一つ目は、自分の研究を深めることが可能であると考えたためです。特に「中東欧諸国」に関連した国際関係、仏とそれらの国々との関与など、日本ではなかなか得ることのできない知見を実際に得ることができたのは非常に有益なものとなりました。また、アジア地域や日本に関連する授業も多くあり、より客観的な視点から日本の現状やそれを取り巻く国際関係を見ることができ、これまで以上に「日本」に関して考える機会が増えました。二つ目の理由は、自分がどれだけ通用するかを試してみたいと思ったことです。私は学部生時代、フランスに協定留学した経験があります。その時、学生自身の将来に対する目標や学習に対する姿勢が、非常に明確で確立されたものであると感じました。同時に、彼らと同じ土俵で競い、自分自身を高めたいという気持ちも生まれました。今回のプログラムで実際に彼らと共に講義や議論を行うことは、非常にハードルの高いものでした。それでも、自分なりに授業の理解を深める工夫や、現地の学生からの助けを貰ったことで、何とか食らいつくことができたと思います。実際に、プレゼン発表などに対して教授や周りの学生からポジティブなコメントを頂けたことは、自分自身にとって大きな自信となりました。また、現地での修士論文の口頭試問においては、先生方から内容に関して多くの有意義なコメントを頂き、その後の研究活動に自信を持つことができました。

ダブルディグリープログラムは、現地生と同じカリキュラムの中で取り組むことができる素晴らしい機会です。様々な困難はありましたが、自主性が重んじられるフランスという国で、研究活動に没頭し、多様な知見を得ることができたことは、人生において、かけがえのない唯一無二の経験となったと思います。

研究科協定校一覧

ロンドン（SOAS）	イギリス	全学協定
エセックス		全学協定
バーミンガム		全学協定
マンチェスター		
ケント		全学協定
ユタ州立	アメリカ	
ニューヨーク市立クイーンズカレッジ		全学協定
ジョージア工科		全学協定
テネシー		全学協定
ヒューロン・ユニバーシティ・カレッジ	カナダ	
オタワ		全学協定
ブラジリア	ブラジル	
ハンブルク	ドイツ	DD プログラムあり
ベルリン自由		
ライプツィヒ		
ハレ・ヴィッテンベルク		
トリーア		全学協定
キール		全学協定
ダルムシュタット工科		全学協定
ミュンヘン工科		全学協定
グラーツ	オーストリア	全学協定
ライデン	オランダ	全学協定
ルーヴェン	ベルギー	DD プログラムあり
ルーヴァン・カトリック サンルイ ブリュッセル（旧：サンルイ）		
ヘント		
ブリュッセル自由（仏語系）		
ブリュッセル自由（蘭語系）		全学協定
グルノーブル・アルプ	フランス	
レンヌ（旧：レンヌ第 1）		
パリ第 2		全学協定
パリ（旧：パリ第 7）		全学協定 DD プログラムあり
パリ・ナンテール（旧：パリ第 10）		全学協定
フランス国立東洋言語文化学院（INALCO）		DD プログラムあり
リール		全学協定
エクス＝マルセイユ		全学協定
ボローニャ	イタリア	全学協定
ボローニャ（フォルリ）		
ヴェネツィア		全学協定
ナポリ東洋		DD プログラムあり
バーゼル	スイス	全学協定
バルセロナ	スペイン	全学協定
バルセロナ自治		
ポンペウ・ファブラ		全学協定
ベルゲン	ノルウェー	
ヘルシンキ	フィンランド	
オーフス	デンマーク	
コペンハーゲン		
カレル	チェコ	全学協定
ワルシャワ	ポーランド	
ニコラウス・コペルニクス		全学協定
ヤゲウォ		全学協定
コメニウス	スロバキア	全学協定
エトヴェシュ・ロラーンド	ハンガリー	全学協定
バベシュ・ボヨイ	ルーマニア	Erasmus+ プログラム
ソフィア	ブルガリア	全学協定
サンクトペテルブルク	ロシア	全学協定
ウラル連邦		全学協定
ウーロンゴン	オーストラリア	全学協定
西オーストラリア		全学協定
ニューサウスウェールズ		全学協定
カーティン		
武漢	中国	全学協定
上海交通		全学協定
清華		全学協定
南京		全学協定
華東師範		
中国人民		全学協定
上海		
浙江		
香港		
北京外国語		
中央民族		
国立台湾	台湾	全学協定
国立政治		全学協定
国立成功		全学協定
ソウル国立	韓国	全学協定
済州		
中央		
国立釜山		
モンゴル国立	モンゴル	全学協定
ベトナム国家（ホーチミン）	ベトナム	
アテネオ・デ・マニラ	フィリピン	
タマサート	タイ	
ガジャ・マダ	インドネシア	
南洋理工	シンガポール	全学協定

国際文化学研究推進インスティテュート

RESEARCH INSTITUTE FOR PROMOTING INTERCULTURAL STUDIES (Promis)

2022年4月から、国際文化学研究推進センターは国際文化学研究推進インスティテュート（Research Institute for Promoting Intercultural Studies, Promis）に発展的に改組し、そのもとに移住･移民研究センターと地域連携センターを設置するとともに、研究開発部門、国際交流部門、重点研究部門の3基幹部門の体制になりました。この新しい統合的組織のもとで、国際文化学研究推進インスティテュートは国際文化学研究科の研究プラットフォームとして、さらなる取り組みを進めています。

国際文化学研究推進インスティテュート（Promis）組織図

国際文化学研究推進インスティテュート（Promis）

インスティテュート長：齋藤 剛
副インスティテュート長：昆野 伸幸
副インスティテュート長：田中 祐理子

移住･移民研究センター

センター長：青山 薫
副センター長：ドルノシェク･ゾルコ シュペラ
副センター長：衣笠 太朗

地域連携センター

センター長：板倉 史明
副センター長：辛島 理人

国際交流部門

部門長：林 良子
副部門長：深町 悟

研究開発部門

部門長：北田 亮
副部門長：下條 尚志

重点研究部門

部門長：岡田 浩樹
副部門長：橘 誠
副部門長：深川 宏樹

学術研究員

大谷 晋平（日本学コース出身）
ラズグイ･ヨーズリ（先端社会論コース出身）
余 玟欣（先端社会論コース出身）
植 朗子（ヨーロッパ･アメリカ文化論コース出身）
張 嘉慧（先端社会論コース出身）
鋤柄 史子（バルセロナ大学博士後期課程）

名　　前　原田　豪さん
所属コース　2019年度文化相関専攻国際関係・比較政治論コース博士後期課程修了
研究テーマ　「欧州統合過程における制度要因作用の分析」
2019年度よりPromisに協力研究員･学術研究員として在籍。現在,摂南大学国際学部（特任講師）。

博士後期課程に在籍する全ての人は博士論文の完成を目指し，研究に集中することになります。ですが、博士課程修了後となると、教育、そしてあらゆる組織運営に付き物の実務をこなすことが通常求められます。言い換えれば、学位取得後も研究活動のみで生計を立てる人は稀です。むしろ、研究活動継続のためにも、教育・実務などを行うことが要求されます。

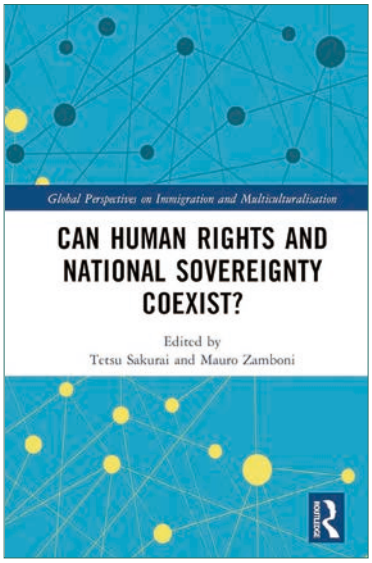
教育に関しては非常勤講師として経験を積むことが可能ですが、実務に関与する機会は多くありません。ですが、Promisの活動（HP管理・作成，セミナー運営や年報編集など）に携わることは、その数少ない機会の1つです。同時に、研究・教育に関する同僚や教員からの助言を得る機会ともなります。このように、学位取得後の新たな課題に取り組む際の活動基盤とできるのがPromisです。

研究に関しても研究プロジェクト助成制度などがあり、アカデミックキャリアにおける全般的なサポートを期待できます。このようなPromisの一員となれたことを幸運に思いますし、これからもより多くの人がPromisに関わることを願っています。

移住・移民研究センター

2023年度、移住・移民研究センターはドルノシェク・ゾルコ・シュペラ特命講師をPromis専属の研究者として迎え、センターの英語名をKobe Migration Research Center(KoMiReC)に改称して新たなスタートを切りました。移住・移民研究に関する新たなセミナーシリーズも開始。2023年10月27日には初回のキックオフセミナーであるEmbarking on Interdisciplinary Migration Researchを開催しました。フランス国立科学研究センターならびにパリ政治学院のエレン・ルバイ教授を連携フェローに委嘱。2024年2月9日にはセミナー「移民・セックスワーク・人身取引――二極化された研究分野における再帰性と方法論」を実施しました。

移住移民のワークショップの様子



2023年3月には本研究科の桜井徹教授がストックホルム大学のマウロ・ザンボーニ教授とともに移民研究の成果を英語の編著として刊行しました

地域連携センター

国際的な観光地域づくりに関する研究を近年の重点課題としている地域連携センターは、インテックス大阪で開催されたツーリズムEXPOジャパン2023にSDGs推進室と連携し、神戸大学の主管部局としてブース出展を実施。一般社団法人南丹市美山観光まちづくり協会ならびに関西エアポート株式会社と会場内イベントを企画しました。2022年度の姫路市との地域連携協定（部局協定）締結に引き続き、2023年度には北海道ニセコ町との包括的な地域連携協定の締結ならびに一般社団法人サステナブル・コーディネーター協会との産学連携協定の締結を進め、県内外の自治体や諸団体と協働して取組みを進めています。2024年3月23日～24日には、国際文化学研究科（Promis地域連携センター）、国連世界観光機関（UN Tourism）駐日事務所、独立行政法人国際協力機構（JICA）、南丹市美山観光まちづくり協会の4者共催による「次世代観光リーダー育成に向けたワークショップ」を美山で開催しました。

研究開発部門

研究開発部門では、国際文化学研究科所属の教員、あるいはPromis学術研究員や協力研究員が中心となって企画するセミナーの開催や広報をサポートするほか、Promisが公募する研究プロジェクト等の選定、修士論文・修了研究レポートの収蔵管理をおこなっています。また、神戸大学学術研究推進室（URA）と連携して、科学研究費助成事業をはじめとする外部資金申請のための支援をしています。一例として、2021年度の研究プロジェクト（移民研究プロジェクトを含む）は以下の通りです（肩書は2021年度現在）。

- 新しい「神話的物語」の創生と日本ポップカルチャー（代表:植朗子協力研究員）
- 多文化共生における信頼感に関する国際比較研究―日中比較研究を中心に（代表:林萍萍協力研究員）
- 近現代ドイツにおける地理的「中間Mitte」の思想史:「中間民族Mittelvolk」自己像の生成と類型（代表:野上俊彦協力研究員）
- 日本人学習者の中国語第三声習得に関する研究（代表:呉琪協力研究員）
- 「モノ」のエスノグラフィー:アート,伝承文学,エコロジーにおけるポスト・ポストヒューマニズムの探求（代表:小林瑠音学術研究員）

国際交流部門

国際交流部門では、国際文化学研究科と緊密に連携をとりつつ、海外の研究機関と学術協定締結をおこなっています。これまでに、メキシコ社会人類学高等研究所（メキシコ）、マヒドン大学人口社会研究所（タイ）、アムステルダム自由大学社会学部／社会学研究科（オランダ）と協定を締結し、国際ワークショップ・シンポジウムの開催や研究者間交流を進めています。

重点研究部門

重点研究部門では2022年度から、大学共同利用機関法人人間文化研究機構のネットワーク型基幹研究プロジェクトである「グローバル地域研究推進事業」を推進しています。

学術研究員

各年度、国際文化学研究科博士課程後期課程で学位を取得した者等のなかから若干名を学術研究員に採用しています。学術研究員には研究者番号が付与され、Promisにて各種の研究プロジェクト等に従事するとともに、事務補佐員とともにPromis事務局を構成し、国際文化学研究推進インスティテュートの管理運営を担っています。

協力研究員

各年度、国際文化学研究科博士課程後期課程で学位を取得した者を協力研究員に委嘱しています。協力研究員には研究者番号が付与されるほか、Promisが公募する研究プロジェクト等に研究代表者として応募することができます。海外大学院に在籍する若手研究者がPromisで研究に従事するための客員協力研究員の制度もあります。

連携フェロー

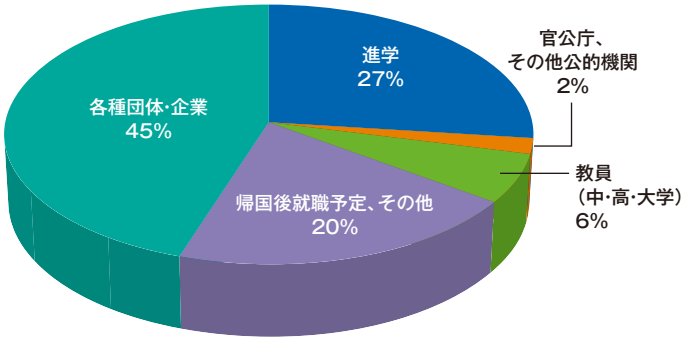
国際文化学研究科ないしは国際人間科学部に過去に在籍した教員、あるいは国際文化学研究科博士課程後期課程で学位を取得し、他大学にて専任教員の職を得た者等を中心に連携フェローに委嘱しています。連携フェローは、Promisが推進する各種の研究プロジェクトの研究分担者や研究協力者として、Promisの国内外の研究ネットワークの一翼を担っています。

就職と進学
EMPLOYMENT AND CAREERS

国際文化学研究科は、創設以来、学界・教育界・ビジネス界に有為な人材を多数輩出しています。修了生はグローバル社会を切り拓くフロントランナーとして多面的に活躍しています。

1. 前期課程修了生の進路概況

2023年度の前期課程修了生45名のうち24名が、前期課程修了後研究成果を活かして就職し、社会の第一線で活躍しています。就職先には、各種法人、各種教育機関、多様な分野の民間企業があげられます。また、12名が博士後期課程に進学しています。帰国後に本国で職につく留学生もいます。



2023年度（45名修了）

2. 前期課程修了生（旧研究科を含む）の近年の主な就職先実績

高度な語学力と情報処理能力をベースに国際文化学の幅広い専門知識をつけた修了生は、さまざまな業種で活躍しています。公務員としては韓国法務省、パラオ政府芸術文化省、ベトナム政府関連など、海外からの留学生の活躍も目を引きます。教員としては英語、日本語、韓国語など、修了コースの特性を活かした分野で活躍する修了生もいます。

主要就職先	
公務員他	【国際機関】 パラオ政府芸術文化省、韓国外交産業省、タイ大使館、国連ハビタット（アジア・太平洋地域事務所）、ベトナム政府投資企画庁など 【国家公務員】 防衛省・語学職（英語）、大蔵省（現財務省）、外務省、国立民族学博物館、京都大学原子炉実験所（技官）、神戸大学ほか国立大学職員など 【地方公務員】 兵庫県人と防災センター、兵庫県警、大阪市役所、西宮市役所、新潟市役所、神戸市芸術センター、兵庫県立芸術文化センター、神奈川県葉山町生活環境部、神戸市役所、三田市役所など 【その他】 JICA（国際協力専門員）、国際交流基金、青年海外協力隊（エルサルバドル派遣）、関西経済連合会、（一般財団法人）日本国際協力センター、日本原子力研究開発機構、海外産業人材育成協会、在外公館派遣調査員、独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構、長崎原爆資料館など
教　員	【中学校・高等学校その他】大阪府、兵庫県、東京都、岡山県、山口県、鹿児島県、福井県、神戸市など
運　輸	全日空、JTB、川崎汽船、阪急交通社、NEXCO中日本、羽田空港など
広　告	電通、リクルートメディアコミュニケーションズなど
情　報	DeNA、チームラボ、NECソフト、NTTデータ、ソフトバンク、楽天グループ、日本IBM、野村総合研究所、ヤマトシステム開発、住生コンピューターサービス、日立システムエンジニア、メディアフュージョン、ゴールドマン・サックス、日本オラクル、NTT西日本、NECシステムテクノロジー、富士通FIP、富士通ビー・エス・シー、フジクラ、ウェブリオ、日本製薬、リクルートなど
食　品	JR西日本フードサービス、カネテツデリカフーズなど
製　造	三菱重工業、日立製作所、住友ゴム工業、富士通、日産自動車、ダイハツ工業、NEC、YAMAHA、日本HP、日本IBM、関西電力、日立電線、川副機械製作所、トヨタ、シャープ、大和ハウス工業、コスモ石油、バンダイ、コベルコシステム、ニチダイフィルタ、明和、矢崎創業、台湾日立化成工業、博瀬電機貿易（上海）有限会社、帝国電機、中国電信北京支社、JNC、パナソニック、ローランド、明星産業、華美電子など
マスコミ	共同通信、時事通信、神戸新聞社、毎日新聞社、産経新聞社、日本放送協会（NHK）、京都新聞社、高知新聞社、MBSラジオなど
文　化	関西フィルハーモニー管弦楽団、（公益財団法人）びわ湖芸術文化財団、（公益財団法人）ニッセイ文化振興財団、公益財団法人吹田市文化振興事業団など

3. 前期課程修了生（旧研究科を含む）の近年の主な進学先実績

本学の大学院博士後期課程をはじめ、他大学の大学院にも多数が進学しています。2023 年度の例では、修了生45人中、12名が博士後期課程に進学しています。

主要進学先	
神　戸　大　学	国際文化学研究科、人文学研究科、人間発達環境学研究科、工学研究科など
その他国公立大学	京都大学大学院、大阪大学大学院、九州大学大学院、総合研究大学院大学、東京都立大学大学院、神戸市外国語大学大学院など
海外大学・私立大学	シェフィールド大学、ハンブルク大学、ルーヴェン大学、パリ第7大学、ナポリ東洋大学、フランス国立東洋言語文化大学など

4. 後期課程修了生（旧研究科を含む）の進路概況

大学教員や学芸員などの職についています。2023 年度修了生は11名で、大手前大学現代社会学部、コンピュータ総合学園、神戸定住外国人支援センターなどに就職しました。

5. 後期課程修了生（旧研究科を含む）の近年の主な就職実績

海外・国内の大学において、多くの修了者が研究者・教育者として活躍しています。また近年、学位取得後、大学だけではなく企業や研究所に就職する人も増えてきています。

主要就職先	
海　外　大　学	天津外国語大学、青島大学日本語学部、浙江大学人文学院、ヤンゴン大学人類学科、中国人民大学外国語学部、台湾国家科学委員会・人文学研究中心研究員、大連外国語学院日本語学院、湖南工業大学外国語学院、中国国立広州中医薬大学、中国内蒙古大学トルコ・チャナッカレオンセキズマルト大学、中国河南省新郷学院、カタール大学、山東科技大学、西安理工大学など
国公立大学等	【国立】大阪大学、東北大学、神戸大学国際文化学研究科、神戸大学留学生センター、神戸大学百年史編集室、静岡大学、滋賀大学、三重大学、島根大学、福井大学など 【公立】島根県立大学看護学部、神戸市外国語大学、兵庫県立総合衛生学院、北九州市立大学基盤教育センターなど
私　立　大　学	立命館大学、法政大学、大阪工業大学、近畿大学、同志社大学、大妻女子大学、東京医科大学、広島国際大学、大妻女子短期大学、甲南女子大学、四条畷学園短期大学、花園大学文学部、神戸学院大学経営学部、関西学院大学国際学部、関西学院大学言語教育研究センター、甲南大学人間科学研究所研究員、神戸情報大学院大学、武庫川女子大学、武蔵大学社会学部、環太平洋大学、京都精華大学など
学　芸　員	呉市海事歴史科学館学芸員、広島市現代美術館など
行政・企業	神奈川県警察科学捜査研究所、朝日新聞、兵庫留学生会館、イオン、教育開発出版、メディキット、カナフレックスコーポレーション、財団法人安全保障貿易情報センター、国際交流基金、愛知県西尾市教育委員会、アステラス製薬、ファーストリテイリング、三菱銀行（中国・広州）、中国航空工業集団、国際電気通信基礎技術研究所、サントリーホールディングス、パナソニック、理化学研究所など

充実したキャリア・サポート

国際文化学研究科はキャリア・サポートのコアに教育を据え、それを補強する就職支援活動を強力に、きめこまやかに推進するユニークな研究科を目指しています。近年は、特に外国人留学生の就職支援活動を充実させるように努めています。

就職支援を担当する鶴甲第一キャンパスキャリアサポートセンター（鶴一CSC）は、就職、留学、資格試験、人生設計などに関するキャリア関連図書が閲覧できる独自のコーナーを設け、企業で働く方々の体験談や専門分野の知識の企業での生かし方などの講演会や就職活動体験報告会等の働き方の探求に関わる行事を開催しつつ、面接対策、インターンシップ対策など就職活動に直接関わる各種の情報提供をしています。全学の就職支援活動と常に連携しながらも、院生一人ひとりの進路選択の相談に応じるなど、充実したサポート体制をとっています。近年は、グループディスカッション講座など、新しい企画にも挑戦する一方、特に留学生のための就職支援活動に力を入れています。

全学の研究支援施設・学生寮・奨学金

RESEARCH FACILITIES, DORMITORIES, SCHOLARSHIPS

AL・IL Lab/ ランゲージ・ハブ室

研究科のキャンパスには、国際コミュニケーションセンターが運営する外国語学習支援施設があります。「アクティブラーニングラボ（AL Lab）」と「インタラクティブラーニングラボ（IL Lab）」では、外国語学習において、ペアワークやグループディスカッションなどの双方向型学習が円滑に行えるような教室環境が整えられています。

「ランゲージ・ハブ室」には、英・独・仏・中・露・韓の各国語を話す留学生が常駐しており、気軽に外国語による会話体験を持つことができます。また、「ランゲージ・ハブ室」では、英語プレゼンテーション・セミナーなど、さまざまな外国語教育プログラムが提供されており、学んだ外国語を実際に使う場が用意されています。これらの充実した施設を活用することで、外国語の実践的運用力の向上が期待できます。英語をはじめとした既修外国語のブラッシュアップはもちろん、ぜひ、新しい外国語の習得にもチャレンジしていただきたいと思います。

学生寮

大学の寮として、男子学生用に「住吉寮」「住吉国際学生宿舎」「国維寮」「白鴎寮」、女子学生用に「女子寮」「住吉国際学生宿舎」「国維寮」「白鴎寮」があります。学生寮の寄宿料は月額4,700円～18,000円（光熱費などは別）です。格安であること、研究科を超えた友人を作りやすいことなどが寮のメリットです。また、「女子寮」を除き、日本人学生と留学生の混住型となっており、国際的な交流が期待できます。

国際文化学図書館

神戸大学には各キャンパスに図書館があります。中央図書館というものはありません。国際文化学部図書館の入口には「総合図書館」と「国際文化学図書館」という２つの看板が掛けられています。総合図書館というのは全学共通教育の学習支援を行うことを目的としており、全学問分野の資料の充実に努めています。国際文化学図書館は、国際文化学部・本研究科の学生・院生向けに、文化交流や各国の文化事情など国際文化学に関わる資料を中心に収集しています。

本図書館では、「学生希望図書」という予算費目があり、本研究科の大学院生は、学術的な図書の購入希望を申請することができます。図書館では、蔵書の貸し出しに加えて以下のサービスが提供されます。複写申し込み、学内の他の図書館からの取寄せ、他大学からの図書貸与やコピーの申し込み、購入希望の受付などです。またこれらのサービスは、図書館まで行かずに、学内のパソコンの画面から依頼することができ、さらに文献やコピーの到着をＥメールで案内してくれるので大変便利です。また図書館のホームページで電子ジャーナル検索、データベース検索、新聞記事検索を利用できます。平日は８：45から21：30まで、土曜日は10：00から18：00まで開館しています。

奨学金

日本学生支援機構奨学金と神戸大学独自の奨学金、財団や企業、地方自治体などが支給する奨学金があります。日本学生支援機構の場合、第一種奨学金（無利子貸与）と第二種奨学金（有利子貸与）があり金額も異なります。

研究会・研究誌の紹介
Research Groups and Journals

国際文化学研究科には多くの研究会・プロジェクトが組織され、研究科の教育と研究の重要な一翼を担っています。

神戸大学大学院生紀要『国際文化学』

神戸大学国際文化学研究科は、研究科に所属する大学院生の研究を促進することを目的とし、研究成果を広く公開するために、『国際文化学』（大学院生紀要）を刊行しています。

『国際文化学』の前身は、2011年度まで年2回（通算25号）、神戸大学国際文化学会（学術組織）が発行してきた学術雑誌です。この雑誌は、研究科の教育・研究の一翼を担ってきましたが、2012年度より、大学院生の学術研究をサポートし、大学院教育の効果を強化するために、オンラインの大学院生紀要としてリニューアルいたしました。年1回の発行で、投稿資格者は国際文化学研究科の大学院生および編集委員会が認めた者です。

『国際文化学』の編集方針は、前身誌の方針を引き継ぎ、さらに大学院教育の一環としての特徴を備えております。大学院生が論文を投稿すると、指導教員以外から複数の査読委員が選ばれ、その論文の審査にあたります。専門的なコメントが必要な場合は外部の研究者に査読を依頼する事もあります。査読教員は、論文掲載の可否を決定するだけでなく、論文に問題がある場合には、それをどう修正すべきかについて懇切丁寧なコメントを投稿者に返します。論文の修正期間が十分に確保されているので、投稿者は指導教員とも相談しつつ、じっくり論文を書き直すことができます。このような査読―修正―再投稿のプロセスを経て、大学院生は全国学会などに投稿するための学問上の基本的な作法、必要とされる学術水準について学びます。

ホームページ
http://www.lib.kobe-u.ac.jp/kernel/seika/eISSN=21872082.html

『神戸文化人類学研究』

『神戸文化人類学研究』は、2007年に創刊された文化人類学コースが発行する学術雑誌です。これは、2002年に創刊された旧神戸大学社会人類学研究会が発行した学術雑誌『ぽぷるす』を前身としたものです。『神戸文化人類学研究』は、学内外2名の研究者による厳正な査読によって学術的水準を維持しています。本誌では、文化人類学を専攻する本研究科所属大学院生の研究成果が主に公表されていますが、近年では他大学の大学院生、研究者も投稿するようになっています。

なお、文化人類学コースでは、本コース所属大学院生を中心とした神戸人類学研究会が組織されています。定期的に開催される本研究会では、学内のみならず学外の研究者も招いて活発な議論が交わされ、その開催数は、2024年1月の段階で97回を数えています。

ホームページ
https://www.kobe-anthro.jp

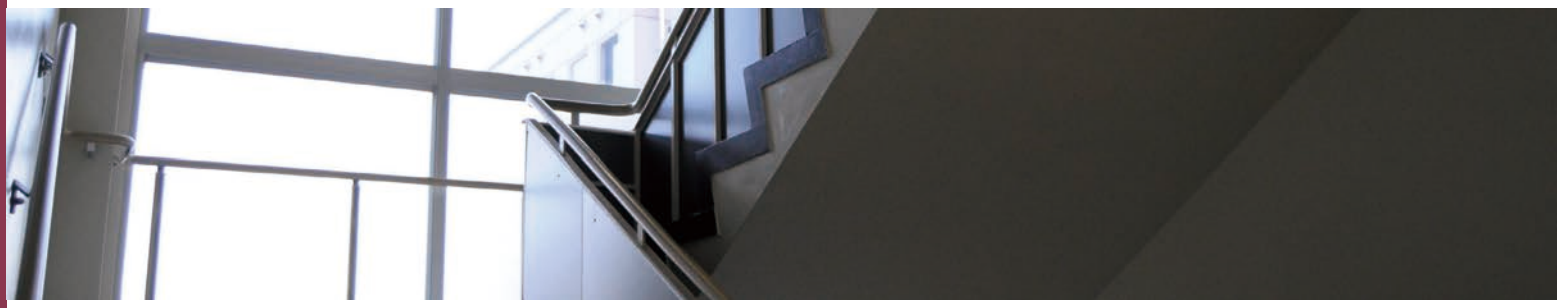
『日本文化論年報』

『日本文化論年報』は、1998年3月、学部および大学院の日本文化論講座（現在は日本学コース）を母体に創刊、年1冊の刊行を続けています。

講座・コースの研究・教育活動の牽引を目的に、教員および大学院生の研究成果、また優れた学部卒業論文などを掲載しています。その他教育活動に関する彙報、卒業生情報などもあります。刊行に際しては、神戸大学山口誓子学術振興基金の補助金を得ています。

ホームページ
http://web.cla.kobe-u.ac.jp/staff/gakunone/home/nenpou.html

研究サポート
RESEARCH SUPPORT



キャンパス内での院生の生活・研究を強力にサポートします。

空き時間は、ここでくつろぎ、勉強する ― 院生研究室 ―

国際文化学研究科には、院生専用の研究室が設置され、各研究室にはデスクのほか、書架やロッカーも配置されています。また、院生研究室には数多くのパソコンが配置され、インターネットや電子メールを自由に利用することができます。

自分のペースで研究を進めたい方に ― 長期履修学生制度 ―

この制度は、職業を有している等の事情により、２年間で博士前期課程修了に必要な単位を修得し修了することが困難な者が、入学時に計画的に２年を超えて単位を修得し修了することを申請し、大学がこれを認めた場合、２年間の授業料で２年を超えて在学できる制度です。

２年間の授業料の合計額を長期履修学生として認められた年数で除した額が年額授業料となります。ただし、在学中に授業料が改定された場合には、改定時から新授業料が適用されます。職業を有している等の事情とは、次のいずれかに該当する者で、標準修業年限内での修学が困難な者です。

（1）職業を有し就業している者（自営業および臨時雇用 [単発的なアルバイトを除く。] を含む。）
（2）家事、育児、介護等の事情を有する者
（3）その他研究科長が相当と認めた者

なお、この制度の利用には、上記の職業を有している等の事情以外に一定の条件があります。申請希望者はあらかじめ担当係に相談してください。

ハラスメントのないキャンパスをめざして ― ハラスメント防止委員会 ―

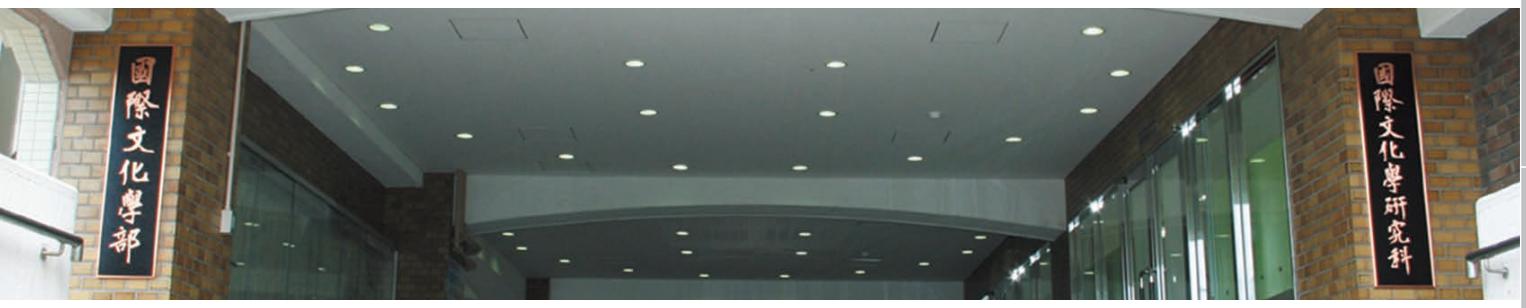
大学では、自由で充実したキャンパス・ライフを送ってほしいと思っています。性別、年齢に関係なく、互いを尊重する人間関係を築くことが大切です。とはいえ、人間関係が広がれば、望んでいないような不愉快な言動をされたり、気づかないうちに相手を傷つけたり、相手から傷つけられたり、ということが起こりえます。ハラスメントとは、「嫌がらせ」を意味し、就労、就学上の優位な立場を利用して、相手が望まない言動により、精神的、肉体的苦痛を与えることです。性的なことに関連するセクシャル・ハラスメント、教育上のことがらに関連するアカデミック・ハラスメント等々、さまざまな種類があります。

国際文化学研究科には、男性、女性両方の教員からなるハラスメント防止委員会が設置されています。不幸にしてハラスメントを受けてしまった場合、ひとりで悩まないで、早めに委員の教員に相談してください。ひとりで不安であれば、誰かに一緒に行ってもらいましょう。匿名での相談も受け付けています。委員会では、相談者のプライバシー保護に十分配慮していますので、安心して相談に来てください。

コピーカードの支給

授業や研究のために必要なレジュメや資料をコピーできるように、毎年、定額のコピーカードが無料で支給されます。

論文題目
THESIS TITLES



国際文化学研究科　論文題目（令和５年度提出分）

※（D）博士論文　（M）修士論文　（MC）修了研究レポート

【日本学コース】
（MC）天王寺楽人の史料に関する書誌学的研究～『法事舞楽之記』注釈翻刻～

【アジア・太平洋文化論コース】
（M）日本における客家移民の研究―関西崇正会を中心に―
（M）中国の社会変化と女性の外見美
（M）現代中国におけるナショナル・アイデンティティの構築―1949 年以降の軍事パレードから
（MC）ハリウッド映画における中国人像の変遷とその背景
（D）清代モンゴルのチベット仏教的行政機構「ラマ旗」シレート・フレー旗に関する研究

【ヨーロッパ・アメリカ文化論コース】
（M）国際市場における中国製ホラーゲームの躍進とそのコンテンツの特色について――日米のホラーゲームからの影響と中国ゲーム審査基準を中心に
（M）メキシコの対中国貿易赤字問題の分析検討 ――中墨貿易のさらなる発展に向けて――
（MC）福祉国家とリバタリアニズムーロスバードの視点からー
（MC）アメリカにおける政治的分極化とメディア
（D）阪急英国フェアの歴史的展開と文化的意義―その文化展示の特色と「英国紅茶イメージ」の創出―
（D）ジョージ・エリオットのリアリズムと道徳観――シンパシーに乏しい人間の描写からの考察――

【文化人類学コース】
（M）集合的記憶になり得ない「無意思的記憶」――ハワイにおけるニッケイを事例に
（M）占いにみるジャワの「知識人」の試み 20 世紀インドネシアにおけるプリンボンの出版
（M）山地村落に根差した経済活動――タイ北部アカのコーヒービジネスとホームステイ経営の事例を通して
（M）過疎島嶼地域の住民と「過去が蘇る葬礼式」――韓国青山島草墳葬の観光化を事例に
（M）中央アジア国境地域における宗教の越境性に関する考察 モンゴル国バヤンウルギー県ウルギー市のカザフ人を事例にー
（MC）北京市の仏教信仰変容ー放生活動を中心に

【国際関係・比較政治論コース】
（MC）EU 域内自由移動の階層性に基づく安全保障化ーフランスにおける中東欧諸国からの人の移動の過程追跡ー
（MC）西ヨーロッパにおける政党システムの動態パターンの比較研究 ：イギリスの分析を通じて
（MC）アメリカの感染症対策の政策立案の過程分析 -COVID19 の事例 -
（MC）アメリカにおける外国人非熟練労働者受け入れ政策の課題と改革
（MC）The role of education in France and Japan' s cultural diplomacy
（D）イスラエルの核兵器をめぐる不透明政策と全方位均衡 ―1960 年代の国内政治と外交・安全保障を中心に―

【先端社会論コース】
（M）クロスオーバー ―ストリートバスケットボールにおける身体技芸と空間の再分割―
（MC）From Japanese to Foreigners: National Identity Alteration of the Korean Community in the Postwar Japan
（D）'Capitalistic Rituals' in Football : The Case of Vissel Kobe Fandom in Japan（サッカーにおける資本主義的儀礼 : ヴィッセル神戸ファンダムに着目して）

【芸術文化論コース】
（M）オートフィクションとしてのアメリー・ノトンブ : アイデンティティと諸作品の分析
（M）中仏における「義賊」のテーマに関する比較研究 ――アルセーヌ・ルパンシリーズと魯平シリーズを中心に――
（MC）日本家屋と現代美術―作品・展示空間の分析を中心に
（MC）行政やアート NPO の性質に照らして 今後の公共文化施設の課題を考察する ―滋賀県の文化政策における「本物」という表現の使用事例から―
（MC）〔身体から主体へ : フェミニズム・アートからみる女性の「自己決定権」に関する考察〕

【言語コミュニケーションコース】
（M）現代小説における比喩表現の翻訳 - 吉本ばなな著『TUGUMI』の葡英語訳を例に -
（MC）在米国際結婚家庭における継承日本語教育に関する事例研究　ー 補習授業校と家庭での日本語支援の役割 ー
（MC）絵本の英日・仏日翻訳における役割語の選択
（MC）日本語指導が必要な外国人児童生徒に対する支援において母語支援員が感じた困難点
（MC）SNS におけるコメントの日中対照研究―スタンス・トライアングル理論に基づいて―
（MC）1980 年代の東北師範大学中国赴日本国留学生予備学校における日本語教育の一側面ー日本語教科書分析を通してー
（D）現代日本語の助詞「たり」の非例示用法 ―日本語教育への応用に関する検討―
（D）JSL 学習者による場所を表す格助詞「に」、「で」、「を」の学習における訂正フィードバックの効果に関する研究
（D）婉曲表現として使用されるカモシレナイに関する研究 ―日本語教育への応用に向けて―

【感性コミュニケーションコース】
（M）日本語におけるフォーカス発話の音声的特徴とその習得
（MC）関西弁との接触による移住者の言語変化
（D）中国人日本語学習者による日本語母音の産出と調音運動の観察

【情報コミュニケーションコース】
（M）生体情報の類似性強調による一体感創出手法
（M）機械学習を用いた似合うリップカラーの推定に関する研究
（M）タスク指向対話における Decision Transformer を用いた文生成制御に関する研究
（M）ゲーム中の映像酔いを防ぐディスプレイ周辺エフェクトの提案
（MC）SNS と大規模言語モデルを用いた旅行先推薦システムの提案
（D）IT の国際共通性に着目した日本語・英語話者 IT 技術者間のコミュニケーションに関する研究
（D）テキスト平易化のためのコーパス自動生成と評価に関する研究

【外国語教育システム論コース】
（MC）外国語としての英語教育環境における多読授業デザインに関するシステマティックレビュー
（MC）Argumentative essays written by high school students: The relationship between holistic scores, linguistic complexity, and meaning complexity

【外国語教育コンテンツ論コース】
（M）現代英語における確信度副詞―コーパス研究結果の教育的応用を目指して―
（M）日本語日常会話における ABAB 型オノマトペ ―母語話者・学習者コーパス調査に基づいて―
（MC）音声変化に焦点を置いた発音指導におけるカタカナ表記とその活用

国際文化学研究科教員一覧

ACADEMIC STAFF

コース	氏名	職名	メールアドレス
日本学	板倉　史明	教授	itakura ■ people.kobe-u.ac.jp
日本学	長　志珠絵	教授	s.osa ■ landscape.kobe-u.ac.jp
日本学	昆野　伸幸	教授	nobuyuki ■ port.kobe-u.ac.jp
日本学	寺内　直子	教授	naokotk ■ kobe-u.ac.jp
アジア・太平洋文化論	伊藤　友美	教授	itot ■ kobe-u.ac.jp
アジア・太平洋文化論	貞好　康志	教授	ysd ■ kobe-u.ac.jp
アジア・太平洋文化論	谷川　真一	教授	tanigawa ■ port.kobe-u.ac.jp
アジア・太平洋文化論	深川　宏樹	准教授	fukagawa ■ people.kobe-u.ac.jp
アジア・太平洋文化論	橘　誠	准教授	tachibana ■ people.kobe-u.ac.jp
ヨーロッパ・アメリカ文化論	小澤　卓也	教授	ozataku ■ harbor.kobe-u.ac.jp
ヨーロッパ・アメリカ文化論	衣笠　太朗	講師	tkinugasa ■ harbor.kobe-u.ac.jp
ヨーロッパ・アメリカ文化論	中村　麻美	講師	asamin ■ people.kobe-u.ac.jp
ヨーロッパ・アメリカ文化論	西谷　拓哉	教授	takuyan ■ kobe-u.ac.jp
ヨーロッパ・アメリカ文化論	深町　悟	講師	fukamachi ■ port.kobe-u.ac.jp
文化人類学	梅屋　潔	教授	umeya ■ people.kobe-u.ac.jp
文化人類学	大石　侑香	准教授	yuka ■ diamond.kobe-u.ac.jp
文化人類学	岡田　浩樹	教授	hokada ■ kobe-u.ac.jp
文化人類学	齋藤　剛	教授	t-saito ■ people.kobe-u.ac.jp
文化人類学	下條　尚志	准教授	shimojo ■ people.kobe-u.ac.jp
越境文化論	井上　弘貴	教授	hiro_inouye ■ port.kobe-u.ac.jp
越境文化論	辛島　理人	准教授	karashima ■ people.kobe-u.ac.jp
越境文化論	北村　結花	准教授	yuika ■ kobe-u.ac.jp
越境文化論	塚原　東吾	教授	togotsukahara ■ harbor.kobe-u.ac.jp
国際関係・比較政治論	中村　覚	教授	satnaka ■ kobe-u.ac.jp
国際関係・比較政治論	新川　匠郎	講師	shoniikawa ■ harbor.kobe-u.ac.jp
国際関係・比較政治論	安岡　正晴	教授	yasuoka ■ kobe-u.ac.jp
国際関係・比較政治論	David Adebahr	講師	adebahr ■ harbor.kobe-u.ac.jp
モダニティ論	上野　成利	教授	ueno ■ people.kobe-u.ac.jp
モダニティ論	鹿野　祐嗣	助教	yujishikano ■ emerald.kobe-u.ac.jp
モダニティ論	田中祐理子	教授	tanaka.yuriko ■ people.kobe-u.ac.jp
モダニティ論	箱田　徹	准教授	tetz ■ godzilla.kobe-u.ac.jp
モダニティ論	松家　理恵	教授	janjur ■ kobe-u.ac.jp
先端社会論	青山　薫	教授	kaoru ■ tiger.kobe-u.ac.jp
先端社会論	小笠原博毅	教授	hirokio ■ kobe-u.ac.jp
先端社会論	工藤　晴子	准教授	haruko.kudo ■ people.kobe-u.ac.jp
先端社会論	桜井　徹	教授	sakurait ■ kobe-u.ac.jp
先端社会論	西澤　晃彦	教授	nishizawa ■ people.kobe-u.ac.jp

コース	氏名	職名	メールアドレス
芸術文化論	石田　圭子	准教授	keikoishida ■ people.kobe-u.ac.jp
芸術文化論	礒谷　有亮	講師	isotani ■ port.kobe-u.ac.jp
芸術文化論	岩本　和子	教授	iwamotok ■ kobe-u.ac.jp
芸術文化論	岡本　佳子	講師	okamoto_y ■ people.kobe-u.ac.jp
芸術文化論	髙田　映介	講師	takada.eisuke ■ harbor.kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	石田　雄樹	講師	yishida ■ port.kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	川上　尚恵	大学教育推進機構 講師	kawakami ■ sapphire.kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	小松原哲太	講師	komatsubara ■ port.kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	齊藤　美穂	大学教育推進機構 准教授	msaito ■ people.kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	田中　順子	教授	jtanaka ■ kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	藤濤　文子	教授	fumiko ■ kobe-u.ac.jp
言語コミュニケーション	南　　佑亮	准教授	y-minami ■ people.kobe-u.ac.jp
感性コミュニケーション	北田　　亮	教授	ryokitada ■ port.kobe-u.ac.jp
感性コミュニケーション	巽　　智子	准教授	tt ■ port.kobe-u.ac.jp
感性コミュニケーション	林　　良子	教授	rhayashi ■ kobe-u.ac.jp
感性コミュニケーション	牧田　　快	講師	kai ■ people.kobe-u.ac.jp
感性コミュニケーション	松本絵理子	教授	ermatsu ■ kobe-u.ac.jp
感性コミュニケーション	南本　　徹	助教	minamimoto.toru ■ topaz.kobe-u.ac.jp
情報コミュニケーション	大山　牧子	大学教育推進機構 准教授	m.oyama ■ tiger.kobe-u.ac.jp
情報コミュニケーション	康　　敏	教授	kang ■ kobe-u.ac.jp
情報コミュニケーション	清光　英成	教授	kiyomitu ■ kobe-u.ac.jp
情報コミュニケーション	西田　健志	准教授	tnishida ■ people.kobe-u.ac.jp
情報コミュニケーション	村尾　　元	教授	hjmr ■ opal.kobe-u.ac.jp
外国語教育システム論	島津　厚久	大学教育推進機構 教授	shimazu ■ puppy.kobe-u.ac.jp
外国語教育システム論	髙橋　康徳	大学教育推進機構 准教授	ytakahashi ■ port.kobe-u.ac.jp
外国語教育システム論	濱田　真由	大学教育推進機構 助教	myhama ■ harbor.kobe-u.ac.jp
外国語教育システム論	廣田　大地	大学教育推進機構 准教授	hirotadaichi ■ ruby.kobe-u.ac.jp
外国語教育システム論	保田　幸子	大学教育推進機構 教授	syasuda ■ opal.kobe-u.ac.jp
外国語教育システム論	安田　　麗	大学教育推進機構 講師	r.yasuda ■ port.kobe-u.ac.jp
外国語教育システム論	横川　博一	大学教育推進機構 教授	yokokawa ■ kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	石川慎一郎	大学教育推進機構 教授	iskwshin ■ kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	柏木　治美	大学教育推進機構 教授	kasiwagi ■ kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	木原恵美子	大学教育推進機構 准教授	kihara.emiko ■ crystal.kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	グリア・ティモシー	大学教育推進機構 教授	tim ■ kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	佐藤　　健	大学教育推進機構 教授	satoken ■ people.kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	芹澤　　円	大学教育推進機構 助教	m.serizawa ■ phoenix.kobe-u.ac.jp
外国語教育コンテンツ論	陳　　暁	大学教育推進機構 講師	chenxiao ■ people.kobe-u.ac.jp
先端コミュニケーション論	内海　　章	客員教授	utsumi ■ atr.jp
先端コミュニケーション論	住岡　英信	客員准教授	sumioka ■ atr.jp
先端コミュニケーション論	石井 カルロス寿憲	客員教授	carlos ■ atr.jp

教員アドレスについては，■を@に置き換えてご利用ください。

Invitation to the Graduate School of Intercultural Studies

Dean's Message

Professor Kiyoshi Umeya
The 8th Dean of the Graduate School of Intercultural Studies

It is common knowledge that the world around us is changing more and more due to what we call globalization. In fact, while global exchange has a long history, as seen in the Silk Road, the speed and degree of this exchange has been incomparably greater in recent years. Furthermore, advances in information and communication technologies (ICTs) are changing our forms of communication. In the post-COVID world, the range of things that can be performed online has undoubtedly expanded. The recent development of generative AI also foreshadows the emergence of a new other.

When people and cultures with differing backgrounds and values come into contact, it is natural that intense friction and conflict occur. There are deep-seated issues that cannot be fixed by simply making small changes in the way we think. Furthermore, in recent years, the so-called 'Anthropocene' has become a major issue of human intervention in the natural environment. How then should we live in this world?

Francis B. Nyamnjoh (1961-), an anthropologist and philosopher from Cameroon, seeks to view the essence of the world through the lens of 'incompleteness' of all existence. In this world, 'incomplete' humans have created an incomplete world by facing and drawing from incomplete things and supernatural forces. This includes man-made things such as ICTs. It may all be superficial, as with the 'curious creature' depicted by Nigerian author Amos Tutuola (1920-1997), which uses borrowed material to disguise itself as a 'complete gentleman'. In *The Palm-Wine Drinkard*, the 'curious creature' is nothing more than a skeleton.

Encounters with that which is alien rarely provide ideal balance, harmony, symphony or polyphony, regardless of the degree of effort. Rather, they are usually accompanied by cacophony (dissonance) that is a typical reflection or symbolization of our modern activities such as academic research.

Nevertheless, Nyamnjoh does not despair about the world or humanity. According to him, humans must recognize this cacophony and negotiate and come to terms with it, while at the same time resisting the temptations of division, isolation, and domination, and ultimately aim to realize conviviality in which they can share mutual benefits such the benefits of collaborative research.

Human society is always at risk of devolving into a zero-sum game in which the strong unilaterally exploit the weak based on a single value system. This is something that not only Nyamnjoh, but various other outstanding thinkers have sounded the alarm about in unison.

Nyamnjoh states that living as a human being is ultimately a cycle of borrowing and lending. It is important to recognize that the nature of life is borrowing and lending and that there are debts that can never be repaid. That is, there are debts to that humans owe the natural environment, resources, and supernatural forces such as our ancestors that cannot be repaid.

We tend to forget that our current existence is the result of having received various things from various places. In a sense, we are always in debt, and many of those debts cannot be repaid by the persons who have received benefits. Some things in life cannot be repaid. It is also easy to forget that all humans are interconnected and that we support and depend on each other. We forget that the logic of reciprocity, donation, distribution, and altruism is one of the essences of human nature and sociality, and is the most fundamental survival strategy.

As 'incomplete' human beings, we need various tools to ensure survival. Yet it is often the case that there might be no ready-made tool available that matches the need. It requires a process similar to bricolage, in which items that may seem like junk at first glance are put together to create something. And since we are gathered in an academic environment, I make bold to remind us that there is no successful research that is not built on bricolage, As researchers therefore, we are bricoleurs.

The rule of bricolage is to make do with what is available, that is, with the tools and materials that are at hand at the time. All tools and materials are miscellaneous items that are collected without regard to what the ultimate aim at that time is. They are not collected with a certain purpose in mind. The stock is updated and increased on various occasions, and collection from previous creations and destructions is performed. The persons involved confirm if the tools are appropriate for the intended operation and if it seems necessary, it is possible to change tools at any time or simultaneously use multiple tools without hesitation, regardless of whether if the origin or form of the tool is alien.

Regarding undergraduate and graduate school education, there is often discussion about how to acquire skills and abilities that will be visibly useful after graduation. This is not necessarily wrong. However, if one falls into teleology, where one considers a simple purpose and the means to reach it as a set, a shallow and simplistic way of thinking ends up developing.

We should look far into the future, as humans are much more complex and multifaceted. Things that are useful at present quickly become useless. Of course, we would also like to provide you with things that are directly connected to your career, but our greatest desire is to create a place where you can unexpectedly encounter a 'someone' or a 'something' that will support you when the things that you used to rely on are no longer useful. It may be different for each person. Rather, it should be. For example, for one person, it might be French language skills, but for another, it might be networking and communication with friends far from home who were encountered while studying abroad, and for another, it might be a piece of poetry that the person happened to come across in a the corner of a classroom or the library written by a complete stranger or a wayfarer.

Rather, what we would like to provide more than tools (i.e., skills) with a clear purpose, is an environment that provides an encounter with something different for each person that will support that individual's future. In the extreme, it is a place of 'encounter' with something that dramatically transforms 'life'. Here, bricolage-like miscellaneousness takes on a positive meaning. I believe our specialized 15 courses in two departments are well structured to provide such encounters. Fortunately, there are already many researchers and practitioners active in various fields who were together with us for several years. It is my sincere hope that within this graduate school, each of you will be able to find this 'something' that will support himself or herself. I call on all of us to become incomplete bricoleurs with the ambition of undauntingly propelling our Graduate School towards higher heights.

(1) Pursuit of cultural research that understands culture as a complex entity and takes intercultural relations as its perspective.
(2) Dynamic research into culture as a complex entity with attention to intercultural interaction in such forms as conflict, fusion, and interchange.
(3) Multifaceted studies of cultural transformations amid the globalization of contemporary society.
(4) Development of advanced communication research related to language and information.
(5) Execution of a shift from monocular, single paradigms that apply over-simplistic dichotomies such as central / peripheral, civilized / uncivilized, and advanced / backward to pluralistic, multiplex paradigms, and the creation of research methodologies adapted to the cultural dynamics of contemporary society.

Admission Policy, Diploma Policy

	Admission Policy	Diploma Policy
Master's Program	The objective of the Kobe University Graduate School of Intercultural Studies is to cultivate individuals who have a deep understanding of intercultural phenomena and flexible communication skills, as well as strong scholarship and creative research skills. In view of this educational goal, the Graduate School seeks students who have the following characteristics.	Degree:Master of Arts The Graduate School of Intercultural Studies awards degrees as follows, based on Kobe University Diploma Policy. •Students are enrolled in a master's program at the Graduate School of Intercultural Studies for a period of two years or more. They must obtain the prescribed credits required to complete the program, receive the required research guidance, and pass final examinations as well as a review of their master's thesis or the results of their specific research task. It may be possible for students with excellent results to complete their studies in a shorter period. •Prior to completing postgraduate study, students are expected to acquire the following skills in addition to the capabilities set out in Kobe University Diploma Policy.
	•Have a keen interest in understanding culture as a complex entity and pursuing multifaceted studies that convey the richness of intercultural relations. •Have a keen interest in understanding the dynamics of language and information communication and addressing the various problems that confront contemporary global society.	Department of Cultural Interaction 1. The ability to research relationships between different cultures from multiple angles while understanding that cultures are diverse and mutually affect one another, resulting in cultural transformation. 2. The ability to carry out interdisciplinary research informed by a high degree of specialization.
	•Have a keen interest in carrying out interdisciplinary research with high standards of expertise.	Department of Culture and Globalization 1. The ability to tackle various issues that today's global society is facing, with a deep understanding of the dynamics of linguistic communication and information technology. 2. The ability to carry out interdisciplinary research informed by a high degree of specialization.
Doctoral Program	The objective of the Kobe University Graduate School of Intercultural Studies is to cultivate individuals who have a deep understanding of intercultural phenomena and flexible communication skills, as well as strong scholarship and creative research skills. In view of this educational goal, the Graduate School seeks students who have the following characteristics.	Degree :Doctor of Philosophy The Graduate School of Intercultural Studies awards degrees as follows, based on Kobe University Diploma Policy. •Students are enrolled in a doctoral program at the Graduate School of Intercultural Studies for a period of three years or more. They must obtain the prescribed credits required to complete the course, receive the required research guidance, and pass final examinations as well as a review of their doctoral thesis. It may be possible for students with excellent research results to complete their studies in a shorter period. •Prior to completing postgraduate study, students are expected to acquire the following skills in addition to the capabilities set out in Kobe University Diploma Policy.
	•Have a keen interest in clarifying cultural phenomena, understanding the dynamics of culture as a complex entity, and exploring an advanced field of cultural research. •Have a keen interest in pursuing various language and information communication issues and conducting multifaceted studies focused on the increasingly globalized modern society.	Department of Cultural Interaction 1. The ability to independently explore cutting-edge fields in cultural research, investigating the structure and dynamics of various cultures that are transformed as they mutually affect one another in diverse ways. 2. The ability to carry out cross-disciplinary research informed by a high degree of specialization.
	•Have a keen interest in carrying out cross-disciplinary research with superior expertise.	Department of Culture and Globalization 1. The ability to research the globalized modern world from multiple angles, addressing various issues in linguistic communication and information technology. 2. The ability to carry out cross-disciplinary research informed by a high degree of specialization.

Organization of the Graduate School of Intercultural Studies

15 specialized courses for interacting with society and living in the world

Departments and Divisions

When comparing the nature of cultures in modern society in order to address modern issues such as cultural confrontation and conflicts, it is essential to develop the ability to examine cultural trends in an increasingly globalized world. To do this, we have to examine both the cultures of different regions and cross-cultural interaction.

Accordingly, the Graduate School of Intercultural Studies has two departments – *Cultural Interaction*, for multifaceted commentary on the nature of intercultural interaction based on the results of cultural research in different regions, and *Culture and Globalization* to investigate the contemporary cultural phase generated by globalization.

Consisting of the Area Studies Division for interdisciplinary studies regarding region-specific cultural traits and cultural metamorphosis, and the Intercultural Communication Division for multifaceted research on the reality of cross-cultural contacts, conflicts and interactions, the Cultural-Interaction Department aims for (1) understanding of cultures of different regions, (2) understanding of cross-cultural relations and interactions, and (3) development of cross-cultural communication abilities.

The Culture and Globalization Department consists of the Contemporary Culture and Society Division for comprehensive research into contemporary social and cultural circumstances amid the erosion of modern Western principles accompanying globalization, the Human Communication and Information Science Division for investigation of issues involving verbal and non-verbal communication and use of diverse information media, and the Second Language Education Division for advanced research concerning second language education and production of outstanding practitioners in this field. In addition, there is also a joint research group for Advanced Communication in the Doctoral Course in cooperation with the Advanced Telecommunications Research Institute International (ATR). With these divisions and courses, we aim to (1) investigate acculturation brought about by globalization and the establishment of new public culture, (2) develop advanced global communication, and (3) research foreign language education for the global era.

Department	Division	Course
Cultural Interaction Multifaceted elucidation of the nature and attributes of intercultural interaction based on the results of cultural research in different regions	Area Studies Interdisciplinary studies regarding region-specific cultural traits and cultural metamorphosis	Japanology
		Asia-Pacific Culture Studies
		European and American Culture Studies
	Intercultural Communication Diverse exploration of the actual status of intercultural contact, confrontation, and interchange	Cultural Anthropology
		Transcultural Studies
		International Relations and Comparative Politics
Culture and Globalization Elucidation of the contemporary cultural phase generated by globalization	Contemporary Culture and Society Comprehensive research into contemporary social and cultural circumstances amid the erosion of modern Western principles accompanying globalization	Modernity Studies
		Contemporary Social Issues
		Art, Culture and Society Studies
	Human Communication and Information Science Investigation of issues involving verbal and non-verbal communication and use of diverse information media	Linguistics and Communication Studies
		Human Communication
		Computers and Communication
	Second Language Education Advanced research concerning second language education and production of outstanding practitioners in this field	Systems of Second Language Education
		Contents in Second Language Education
	Joint Research Group (Doctoral Program)	Advanced Communication

Master's Program – Two Learning Tracks to Meet Your Aspirations

Develops people who can work in an international society and new researchers who can lead the era – Different styles for different goals from start to finish

	Career Enhancement Track	Researcher Track
Entrance Exam (General Admission, Special Selection for Adult Applicants, and Special Selection for Foreign Students)	1. Test of basic subjects You must choose one of the following subjects; a foreign language, classical Japanese literature, computer science, or (for non-Japanese applicants only) Japanese. However, the subjects you can choose from also depend on the course to which you are applying, so make sure to check the application guidebook for further details. 2. Test of major subject 3. Oral examination	
Curriculum	·Seminars to develop high-level skills in foreign language, information handling and presentation ·Students mainly take Special Lectures, which are given to a small group in an interactive manner rather than a one-way lecture. ·Students who have earned the required credits and submitted a research report can obtain master's degree.	·Tutors provide quality individual guidance (tutorial). ·Students mainly take Advanced Expertise Seminars to build basic skills required for a researcher. ·Students may take Special Seminars in the doctoral program. ·Students shall submit a master's thesis or master's folio (a combination of achievements).
Future career	Students will obtain master's degree and work in international fields as specialists.	The Researcher Track is for students who intend to take the entrance exam to the doctoral program and proceed to the program. Students aim to become researchers or high-level specialists.

Two Educational Tracks

The program has a Career Enhancement Track and a Researcher Track. Students will have the opportunity to select one after enrollment.

Career Enhancement Track

This track caters to students who intend to enter the workforce after completing the master's program. By acquiring broad expertise and practical applied skills, students seek to develop their career to a higher level. Students can earn the master's degree by acquiring the requisite credits in courses centered on special lectures and by submitting a master's research report appropriate for their career design.

Researcher Track

This track caters to students who intend to continue on to enter the doctoral program. The track offers a curriculum designed to develop researchers and high-level specialists. To complete the track, students are required to take requisite credits in courses centered on advanced expertise seminars and to submit a master's thesis or a master's folio.

Academic Skill Seminars

The objective of the seminars is to effectively learn methods and techniques and acquire other academic skills required for research in various fields.

· Computer Skills Development
· Academic Communication (English)
· Academic Writing (English)
· Academic Writing (Japanese)
· Social Research Methods
· Ethnographic Fieldwork
· Research Methods for the Behavioral Sciences

Master's Folio

The master's folio is comprised of multiple research products that are loosely tied to a single theme, and which can be submitted in place of a master's thesis. As a master's folio does not have to be in the form of a single thesis, many diverse research products that would previously not have been accepted as a master's thesis – compositions, research reports, – are accepted as part of a folio. This makes it easier to conduct applied research that is relevant to one's work or workplace, and because the work is divided up and presented on numerous occasions, it also allows for systematic writing and research.

Doctoral Program – Developing Independent Researchers

For deeper study in a research field
– flexible support to obtain a PhD in three years

	Coursework Program
Research theme	Theme suited for the research field of the course
Research style	Individual research
Research guidance	The entire teaching staff, especially the advisor, provides support.
Process to obtain PhD	<1st year> Present a concept in a joint seminar of the course, publish an academic article and submit a foundational thesis.
	<2nd year> Publish an academic article, make a presentation at a conference and submit a preparatory doctoral thesis.
	<3rd year> Submit part of a thesis draft to a joint seminar of the course once a month and receive guidance and support from the whole teaching staff. Submit a doctoral thesis.
Expected achievements	Achievements of academic research where free thinking and creativity are required

Career and Professional Development

– Career Paths to the World

Master's Program

Cultural Interaction Department

- As a specialist
  ·Specialist at an international organization such as the United Nations or JICA
  ·Official of various public and private organizations that plan introductions to Japanese culture and exchanges
  ·Cultural planner at a museum
  ·Junior/senior high school teacher (English) with a high level of expertise
  ·Planner for the cultural exchange programs of a local government unit or company
  ·Person in charge of training in a foreign-affiliated company or joint venture
  ·Leader of a regional NPO taking the lead in cultural activities and cross-cultural understanding

- As business professional with the ability to take practical actions
  ·Employee at a foreign-affiliated company or joint venture
  ·Employee at a trading company or other type of company
  ·Personnel for overseas expansion of a Japanese company

Culture and Globalization Department

- As a specialist
  ·Cultural policy specialist or art manager with knowledge of music, fine arts and other types of arts
  ·Journalist or government employee who addresses the various issues of changing modern cultures such as gender and public nature
  ·Junior/senior high school teacher (English) with a high level of expertise
  ·Employee/teacher at a language education company
  ·Editor of language education materials
  ·Researcher/specialist/advisor at a foreign student center
  ·Japanese language teacher
  Interpreter/translator
  ·Employee of a language/IT corporate laboratory

- As a business professional with an ability to take practical actions
  ·Software engineer
  ·System engineer

Doctoral Program

Leading researchers who promote "international cultural studies" in the world

·Researcher at an international organization/ research institute
·Researcher at a national/public/corporate laboratory
·Teacher at a college/junior college/specialized vocational high school

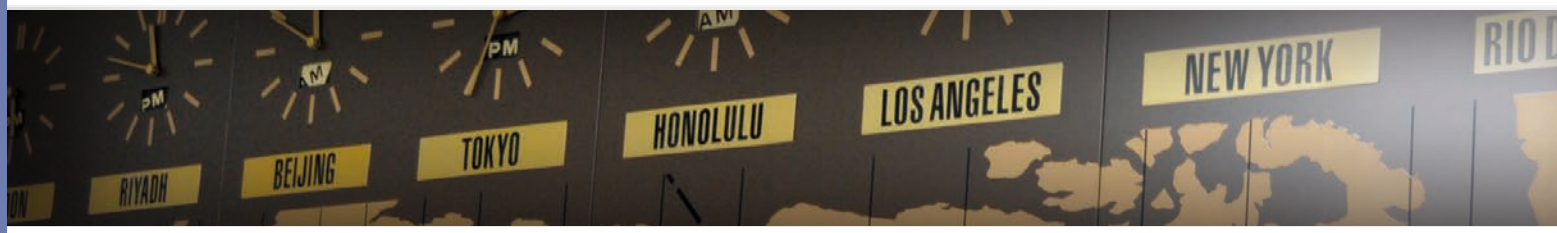
Degrees that can be obtained

·Master's Program
Master's degree (Master of Arts)
·Doctoral Program
Doctor's degree (PhD)

Qualifications that can be obtained (Master's Program)

·Junior High School Specialized Teacher's Certificate (English)
·Senior High School Specialized Teacher's Certificate (English)

15 Specialized Courses



Japanology

In the Japanology Course, we explore human activities in Japan from a cultural point of view while positioning Japanese culture relative to various cultures in the world. We aim to address, jointly study and learn an extremely wide range of cultural and social issues from ancient to modern times concerning literature, arts, religion and philosophy. The course also provides opportunities to improve professional skills for reading ancient papers and reviewing documents, which are often required to deepen understanding of Japanese culture and society. Moreover, the course provides specialized training to students so that they can discuss Japanese culture and society by an academic process without being limited by popular views of Japan. Our objective is to nurture individuals who can discuss Japan with specialized skills and high-level academic capabilities.

Students' research themes

Master's course: Research on gender equality program of Kobe city; A study on the source History of *Onsenji-temple* in Kinosaki; A research on the thoughts of the flower arrangement practice in the Edo period; Images of Japanese performing arts displayed in journals for national propaganda; A Comparative Study of Horror Expressions and Characterization of Female Protagonists in Horror Games; A historical study on the practice of *gagaku* at Kumamoto-Han domain.
Doctoral course: Ethnographical study on the folk music and dance for rice-planting; A study of folk literature in connection with feudal lords in the early modern era; A study on cultural policy on radio broadcasting in the post-war Okinawa under US military occupation; A study on *iemoto* system in *cha-no-yu* (tea ceremony) since the modern era; A study of the hygiene problems in East Asia in the 19th century: focusing on an open port Incheon, Korea; A study of newspaper reports on Tottori earthquake in 1943; Cinema that "Records" an Author: The "New Wave" and the Avant-Garde Art Movement of the 1950's.

Teaching staff

Fumiaki ITAKURA, Professor
Subjects: Japanese Visual Arts
Research fields: Japanese film studies from international and historical viewpoints.

Shizue OSA, Professor
Subjects: Contemporary Japanese Society
Research fields: Modern Japanese history, specifically the War memory and Occupied Japan.

Nobuyuki KONNO, Professor
Subjects: Japanese Language and Culture
Research fields: Japanese intellectual history, specifically on nationalism from the 1920s to the 1940s with an awareness of history and religion.

Naoko TERAUCHI, Professor
Subjects: Japanese Performing Arts
Research fields: Japanese traditional music and performing arts in relation to various cultures in Asia and other parts of the world.

Asia-Pacific Culture Studies

Going through major changes in economy and international exchanges, the Asia-Pacific region is rapidly growing. In this sense it is one of the most active regions in the world. However, just following the superficial flow of such development is not enough to understand the characteristics of the region. East Asia, Southeast Asia and the Pacific Area all have extremely complex and diverse traditions, and have been Transformed by the wave of globalization. Therefore, in order to have a deep understanding of the characteristics of the region, we need to conduct specialized in-depth studies on many aspects including social structure, religion, history and economic circumstances. This course has a well-established guidance system where professors with diverse specialties teach research methods in classes on a broad range of research fields.

Students' research themes

- Studies on Thai wives who have Japanese husbands
- Representations and practives of Ainu Culture today ---Case studies of cultural activies in Shiraoi town
- Historical studies on the influence on the Japanese image in Australia from the early development of Australian-Japan relationships
- Naxi native official surnamed Mu in Lijiang, Yunnan during the Ming Period 14-17 centuries
- College students' conflicts about love and sex in Indonesia
- Studies on secretaries and the training of secretaries in Outer Mongolia in the Qing period
- A study about the Ownership of Farmlands and its Contracts in Inner Mongolia during Manchu Qing Period: Cases in Guihuacheng Tümed Banner (12th Asia Pasific Research Prize Winner article)

Teaching staff

Tomomi ITO, Professor
Subjects: Culture and Society in Southeast Asia
Research fields: Thai studies, studies on modern social history, Buddhism and women

Shinichi TANIGAWA, Professor
Subjects: Society and Economy in China
Research fields: Chinese politics and society

Makoto TACHIBANA, Associate Professor
Subjects: Culture and Society in East Asia
Research fields: Modern history of Mongolia, Studies on international relations in East Asia

Yasushi SADAYOSHI, Professor
Subjects: National Integration in Southeast Asia
Research fields: Modern history of Indonesia, studies on overseas Chinese

Hiroki FUKAGAWA, Associate Professor
Subjects: Culture and Society in Oceania
Research fields: Cultural anthropology, social anthropology, personhood and sociality

European and American Culture Studies

In the European and American Culture Studies Course, we conduct multifaceted and comprehensive education and research on European and American societies and cultures, which have been playing a central role in world politics, economy and culture in modern times. Although the cultures developed in these regions have spread worldwide, it is it is being critically reexamined. Moreover, there has recently been progress on studies on the societies and cultures in Europe and America that only played a peripheral role in establishing the modern era. Based on these past achievements, we reexamine Western thoughts and values that are deeply rooted in our modern lives and consciousness, and seek their meanings in the 21st century. We want to reveal the unknown depths of Europe and America through a course of concrete studies in a wide range of fields including history, language, religion, philosophy, literature, art and society.

Students' research themes

The “German Legends” of the Grimm Brothers, A Study on William Morris, Acceptance of Victorian Culture in “Harry Potter”, Modern French Fashion, Czech Romani Literature, Czech Baroque Studies, A Study on C. Bronte Establishment of the Mirandese language, Analysis of Visual Gags in I Love Lucy, Stereotype of the Japanese People in Hollywood Movies, Problems of Italian Immigration in America, Pacifism, Isolationism and Populism in the United States of America during Interwar Periods, Japan-Russian Relations through the Imperial Families, Belarusian Nationalism, Chinese Immigrants to the US.

Teaching staff

Takuya OZAWA, Professor
Subjects: Latin America and Global History
Research fields: Latin America, especially the modern history of Central America, ethnic issues and culture concerning export crops that impact Central American society.

Takuya NISHITANI, Professor
Subjects: Literary and Visual Culture in North America
Research fields: American literature, especially Herman Melville, Nathaniel Hawthorne, and other writers of the American Renaissance; film studies, especially adaptation studies and comparative studies in the narrative representation in film and literature.

Taro KINUGASA, Lecturer
Subjects: History of German and Central-Eastern Europe
Research fields: Modern and contemporary history of German and central-eastern European borderlands, the separatist movement and migration in Silesia.

Asami NAKAMURA, Lecturer
Subjects: Religion and Culture in Britain
Research Fields: Anglophone literature, particularly utopian/dystopian fiction and science fiction (SF). My research interests include nostalgia,gender and sexuality and posthuman philosophy.

Satoru FUKAMACHI, Lecturer
Subjects: Trans-border Literature
Research fields: British literature, military science fiction (especially Invasion literature), propaganda studies, and British near-future war fiction from late 19th century to WWI.

Cultural Anthropology

The Cultural Anthropology Course specializes in various themes and regions providing a high-quality education and research curriculum. Today’s various cultural issues are characterized by the dynamism of the conflict, division, integration, reconciliation, generation and extinction of various cultures and values under the influence of globalization. In the course, we consider methods of allowing dialogues among various cultures based on deep intercultural understanding, by viewing the world from down-to-earth research investigation field work with broad and flexible perspectives. We welcome students who wish to be internationally successful specialists and researchers and foreign students who wish to conduct high-level anthropological studies.

Students' research themes

Master’s program: cargo cult, Kazakh identity, tourism, multicultural orientalism, post-Soviet period, postcolonial, status of women in China, Boze in Akuseki Island, local Hawaiian, Peruvian living in Japan, primitive art, kula trade , fare trade in Bangladesh, Education of Nation-State, Over Sea Korean, International marriage, Vietnamese in Japan, Cultural Heritage, World Heritage, Murti-culturalism in Japan, Nikkei in Argentine, Korean American, Hispanic, bilingualism, Chinese American, Caribbean in America, Brooklyn Carnival, Native Canadian, sustainable tourism, ethnic media, multiracial in America, ethnic identity, South Americans in Japan, Nikkei Brazilian, Nikkei Hawaiian, life history, diaspora, transnationalism, Dominican baseball migrants, Pentecostalism in Jamaica, Rastafarian, Christianity and contextualization, development and women in Mexico, participation and development
Doctoral program: cultural authenticity, Aneityum of Vanuatu, historical anthropology, refugee, Karenni, homestay, the Experiment in International Living Care and Family of Korea, Social Change of Korean Village in China, Feminization of Migration, Over-Sea Chinese in Vietnam, Anthropology of Tourism on Vietnam, masculinity, gender in the Caribbean, popular music, reggae, soca, dancehall, identity politics, mixed race, ‘Hafu’, representation

Teaching staff

Kiyoshi UMEYA, Professor
Subjects: Ethnology
Research fields: Social anthropology, East African ethnography, studies on witchcraft and sorcery, Japanese folk-religion, anthropology of development

Yuka OISHI, Associate Professor
Subjects: Social Anthropology
Research Fields: Ecological anthropology, environmental anthropology, global history, subsistence, material culture, Siberian ethnography, Arctic area studies

Hiroki OKADA, Professor
Subjects: Ethnographic Research
Research fields: Societies in East Asia and Vietnam, re-organization of families and religions in the process of colonization and modernization, minorities and multiculturalism, space anthropology.

Tsuyoshi SAITO, Professor
Subjects: Cultural Anthropology
Research fields: Social anthropology, Middle Eastern ethnography, anthropological Islamic studies, Morocco

Hisashi SHIMOJO, Associate Professor
Subjects: Contemporary Cultural Anthropology
Research Fields: Historical anthropology, Vietnamese and Southeast Asian studies, water frontier, wet zomia, ethnicity, religion, hybridity, migration/refugee, war, socialism, survival

Transcultural Studies

As globalization continues, people and goods are increasingly crossing various borders, including national borders. In this course, we aim to comprehensively address the issues arising from a variety of transboundary movements, focusing on three perspectives: immigration, tourism, and science and technology. Through these lenses, we deepen our understanding of the conflicts and transformations resulting from the asymmetrical encounters of civilizations and cultures that globalization inevitably brings.

Students' research themes

Master's program: Foreigners in Meiji Japan, Text-Image Relations in the Classics, Gardens in Myths, View of Nature, Environmental Issues, Food and Toxic Chemicals, Whitehead's Philosophy of Organism, Xu Guang-qi's View on Mathematics

Teaching staff

Hirotaka INOUE, Professor
Subjects: History of Trans-border Societies
Research fields: American studies with a focus on the history of intellectuals in the United States.

Masato KARASHIMA, Associate Professor
Subjects: Transborder Societies and Cultures
Research fields: International History of Tourism, Political Economy of Knowledge and Culture.

Togo TSUKAHARA, Professor
Subjects: Science, Technology and Society, etc.
Research fields: Science history and technological societies.

International Relations and Comparative Politics

In the International Relations and Comparative Politics course we welcome students with an interest in Japanese politics and foreign affairs.

Professors in our department specialize in international relations, international political economy, security studies, public policies and urban administration.

In their research, graduate students cover diverse areas including countries such as Japan, China, India, Europe, America, Middle East, etc.

The staff, along with graduate and undergraduate students, are actively engaged in research in line with the international standard.

Students will master a variety of methodologies and approaches through team teaching run by the academic staff.

Please feel free to contact us if you have any questions. This department also offers foreign students the opportunity to study the internal politics and diplomacy of their home country from a comparative perspective.

Students' research themes

Thematic approach: Regional integration, Preventive diplomacy, Conflict and Peace building, Security, Ethnopolitics, Party politics, Democratization, Welfare state, Educational policy, Transnational relations, Contemporary history of International relations

Regional approach: EU studies, French politics, British politics, German politics, Spanish politics, Italian politics, Politics in Northern Europe, American politics, Politics in the Middle East, Politics in ex-Yugoslavia, Indian politics, Sino-Japanese relations, Sino-American relations, Politics in the Mediterranean

Teaching staff

Satoru NAKAMURA, Professor
Subjects: Regional Politics
Research fields: Preventive diplomacy in the Middle East, Middle Eastern political economy, Saudi Arabian history

Sho NIIKAWA, Lecturer
Subjects: Political Institutions
Research fields: Making and breaking governments in democracies, politics in Germany and Europe, political science methodology (especially qualitative and multimethod research)

Maraharu YASUOKA, Professor
Subjects: Contemporary Politics
Research fields: Comparative public policy, American politics and government, urban politics contemporary modern American politics (especially the federal system and urban issues)

David ADEBAHR, Lecturer
Subjects: International Relations
Research fields: International relations theory, international relations of the Asia-Pacific, Japanese foreign policy.

Modernity Studies

The basic framework of our contemporary society consists of three distinct realms: the techno-economic structure, the polity, and the culture. The ruling principles of these three realms, such as functionary rationality, the idea of equality, and the expression & realization of "self," originated in Western Europe with the arrival of the modern period. Today, however, these principles are proved to be discordant and are being shaken to their roots along with the progress of globalization. This situation demands a re-examination of the meaning of "modernity" and an accurate reading of just where the world is (should be) heading in this ongoing upheaval. The Modernity Studies Group covers a wide range of disciplines from social thought, economic thought, political thought to epistemology and history of modern science. Through careful analysis of the prevailing principles of the three realms of the modern world, we aim to cultivate firmly grounded capabilities of cogitation that are required for tackling actual issues in our society.

Students' research themes

Master's program: M. Foucault and Herculine Barbin, Peter Berger's idea of "everyday" and religion, Alfred Schutz's idea of "relevance"
Doctoral program: Ernst Junger, "technology," Niklas Luhmann, social system theory, Herbert Spencer, modernization of Japanese society, D. H. Lawrence, eco-criticism

Teaching staff

Naritoshi UENO, Professor
Subjects: Modern Political Thought
Research fields: History of political and social thought. I analyze such key concepts as "violence," "liberty" and "public sphere" in the form of social philosophy, focusing on the history of thought concerning the philosophers of the Frankfurt School including Horkheimer and Adorno. [I have published "Frontier of the Thought – Violence" (Iwanami Shoten).]

Yuji SHIKANO, Assistant Professor
Subjects: Modern Social Thought
Research fields: Philosophy, psychoanalytic theory and social thought. I explore the modern social thought and culture,based on the studies on the philosophy of Gilles Deleuze. His books include "Gilles Deleuze's The Logic of Sense: event, amor fati and permanent revolution" (Iwanami Shoten) and "Gilles Deleuze and Theories of revolution" (Ibunsha).

Yuriko TANAKA, Professor
Subjects: Philosophy and History of Modern Science
Research fields: Epistemology (philosophy of human scientific knowledge), 19th & 20th centuries' history of atomic physics and biomedicine. [I have published "History of the Body, Suffering and Living" (Seidosha).]

Tetz HAKODA, Associate Professor
Subjects: Modern Social Thought
Research fields: History of social thought, contemporary critical thought and political ecology. I read modern social philosophy in the context of current developments in critical thought and contemporary issues such as the climate crisis, extractivism and logistics. [I have published "Michel Foucault and the Concept of Government: An Introduction" (Kodansha) .

Contemporary Social Issues

The interaction between humans, society and nature has significantly changed and is becoming increasingly complex in modern society. The objective of the "Contemporary Social Issues" course is gaining understanding of contemporary society through an interdisciplinary approach that bridges the humanities and social sciences in exploring leading issues in modern society. For example, we analyze the changes in thinking surrounding nation states, families and individuals from the perspective of gender theory to capture socially constructed human relations; envision an equitable solution to global challenges such as cultural friction, absolute poverty, human-rights violation, climate change and seek to understand human nature and society in a multicultural world faced with informatization of the consumer society facilitated by innovation in media technology. The "Contemporary Social Issues" course disentangles these conflicting problems theoretically and provides a means of tackling them realistically.

Students' research themes

· Gender division of labor in the home in urban China
· Euthanasia seen from the perspective of the right to self-determination
· Why is the sex selection of a child unacceptable?
· Racism in dance hall reggae
· A sociological study of "created communities"
· Urban youth subcultures in Japan: The changing perception of public space with reference to the case of parkour
· NPO/NGO network media: Is accessing the public sphere possible through the Internet?
· Occupation and sexuality: GHQ's policy-making on prostitution (Doctoral dissertation)
· Feminism as relation: From the perspective of interaction between images, individuals and methodology
· Changes of heart and the development of moral individualism (Doctoral dissertation)

Teaching staff

Kaoru AOYAMA, Professor
Subjects: Gender and Society
Research fields: Sociology, migration, gender and sexuality. I am also interested in issues such as globalization, multiculturalism, social exclusion and inclusion, the right to intimacy and representation. She is pursuing a combination of theoretical and empirical research methodologies to look into phenomena that cause changes across public and private lives such as immigration, care / sex workers, same-sex marriage, and gender identity "disorder."

Hiroki OGASAWARA, Professor
Subjects: Media and Cultural Studies
Research fields: I am studying sociology and cultural studies. I am critically examining the relationship between multicultural capitalism and racism especially in the fields of media and sport from empirical, theoretical and historical perspectives.

Haruko KUDO, Associate Professor
Subjects: Norms and Cultures
Coming from transnational sociology, my research focuses on the relationship between international migration and gender and sexuality, particularly the norms of sexuality in refugee and forced migration. Having worked in the humanitarian field, I am also interested in the issue of violence within humanitarian assistance/activities and the power relations between humanitarian workers and beneficiaries.

Tetsu SAKURAI, Professor
Subjects: Contemporary Jurisprudence
Research fields: My speciality is legal philosophy; I am particularly engaged in "global justice," i.e., how we should understand the meaning of national borders when we address global issues such as absolute deprivation, economic disparities, human rights violations and environmental pollution. I am now working on conflicts between universal human rights and national sovereignty that contemporary large-scale immigration raises.

Akihiko NISHIZAWA, Professor
Subjects: Contemporary Social Theory
Research fields: I am studying sociology and urban studies. I have been dealing with contemporary social problems, focusing on the life-world and the identity of the urban poor confronted with social exclusion. [My recent books include *The Sphere of Poverty: Who is excluded?*, Kawadeshobo Shinsha, etc.]

Art, Culture and Society Studies

Art and Culture Theory Courses are configured from an arts and culture environment system and content-based arts and culture. Research is conducted on fine art (painting), literature, performing arts (music, opera, theater), and fashion art and how they are related to society.

In content-based arts and culture, social awareness and the worldview as reflected through analysis of artwork are considered. In the arts and culture environment system, arts management connects the arts and society examining and the grand design of cultural policies, considering factors such as the right of easy access to art and actual cultural facility management from an international perspective.

In this course, we welcome candidate students, regardless of their undergraduate major, who are interested in art and supporting its environment as well as those who are keen to undertake specialist learning.

Students' research themes

Master's program: Local community, Public theater organizational management, Network formation between non-profit organizations, Community art, Art project in sojin area Social and Cultural Center in Berlin, Civic activities and cultural policy in Sweden, Protection and application of cultural heritages: historic sites of France and China, City space improvement in Paris, Congolese Diaspora in Belgium, Indie bands of Japan and Korea, Church building during the Russian Imperial Period, Japonism, Tadamasa Hayashi, French Impressionist painter Gustave Caillebotte, French Women Writer, Japanese avant-garde calligraphy and abstract expressionism painting, Women and modes in France, Japanese Street Fashion.
Doctoral program: Cultural Policy and social inclusion, Modern advertising in Japan, Daumier and the modern city of Paris, Acceptance of modern French music in prewar Japan, Formation of Japanese ceramics collections in France and the trade between Japan and France, Kenji Miyazawa and the optics, Cultural policy in Singapore.

Teaching staff

Keiko ISHIDA, Associate Professor
Subjects: Art Theory
Research fields: Aesthetics and art theory. I conduct studies under such themes as the relations between art and politics in modern times and the artistic communication with others. I am also interested in recent trends in art that attempt to engage with social and political issues.

Yusuke ISOTANI, Lecturer
Subjects: Art in Contemporary Society
Research Fields: History of modern art, history of photography. I particularly work on photography in France between the two World Wars and its relationship to the contemporary changes in art, graphic design, and publishing industry. I am also interested in the roles played by art history, art museums, and libraries in the formation of photo history.

Yoshiko OKAMOTO, Lecturer
Subjects: Modernism in Art
Research fields: My main interest is theater studies, particularly Central and Eastern European operas and dramas at the turn of the twentieth century. I am currently analyzing Hungarian music theater works and the process of changes and expansion of their performances.

Eisuke TAKADA, Lecturer
Subjects: Contemporary Cultural Policy
Research fields: I specialize in the 19th-century Russian writer and playwright Chekhov. My research focuses on the relationship between literature and science, and the problems confronting humanity. I am also interested in contemporary Russian literature.

Linguistics and Communication Studies

Linguistics and Communication Studies course addresses the issues of cross-cultural communication, which are becoming increasingly important in the era of globalization. Language is the primary means of conveying concepts and messages to others and has a cultural dimension to it which is closely linked to human cognition, thoughts, and customs. Based on comparative and contrastive analysis of language structure and usage, this course aims to study a wide variety of aspects of human language communication, such as the pragmatic functions of language, second language acquisition, literary texts, and figurative language, as well as to explore more effective methods of teaching Japanese as a second language. Classes for fundamental and applied research are offered to help students develop skills in research and practical teaching.

Students' research themes

Master's program: Fillers in Japanese and French, Persuasion and Rhetoric, Words written in Katakana, Translation of onomatopoeia in comics, Bilingualism, Social aspect of Japanese language education.
Doctoral program: Compound verbs, Rhetoric of fiction, Free indirect speech and stylistics, Contrastive study of verbs in Japanese and Chinese, Acquisition of L2 morphosyntax, Historical study of Japanese language education, Effects of corrective feedback in the learning of L2 Japanese *ni*, *de*, *o*.

Teaching staff

Yuki ISHIDA, Lecturer
Subjects: Usage-based Linguistic Typology
Research fields: My research interest is the analysis of French literature in terms of linguistics and narratology. I am working on ideological and cultural issues such as self-identity, happiness, translation and Cross-cultural understanding. My current research deals with self-narrative and happiness of self-narrative.

Naoe KAWAKAMI, Lecturer
Subjects: Teaching Japanese as a Second Language (Practical application)
Research fields: My research field is the historical study of Japanese language education. In particular, I am interested in the historical progress of the Japanese language in Japan and China. By analyzing Japanese learning and teaching from a historical perspective, I explore the significance, role and status of Japanese language education in society. I am also interested in studying training for non-native Japanese teachers.

Tetsuta KOMATSUBARA, Lecturer
Subjects: Rhetorical Communication Theory
Research fields: My main focus involves the field of figurative language study. Specific attention goes to pragmatic effects of metaphor and metonymy, to creative meaning in wordplay, and to grammatical constructions of figurative language. My theoretical orientation is mainly that of cognitive linguistics, with a special emphasis on conceptual metaphor theory and cognitive grammar.

Miho SAITO, Associate Professor
Subjects: Teaching Japanese as a Second Language (Method)
Research fields: My main research interests are the analysis of modern Japanese grammar, including regional dialects, and the teaching methods of Japanese as a second language to children with foreign roots. In recent years, I have become particularly interested in supporting their acquisition of the academic language.

Junko TANAKA, Professor
Subjects: Second Language Acquisition
Research fields: My research interests include the role of feedback and output in Second Language Acquisition (SLA) processes and the role of individual differences in SLA such as age, language aptitude, and motivation. My current research project deals with how a concept in a second language (L2) that does not exist in the learners' first language (L1) can be correctly or incorrectly segmented and mapped onto L2 morphology. I am also interested in classroom SLA as well as SLA in naturalistic or multilingual contexts.

Yusuke MINAMI, Associate Professor
Subjects: Comparative and Contrastive Linguistics
Research fields: My primary interest lies in analyzing grammatical constructions in English and Japanese from the perspective of cognitive and functional linguistics, which holds that linguistic signs are motivated by human cognitive abilities and communicative purposes. My main works include shedding light on grammatical constructions that have not drawn much attention in the literature and exploring what they reveal about the organization of the speaker's linguistic knowledge.

Human Communication

Human Communication Program presents a wide range of opportunities for research about communication based on human sciences and cognitive sciences. Students can learn advanced knowledge of communication by studying phonetics, sociolinguistics, psycholinguistics, psychology, neurology, and performance science.

A PhD candidate must learn basic skills of statistics and will be advised to master an advanced level of statistics. Research should be performed through evidence-based studies. You have to gather enough data in both quality and quantity before you come to a conclusion.

Our M.A. program is divided into two tracks; the career enhancement track and the researcher track.

Carrier enhancement track is aimed at students who want to develop skills for a career outside of academic societies. Students will acquire up-to-date knowledge and research skills. Students, with guidance from professors and senior students, will submit an MA report.

The researcher track is more aimed at students who want to go on to do a Ph.D. with more focus on research skills than the Career enhancement track. The other main difference is that students submit an M.A. thesis to complete the course.

Students' research themes

· The influence of working memory contents on visual search
· Cueing effects of target location probability and repetition
· A Japanese-Chinese comparison on syntax and sentence delivery
· The traits of tandem learning, seen from scenes of language output difficulties
· Changes in prosody caused by shadowing training of Japanese
· Recognition and acoustic features of attitudes realized in Chinese
· Performer-and-audience dynamics in music communication

Teaching staff

Ryo KITADA, Professor
Subjects: Nonverbal Communication
Focuses of my research are (1) to understand the mechanisms underlying multisensory perception and social cognition and (2) how innate and postnatal experience are interacted with each other to develop them. I use multiple methods (e.g., psychophysics and neuroimaging techniques) to address these questions.

Ryoko HAYASHI, Professor
Subjects: Neurolinguistics
Research fields: Speech science, psycholinguistics. I am researching phonetics in Japanese and other languages as well as experimental solutions to the difficulties in pronunciation for foreign languages. Also, I am interested in speech disabilities, linguistic development and the difference in teaching speech communication between countries.

Kai MAKITA, Lecturer
Subjects: Interactional Grammar
My research interests include cognitive psychology, neuroscience, development, developmental disorders, and linguistics. In my research, I mainly use structural and functional brain imaging to study cognitive functions and behaviors, such as human development, perception, and learning. In carrying out my research, I would like to deepen my research from a cross-disciplinary and interdisciplinary perspective.

Eriko MATSUMOTO, Professor
Subjects: Neuropsychology and Communication
Research fields: Cognitive psychology, neuropsychology, and cognitive neuroscience. I am interested in how human brain represents the higher-cognitive functions such as the visual perception, attention, and social interactions. I would like to make it clearer through brain imaging techniques and experimental psychological methods. I am also interested in the effects of emotional stimuli on cognitive process.

Tomoko TATSUMI, Associate Professor
Research fields: Child language acquisition, psycholinguistics. I am studying young children's language learning by using experimental and corpus-analysis methods. I am especially interested in how our linguistic experience is processed and organized into a grammatical knowledge.

Computers and Communication

The Computer Communication course is a course on using information technology, such as computers and the Internet, for teaching and research. This course teaches the latest online information skills, collection, analysis and sorting of communicative information on computers, and other such immediately useful high-level information processing skills, which will also allow more effective communication in future.

Students' research themes

Analysis of the forms of study in branches of information, Automated classification of literature XML searching method Learning system for IT specialists Error-checker in foreign language learning systems, Utilization of memory mechanism in learning systems, Bottom-up question support system, Communication-based city rating, Reverse onomatopoeia dictionary, User interface, Communication assistance

Teaching staff

Min KANG, Professor
Subjects: Computer Simulation
Research fields: The adaptation of information communication technology to computer education and foreign language education. In particular, I am focusing on using statistics-based approaches to extract the user's preferences and give them the information that suits their needs.

Hidenari KIYOMITSU, Professor
Subjects: Information Systems and Databases
Research fields: I aim to use data at a higher level, through web information systems and databases. The theme is being able to personalize output for each user based on time, place, user profile, access history and so forth.

Takeshi NISHIDA, Associate Professor
Subjects: Applied Computer Science
Research fields: I am researching human-human interaction using info-communication technology, as well as human-computer interaction. In particular, I put focus on (1) developing systems based on reflection of common communication problems such as the difficulty of reaching consensus, giving criticism, or talking in foreign languages, and (2) learning from testing systems developed in actual situations.

Hajime MURAO, Professor
Subjects: Social Systems Science
Research fields: Using "soft information processing" technology and multi-agent systems to research the intelligent actions of humans and other groups of living things, analyzing and adapting the results. The targets include small groups of individuals, society, the economy, and the Internet.

Makiko OYAMA , Associate Professor
Subjects: to be opned in 2024
Research Fields: Educational technology research in university education. In particular, I am focusing on reflection as a form of thinking that deepens learning, analyzing the impact of reflection on learning effectiveness, and developing tools to promote reflection.

Systems of Second Language Education

The graduate program in the Systems of Second Language Education is committed to analyzing a diversity of linguistic phenomena through different modes of inquiry. We examine language through its phonetic systems, acquisition, use in context, and via psycholinguistic models. By valuing the legitimacy and relevance of research at every level of analysis, we aim to help students to build a foundation for language studies. Specifically, we focus on:

- researching language pedagogy by applying knowledge in linguistics, psychology, and related fields
- exploring learners' second language developmental processes from SLA perspectives
- investigating the psycholinguistic and cognitive processes involved in language learning
- researching a range of methods and approaches for teaching literary works
- exploring the environment for language teaching and learning with ICT

Students' research themes

Master's program: Use of Lexical Stress Information in Silent Reading and Speech Production by Japanese Learners of English: Evidence from Eye Movements and Naming Tasks, The Effects of Short-Term Overseas Training and Corrective Feedback on Second Language Writing of Japanese Learners of English

Doctoral program: The automatization of grammatical encoding process during oral sentence production by Japanese EFL learners: A syntactic priming, An investigation of the automaticity in parsing for Japanese EFL learners: Examining from psycholinguistic and neurophysiological perspectives

Teaching staff

Atsuhisa SHIMAZU, Professor
Subjects: Language and Cultural Representation
Research fields: Modern American literature. I am particularly interested in Jewish American literature, and am attempting to decipher Bernard Malamud's novels and short stories from the perspective of expression.

Yasunori TAKAHASHI, Associate Professor
Subjects: Contrastive Linguistics and Cognition
Research fields: Chinese linguistics, phonetics and phonology. I have researched tonal phenomena in Chinese dialects from both phonetic and phonological viewpoints.

Mayu HAMADA, Assistant Professor
Subjects: Language Learning Environments
Research fields: My area of research is psycholinguistics, and I am trying to explore the cognitive mechanisms of L2 comprehension and production especially focusing on syntactic processing in terms of the learners' input and output. I would like to use and adopt findings to classroom teaching.

Daichi HIROTA, Associate Professor
Subjects: Language and Culture I
Research fields: French literature. My object of study is modern French poetry represented by Baudelaire, and I am trying to describe his poetics from a linguistic viewpoint. In addition, I am interested in literary criticism and language teaching through the use of computers and the Internet.

Sachiko YASUDA, Professor
Subject: Linguistic Science (Second Language Acquisition & Foreign Language Pedagogy)
Research fields: My main area of research is in second language writing, particularly longitudinal development of academic literacy of EFL learners.

Rei YASUDA, Lecturer
Subjects: Language and Culture II
Research fields: phonetics in language teaching, contrastive phonetics. I am interested in teaching German pronunciation and currently working experimentally on how Japanese learners pronounce German.

Hirokazu YOKOKAWA, Professor
Subjects: Psycholinguistics and Language Teaching
Research fields: English education studies and psycholinguistics. My main research themes are L2 reading, writing, speaking and listening as well as the cognitive mechanisms for vocabulary, and how all of this might be adapted for practical applications in classes.

Contents in Second Language Education

The aim of the Contents in Second Language Education course is to actively contribute to innovations in language education by training researchers in the methods and directions of Applied Linguistics. In this course, we work with an academic base of linguistics (corpus linguistics, cognitive linguistics, pragmatics, conversation analysis, speech science, grammar, educational science and class theory) and emphasize research with a focus on practical use in the field of education. Through a multifaceted approach to the challenges of teaching other languages, students in this course will be sought after by education agencies all over the world. Even if you haven't specialized in linguistics in your undergraduate studies, we welcome any student with a desire to contribute to the globalization of society through second language education.

Students' research themes

Master's program: English intensifiers, English collocation, English causative verbs, English activating expressions, First and third person German verbs, Japanese katakana, shadowing, phonics rules, Focus-on-form pronunciation aids, English/Japanese code-switching

Doctoral program: Identity and second language use, Developing tests for elementary school English teacher suitability, Formulation in interaction, Japanese compound verbs, Similar forms in Chinese and Japanese, Developing interactional competence

Teaching staff

Shin'ichiro ISHIKAWA, Professor
Subjects: Applied Linguistics II
Research fields: My research fields cover applied linguistics, corpus linguistics, psycho-linguistics, and TESOL (especially vocabulary learning, development and analysis of teaching materials, and language teaching methodologies). I welcome any students who want to consider languages and language educations from a scientific perspective.

Harumi KASHIWAGI, Professor
Subjects: Second Language Learning and Technology
Research fields: Recently, I have been interested in developing a learning system by using the position information of learners and objects in real space. I am also interested in developing a listening-based learning system and a system with an interactive whiteboard. I welcome any students who are interested in developing a learning system with new technology. If you have any questions, e-mail me.

Emiko KIHARA, Associate Professor
Subjects: Second Language Pedagogy
Research fields: My research relates to Cognitive Linguistics, especially to constructions in English. I have focused on the correlation between form and meaning in English (written by the native speaker), and currently I am studying constructions spoken by L2 learners (Japanese college students).

Tim GREER, Professor
Subjects: Second Language Pragmatics
Research fields: I am interested in the relation between linguistic expressions and the way they are used. I specialize in L2 pragmatics, using qualitative investigation methods and detailed, empirical analysis of conversations. I research social activities involving words that come up in ordinary and bilingual conversation, as well as conversation in oral English ability tests. Additionally, I also research conversation analysis, identity construction and interactional competence.

Takeshi SATO, Professor
Subjects: Applied Linguistics I
My research focuses on the cognitive processes of second and foreign language acquisition and aims to apply this perspective to pedagogical recommendations such as the development of teaching materials and instructional design. My research takes a cognitive-linguistic approach, but more recently I have also adopted a socio-cultural approach.

Madoka SERIZAWA, Assistant Professor
Subjects: Applied Contrastive Linguistics I
My main area of research is historical pragmatics, and I especially analyze colloquialism/literary style, construction and vocabulary in print media in early modern Germany. Lately I am also interested in the relationship between text and images.

Xiao CHEN, Lecturer
Subjects: Applied Contrastive Linguistics II
My research interests lie primarily in Chinese syntaxial and phonological history, with a special focus on Beijing Dialect in Qing Dynasty. I analyze the vocabulary, grammar, phonetics, and historical changes of Beijing dialect, using materials such as Manchu-Chinese translation textbooks and Chinese textbooks of the Meiji Period.

Advanced Communication (Joint Research Course in Doctoral Program)

The increasing problem of cultural friction as well as the matter of coexistence with robots, which is a concern we will face in the near future, is nothing if not a communication issue. What is human communication and what cultural differences does it reflect? What roles do languages, nonlinguistic actions, body language and paralanguage play in communication? How can we make use of these in studying foreign languages? The Advanced Communication course is dedicated to using the latest technology to examine these issues, opening new possibilities for communication.

Joint Research with: Advanced Telecommunications Research Institute International (ATR)

Students' research themes

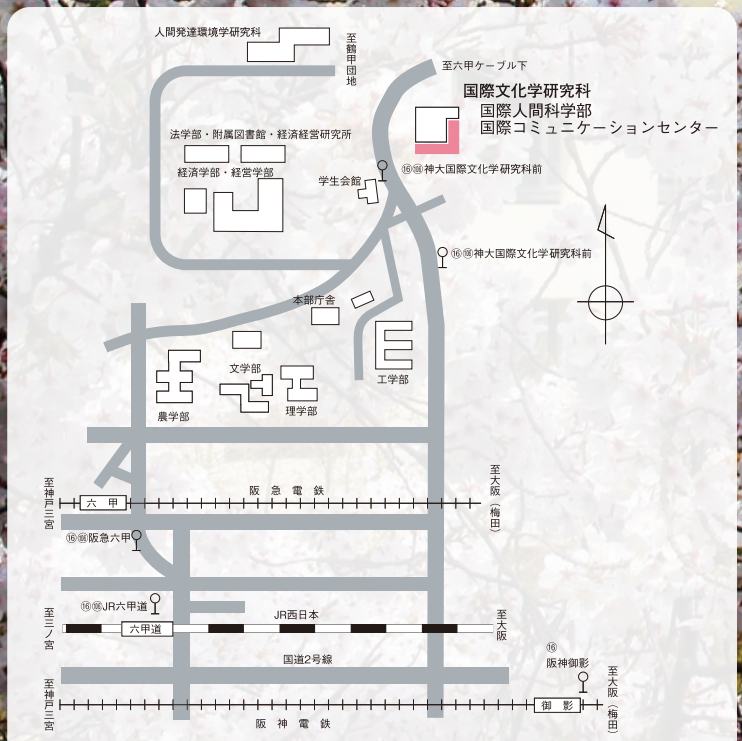
Doctoral program:
· Effects of pronunciation training on foreign language learning
· The role of presenting visualized articulatory gesture in English education

Teaching staff

Akira UTSUMI, Invited Professor
Subjects: Advanced Communication
Research fields: Computer vision, gaze tracking, human-computer interaction

Hidenobu SUMIOKA, Invited Associate Professor
Subjects: Advanced Communication
Research fields: Communication between humans and robots

Carlos Toshinori ISHI, Invited Professor
Subjects: Advanced Communication
Research fields: Multimodal speech communication, paralinguistics, human-robot dialogue interaction.



■交通機関

阪神「御影」・ＪＲ「六甲道」・阪急「六甲」から
神戸市営バス16系統・106系統「六甲ケーブル下」行き
「神大国際文化学研究科前」下車

神戸大学大学院国際文化学研究科
〒657-8501　神戸市灘区鶴甲1－2－1
TEL(078)803-7530　FAX(078)803-7509
http://web.cla.kobe-u.ac.jp